器

350
199

此外、名書ナリ
誠君ニ示サン

特210
879

GLISH GRAMMAR
FOR
BEGINNERS

This possible book
is a reference book

學習院講師
山田巖著

英文法講義

九版

東京建文館藏版

7. 3. 20

はしがき

本書は邦人の難しとする英文法の必須事項を中學生及び受驗生の自修用にとて平易に說けるものなり。素より專門的の述作にあらねば煩瑣なる分類、實用に疎き規則等は悉く之を省き、唯讀む上に將た書く上に必要と思はるゝふしぶしをのみ選び、術語も可成之を避けたり。定まれる譯語なき術語は原名を用ひたれども、一般通用の譯語あるものは夫れに依れり。

從來の文法書に於けるが如き秩序的排列をなさず、外觀の美を趨ふを已めて專ら說明に都合よき順序を採れり。大體は八品詞に分けて講じたれども便宜上他の品詞の部にて說ける箇所もあれば卷末に Index を附して字句の索引に便せり。

大正二年極月

山田巖

This Book is very good for us, since I have read this.

断然名著ダ
賞賛ニ價スル

(山田氏エレーズ)
天下一品他の教科書を凌ぐ程。

目　次

PAGE

總　論 1

名　詞 4

普通名詞 4

複數 5

冠詞 9

The 13

A と *An* 18

冠詞の位置 20

冠詞の省略 22

集合名詞 24

固有名詞 28

物質名詞 31

抽象名詞 35

格 39

形容詞 46

注意すべき形容詞

Some と *Any* 50

Some と *A certain* 53

Any と *Either* 55

Any と *What* 55

Any と *Every* 57

Each と *Every* 58

PAGE

Every other day 60
All と *Both* 61
Both と *Either* 64
All と *Only* 65
The same 66
Such 67
Other 70
Many と *Much* 73
Few と *A few* 75
Little と *A little* 75
數詞 77
疑問形容詞 83
比較 85
No less than と *No more than* 95
Farther と *Further* 98
More 99
Most 99
Later, Latest ; Latter, Last 100
The＋形容詞 101

代名詞 102
人稱代名詞 103
格 104
A friend of mine 107

7-8-27

PAGE

One's own 113
It 115
One 121
疑問代名詞 125
關係代名詞 131

動 詞 154
自動詞と他動詞 154
COMPLEMENT 156
IDIOMATIC TRANSITIVE 165
人稱と數 166
三段變化 173
規則動詞と不規則動詞 175
ACTIVE と PASSIVE 176
TENSE 186
PRESENT 189
PAST 188
Do 189
FUTURE 192
PRESENT PERFECT 193
PAST PERFECT 202
..... 204
..... 205
..... 207
..... 222
..... 226

PAGE
Would 226
MOOD 228
SUBJUNCTIVE MOOD 228
May 238
Can 242
Must 245
Need 247
Dare 249
POTENTIAL MOOD 249
IMPERATIVE MOOD 253
INFINITIVE 256
PARTICIPLE 266
PARTICIPIAL CONSTRUCTION 271
GERUND 275

副 詞 277
副詞の位置 283
注意すべき副詞
Yes と *No* 287
Not 290
At all 294
Scarcely と *Hardly* 296
Little 296
Once と *Ever* 298
Enough と *Too* 299
The other day 302

PAGE
Already と *Yet* 303
Ago と *Before* 304
Quite 305
Very と *Much* 307
Indeed 308
So 309
There 315
The 317

前置詞 319
前置詞の意味
About 319
Above 320
After 321
Against 322
Among と *Between* 323
Across 324
Along 324
At 324
Before 328
Behind 328
Below 329
Beneath 330
Beside 330
Besides 331
Beyond 331

PAGE

But 331
By 332
For 334
From 336
In 338
Into 341
Of 342
On ; Upon 345
Off 349
Out of 349
Over 351
Through 353
To 354
Toward(s) 357
Under 357
Up と *Down* 358
With 359
Within 363
Without 363
前置詞を支配する主なる言葉 364

接續詞 383
And 383
As well as 385
Not only .... but (also) 386
Nor 386

PAGE

Or 387
Either.....or ; Neither..... nor 388
But 389
Yet 392
Still 392
However 393
Nevertheless 393
Only 394
So 394
Therefore 394
Hence 395
When と *While* 396
As 398
As soon as 402
No sooner.....than 402
Scarcely / *Hardly* ... *when* 402
Scarcely / *Hardly* ... *before* 402
Before 403
Till ; Until 405
Since 406
Because と *For* 407
If 410
(Al)though 414
Whether 415
That 416

PAGE
Lest 418
間投詞 418
文 章 420
SUBJECT 420
PREDICATE 421
ADJUNCT 422
文章の種類 425
SIMPLE SENTENCE 425
COMPLEX SENTENCE 427
COMPOUND SENTENCE 430
MIXED SENTENCE 434
文章の換形 435
直接叙法と間接叙法 453
練 習 465

英文法講義

總論

語が集まつて纏つた思想を表はすものを**文章** (Sentence) と云ふ。

A boy.

丈では何等纏まつた考が表はれて居ないから文章とは云はれないが

A boy ran against me.

＝子供が僕にぶつかつた。

There was a boy at the door.

＝玄關に子供が來て居た。

などゝすれば始めて完全な文章に成るのである。

凡そ文章は譬へて見れば人體の樣なもので、頭と體との二つの部分から成り立つて居る。話の題目となる[illegible]頭があつて、其次に其題目に就いて説明する[illegible]ば文章とは云はれない。此頭を主格 (Subject) [illegible]體を賓辭 (Predicate) と云ふ。頭の役目を勤めるものは**名詞** (Noun) である、尤も是は**代名詞** (Pronoun) と云ふ代理で濟ます事も出來る。體を作る主要な部分は**動詞** (Verb) である。動詞は主格の有樣や動作を説明するのに必要缺くべからざるもので、どんな文章にでも動詞のない文章は一つも無い。で動[illegible]言へば胴の樣な

ものである。英語の文章にも手に相當するもの、脚に相當するものが有るが夫は後で説明する。

頭と體とが備はつて居れば立派な人間、何一つ不足なものは無い筈だが、湯屋でならばいざ知らず何時も裸體で計り居られるものではない。帽子、着物、靴、手袋、時計などの必要がある。名詞といふ頭に被せて之を飾る言葉が形容詞(Adjective)、動詞といふ體に着せる着物が副詞(Adverb)である。着物を身體に纏ふのにも釦をかけたり、帶革で締めたり、ズボン吊りで落ちない樣にしたりする。此釦や帶革などの役を勤めるものが前置詞(Preposition)と接續詞(Conjunction)である。前置詞は名詞(又は代名詞)と他の語との關係を示すもので、接續詞は語と語、句と句、文章と文章を結び合せるものである。サーこれで一通り身支度は出來たとは云ふものゝ携帶品はどうする。時計はチョッキに入れて置く人もあればズボンに入れる人もある、又上着のポケットに入れる者も無いとは限らぬ。財布も其通りで一定の置場所はない、適宜に何處へでも這入る。此時計や財布に相當したものが間投詞(Interjection)である。間投詞は人の感情を表はす語で、其置場所が一定して居ない。帽子、ズボン、上着、靴は一定の場所にしかつけられないが間投詞は他の部分と何等の關係もなく隨意に文章の間に挾むから斯う云ふ名前が附いて居るのである。

斯う道具が揃へば何處へ出ても恥かしくはない、是で身支度が完備したのである。英語には隨分語數があるがどの語でも此八つの内に這入らぬものは一つもない。此

語類を名けて八品詞(The Eight Parts of Speech)と云ふ。是を表にして見れば

Adjective NOUN (Pronoun) + VERB Adverb

Preposition
Conjunction
Interjection

今一二の例を擧げて文章の成立を説明しよう。

Many boys and girls were severely injured by the accident .....(a)

=其出來事の爲に大勢の男の子や女の子が重傷を受けた。

と云ふ文章の頭は"boys"〔名詞〕と"girls"〔名詞〕で"and"と云ふ接續詞が此二語を結び附けて居る。そして其頭は"many"〔形容詞〕と云ふ帽子を被つて居る。體は"were injured"〔動詞〕で、着物は"severely"〔副詞〕と"by the accident"〔此三語で副詞の働をする〕である。此"by"は"accident"と云ふ語と"were injured"との關係を示す前置詞である。

My mother, alas! is dead .....(b)

Alas! she is dead .....(c)

(b)に於ては"My"と云ふ帽子を被つた"mother"〔名詞〕が頭で、"is dead"が體。(c)に於ては"she"と云ふ代名詞が頭で體は矢張"is dead"である。(b)の"alas"も(c)の"Alas"も共に『悲哉』の意味の間投詞であるが、此兩文を比較して見れば間投詞には一定の

位置がないと云ふ事、並に他の部分と何等直接の關係がないから省いても矢張立派な文章になると云ふ事が分かる。

以上八種の語を排列して纏まつた意味の文章を作る法、即ち着物の着方が**文法** (Grammar) である。適當な着方を知らないとズボンの前を後ろにしたり、靴の左右を取り違へて穿く樣な滑稽を演ずる。本書では餘り必要でもない分類などは止して、文章を作る上に讀む上に必要な點丈を說明しようと思ふ。

名　詞
(NOUN)

物の名、人の名、動作の名、性質の名など總て名と名の附くものは皆名詞である。其中最も數の多いのが

普通名詞 (Common Noun)

と云ふので同種類のものに普く通じた名稱である。內のヂョンも隣のポチも三軒目のクロも毛色や大さや性質などには差こそあれ、西洋種日本種の別こそあれ矢張皆同じ『犬』である。此同種類のもの全體に通じた名稱 "dog" は普通名詞である。

Man.	Horse.	Apple.
Mountain.	Box.	Pen.

など皆是である。

普通名詞は其類全體に附けた名稱であるから是を一つ二つと數へる事が出來る。一つの物を言ひ表はす場合に使ふ形を**單數** (Singular) と云ひ、二つ以上の物を云ふ時に使ふ形を**複數** (Plural) と云ふ。

邦語では單數の場合でも複數の場合でも名詞に何等の變化をも及ぼさぬ事が多い。『此本に一圓出した』と云ふ文章と『机の上にある本を皆兄さんとこへ持つていつてお呉れ』と云ふ文章とを比較すれば、前後の續き合ひから始の文中の『本』は一冊の本で、後の文のは澤山の本だと云ふ事が判かる。けれども『本』と云ふ字の形其物には少しの變りもない。尤も『子供等』とか『あの人達』とか云ふ複數の形も有る事は有るが、斯う云ふ複數形を使ふ事は極く少ない。之に反して英語では單複の區別が此上もなく八釜しいから一つでも之をおろそかにしてはならない。

複　數

大抵の普通名詞は單數の語尾に "s" を附けて複數とする、例へば

Table——tables.	Cat——cats.
Pen——pens.	Book——books.
Name——names.	Cap——caps.
Monkey——monkeys.	Roof——roofs.
Car——cars.	Cloth——cloths.

單數名詞の語尾が清音ならば之に附け加へた "s" も清音に發音し、語尾が濁音ならば其 "s" も濁音に發音する。

併し清音とはどんな音で、濁音とはどんな音か。話は少し横路に逸れるが、吾々日本人の清濁音に關する智識は非常に不正確なものである。「ハ」の濁音が「バ」で「パ」は其半濁音であるなどゝ間違つた事を信じて少しも疑はぬのは先入主となつた御蔭である。實際は「ハ」と「バ」とは何等關係のない音である。「パ」の濁音が「バ」と云つた方が餘程正確に近い。又普通清音だと思はれて居る五十音は實は皆悉く濁音である。それでは濁音とは一體どんな音であるか。濁音と云ふのは聲帶（喉にある膜）に響く音で、指の先を喉にあてゝ發音して見ればすぐ分かる。試しに五十音を片端から皆發音して御覽、指の先が皆ブルブルッとふるふ、是れが其音は濁音であると云ふ證據になる。それでは清音とはどんな音か。清音とは聲帶に響かぬ音である。"T", "p", "k", "f", "s", "sh", "ch", "th" などの音は清音である（"t" を「ティー」"p" を「ピー」と云ふのは字の名であつて其字の音ではない、「ト」「プ」の樣なのが字の音である）。上の例でも "table", "pen", "name" 抔の語尾は皆濁るから其次に附け加へた "s" も濁る。但し日本流に「ズ」と發音しては可けない、「ズ」から「ゥ」を除いた音で輕く發音する。"Cat", "book", "cap", "roof", "cloth" は皆語尾が清音だから "s" も濁らぬ。

併し "kiss" とか "fox" とか云ふ語の次に "s" の音を加へて發音しても "s" を附けたのか附けないのか聞分けが附かぬ。そこで斯う云ふ樣な語尾、即ち "s", "x", "sh", "ch" で終る語には "es" を附けて輕く『イズ』の樣に發音する。

Kiss——kiss*es*. Fox——fox*es*.
Dish——dish*es*. Inch——inch*es*.

又單數名詞の語尾に "o" が一つあつて其前に子音字がある時にも "es" を附けて之を複數とする。

Hero——her*oes*. Potato——potat*oes*.

但し "bamboo" は語尾に "o" が二つあるから "s" 丈を付けて "bamboos" とすれば可い。"Piano" は例外で "pianos" とする。

又語尾に "y" があつて其前に子音字のある語の複數を作るには "y" を "i" に變へて "es" を加へる。

Fly——fl*ies*. City——cit*ies*.

"Day" や "boy" は語尾は "y" でも其前の字が母音字だから唯 "s" を附けて "days", "boys" とすればよろしい。

語尾が "f" 又は "fe" で終る語が複數になる場合には其語尾が "ves" に變ずるものもあれば、唯 "s" を附けた丈で可いのもある。是は一語一語によつて違ふので一般的な簡單な規則を設ける事は出來ない。

Leaf—lea*ves*. 〔但し Reef—reef*s*〕
Loaf—loa*ves*. 〔但し Roof—roof*s*〕
Life—liv*es*. Wife—wiv*es*.
Knife—kniv*es*. 〔但し Safe—safe*s*〕
Thief—thiev*es*. 〔但し Chief—chief*s*; handkerchief—handkerchief*s*〕
Half—hal*ves*. Calf—cal*ves*.
Wolf—wol*ves*. 〔但し Dwarf—dwarf*s*〕
Wharf—whar*ves* or wharf*s*.

以上の外不規則なのが少しある。

Man—men.
Woman—women (*wim'en*).
Foot (*fut*)—feet. Tooth—teeth.
Ox—oxen. Child—children
Mouse—mice.
Sheep—sheep. Deer—

Latin や Greek の複數を其儘使ふのがある。
Focus—foci (焦點). Formula

Axis—axes (軸). Oasis—oases (砂漠中の沃地).
Phenomenon—phenomena (現象). Series—series (連續).
Species—species (種族).

名詞の中には兩樣の複數形を有するものがある。

Brother— He has two *brothers*. (肉親の兄弟)
Our *brethren* are already in the field. (〔四海〕同胞)

Cloth— These *cloths* are made in Japan. (織物の種類)
He was stripped of his *clothes*. (衣類)

Pea— They are as like as two *peas*. (一粒二粒と數ふる時の豌豆)
He gave me a bushel of *pease*. (集合的に見た豌豆)

Penny— I have three *pennies*, but no silver coin. (ペニ銅貨の數)
I bought it for three *pence*. (金高)

次の名詞は括弧内の意味の時には常に複數の形にする。

Tongs (火箸); scissors (鋏); compasses (コンパス).
Spectacles (眼鏡); trousers (ズボン); drawers (ズボン下).
Clothes (着物); arms (武器); colours (旗).
Shavings (鉋屑); savings (貯蓄金); earnings (儲け高).
Ethics (倫理學); mathematics (數學); physics (物理學).
News (報知); thanks (感謝); riches (富).
&c.

數量や年月を表はす複數名詞の前に形容詞が無い時には其前に "several" か "many" が略されたものと見るべきものである。

Weeks passed without a line from him.
=彼から短き便りもなくて幾週間も經過した、何十日經つても葉書一枚よこさぬ。

I have known him for *years*.
=僕は彼を永年知つて居る。

Thousands of students yearly come to Tokyo.
=千人と云ふ學生が毎年東京へ來る。

普通名詞とは離る可からざる密接な關係を有する冠詞と云ふものがある。

冠詞 (Article)

冠詞とは名詞の前に置く冠詞(かむりことば)ではあるが、雅文の枕詞とは全然違つた性質のものである。『鷄がなく東の國』の『鷄がなく』は唯語調の上から飾につけた言葉で、全文の上から見て何等の意味もないが、冠詞はこんな洒落に使ふ言葉ではない。名詞の頭に附ける言葉だから形容詞には違ひないが、普通の形容詞とは餘程趣を異にして居るから特に此名が設けてある。

『總論』の處で形容詞は頭に被る帽子の樣なものだと云つた。が帽子は唯頭の保護のために又飾のために被るものであるから

This is a *sharp* knife.

中の形容詞 "sharp" を省いて

This is a knife.

として見ても文法上矢張完全な文章で少しの缺點もない。即ち帽子を脱いでも矢張完全無缺な人間である。併し今 "a" なる冠詞を除いて

This is sharp knife.

とすれば不完全な文章と成るから "a" は此文章には必要缺くべからざるもので、決して之を略する事は出來ない。人體に譬へて云へば丁度髮の樣なもので、是も矢張人體の必要な一部分である。斯くの如く冠詞と名詞とは

實に密接な關係があるから冠詞は名詞の一部分だといつても差支ない位である。

冠詞は "the", "a", "an" の三つしか無い。"The" は一字離して發音する時や强い意味に用ひた場合には thē と長く發音し、普通の場合に於ては母音の前では thĭ, 子音の前では thu と發音する。

序ながら茲に母音と子音との區別をして置かう。『母音は "a", "e", "i", "o", "u" の五字である』と誤解して居る人が實に多い。"a", "e" 等は文字であつて音ではない。同じ "a" でも場合によつて色々な發音 (ă, ā, ä, á, ä, â, ā) に成る。文字は音ではない。"A", "e", "i", "o", "u" は普通母音の發音を生ずる文字ではあるが、此等の文字は必ずしも母音を生ずるとは限らない。

それでは母音とはどんな音か。母音とは喉から出た音が何物にも遮られない場合の音である。「イ」などを發音する時には口腔を平たくはするが決して音の邪魔をするものは無い。唇喉舌齒などで邪魔をしない音ならば皆母音。之に反して色々なもので邪魔されて出た音が子音。例へば "k" (ク), "g" (グ) は喉で邪魔した音で、"p" (プ), "b" (ブ) は唇で邪魔をした音である。

"A" と "an" とは同じ意味の語である。但し "a" は子音の前に置き、"an" は母音の前に置く。其次に來る言葉は形容詞であらうと名詞であらうと兎に角母音の發音で始まれば "an" を用ひ、子音で始まれば "a" を使ふのである。

A man. *An* uncle.
An old man. *A* young uncle.

其次の語が "h" で始まつて居ても其 "h" が Silent のときは勿論 "an" を使ふ。

An hour. *An* honest man.

"U" を以て始まつても子音の發音の事がある。"*U*mbrella", "*u*rn" などの "u" は唯口腔の形を變へた丈けで出る音で無論母音だから其前には "an" を置くが、"*u*niversity", "*u*seful" などの "u" は舌面と上顎とで空氣の通路を狹くし邪魔をされて出た子音、即ち yu の音であるから

A *u*niversity. *A* *u*seful metal.
A *u*surper. *A* *u*surer.

『ユー』の發音になつたら皆 "a" を附すると思つて差支ない。又 "one-eyed man" に不定冠詞をつけるのにも、"one" は "o" で始まつて居るけれども其音は wun の音であるから "a" をつける。

"An" と其次の語とを續けて讀む時に其發音に注意しなければならない。"An uncle", "an apple" を『アン アンクル』『アン エァプル』と一語一語別々な發音をするのは誤である。必ずや續けて『アナンクル』『アネァプル』の樣に讀まなければならぬ。邦語でも『觀』(クヮン)と『音』(オン)とを續けた場合に『クヮンオン』と云ふ人は誰もあるまい。誰しも『淺草のクヮンノン』と云ふ。『萬葉集』も『マンニョウシウ』と讀んで『マンヨウシウ』と讀まぬと同じ事である。

"A" は『一つ』、"the" は[illegible]意味ではあるが "one" や "that" よりも意味[illegible]邦語では『机の上に本がある』といへば其本は『一冊の本』の者で、『僕の今讀んで居る本は面白い』といへば其本は『今讀んで居る

あの本』といふ意味ではあるが、邦語では一々『一冊の』とか『あの』とか云ふ言葉を使はない。けれども英語は非常に精確な小八釜しい國語であるから斯くの如く邦語で略して言はない樣な意味の弱い場合でも英語では一々名詞の前に "a" や "the" を置いて度毎に其旨をことわらなければならぬ。

但し邦語で『タツタ一册しかない』とか『あの本は此本より面白い』とかいふ樣に其意味を明かに言葉に言ひ表はす樣な場合には英語でも "one" とか "that" とかを使ふ。

換言すれば話を聞く人に何の話であるかと云ふ事が判かる樣な場合には "the"（**定冠詞**と云ふ）を用ひ、然らざる時には "a" 又は "an"（之を**不定冠詞**と云ふ）を其名詞の前に置く。

單數普通名詞は以上二つの場合の孰れかであるから次の規則が成立つ。

單數普通名詞には必ず其前に冠詞か又は冠詞の代用語かを置かなければならぬ。

冠詞の代りと成る言葉は "one", "this", "that", "my", "your", "what" などである。

That girl has *a* pretty flower.

＝あの女の子は美しい花を持つて居る。

There is *a* book on the desk.

＝机の上に本がある。

The book I am reading is very interesting.

＝僕の讀んで居る本は大層面白い。

Man has only *one* nose.

＝人には鼻は一つしかない。

This book is heavier than *my* dictionary.

＝此の本は僕の辭書より重い。

What tree is that?

＝あれは何の木か。

The.

(1) "The" は話相手に今どの物の話をして居るのかどの人の事を話して居るのかがよく分かる樣な場合に使ふと云つた。其場合は三つある。

(a) 今『公園で乞食と娘の子に逢つた』と云へば其乞食や娘は始めて話題に上つたのであるから話相手には誰の事か分からぬ。だから "a" を用ひて

I met *a* beggar and *a* girl in the park.

と云ふが、其次に『其乞食は娘の親に違ひないと思つた』と言はんに "beggar", "girl" は二度目に話に出て來たので聞く人にも公園で逢つたあの乞食だな、あの娘だなといふ事が分かるから "the" を附け

I thought *the* beggar must be the father of *the* girl.

と云ふのである。

(b) 又假令始めて話頭に上つた名詞でも此名詞を形容する語句によつて其意味が制限され誰の事であるか、どれの事であるか先方の人に分かる樣な場合がある。此場合にも勿論定冠詞の "the" を附ける。

The longest river in Japan.

日本で一番長い川と云へば一つしかない、石狩川の事にきまつて居る。斯くの如く最上級の形容詞には常に"the"を附けなければならぬ。

The rent *of this house* is twenty yen a month.

＝此家は家賃が二十圓だ。

The house *I was born in.*

＝僕の生れた家。

The 2nd year of Taishō.

＝大正二年。

We used to attend *the same* school.

＝もとは同じ學校に出て居た。

He is *the only* foreigner in this city.

＝外人で此市に居るのは彼計りだ。

しかし制限句があればとて必ずしも"the"を附けるとは限らぬ。たとひ制限句があつても一つと定まらぬ場合、先方の人にどの人の事をいふのか分からぬ場合には矢張定冠詞は使はれない。學校には校長は一人しかないから

The principal *of the school.*

といふが"of this school"といふ制限句がついて居ても生徒は多數居るから單に『此學校の生徒』といつた丈ではどの生徒の事か相手の人には分らない。だから不定冠詞を使つて"*a* student *of this school*"と云はなければならぬ。

(c) 又制限句も無く又始めて出た名詞で前に受ける

名詞がなくとも先方の人に分かる場合がある。例へば同じ學校の生徒同志が『校長が病氣だ』といへば彼等の學校の校長だと云ふ事は言ずして知れて居る。だから

The principal is ill.

と云へば夫で充分である。此類例を擧ぐれば

There is some one at *the door.*

(此家の玄關)

Let us take a walk in *the park.*

(行きなれた公園)

The longest river in *the world.*

(吾々の住まへる世界)

The tailor has come.

(平常頼みつけの洋服屋)

The sun.	*The moon.*	*The sea.*
The sky.	*The right* (右).	*The west.*
The Emperor.	*The governor.*	*The doctor.*
The Post-Office.	*The station.*	*The country.* (田舍).
The gate.	*The fire.*	*The ceiling.*

だから複數名詞の前に"the"を置けば其物又は人の全部を表はすと云ふ事が分かる。

The novels are all amusing.

＝此小說は皆面白い。

The teachers of our school are very kind.

＝僕等の學校の先生達はたいへん親切です

次を比較せよ。

He is *a teacher* of our school.
They are *teachers* of our school.
〔教員全部ではない〕
They are *the teachers* of our school.
〔教員全部である〕

Cherry-trees blossom in spring.
（櫻は春花咲く）
It was April, and *the cherry-trees* were in full blossom.
（時は四月で、其土地の櫻は皆滿開であつた）

(2) **THE＋單數普通名詞が其類全體を代表する事がある。** 次の名詞は皆此代表單數で或る特別な物を指したのではない。

The dog is a faithful animal.
＝犬は忠實なる動物なり。
The pine is an evergreen.
＝松は常盤木である。
She plays well on *the piano*.
＝あの女はピアノが上手だ。

併し "man"（人、男）; "woman"（女）は其例外で、是等兩語の代表單數には冠詞を附けない。

Man is lord of the creation.
＝人は萬物の長なり。
Man alone has the gift of speech.
＝言語を有するものは人間ばかり。

Woman is not inferior to *man*, but quite different.
＝女は男よりも劣つたものではなくて全く別物である。

其類一般の事を云ふ言ひ方が三通りある、第一は今云つた代表單數、第二は不定單數（A＋單數）、第三は不定複數（冠詞なき複數）である。

The horse is a useful animal.
A horse is a useful animal.
Horses are useful animals.

(3) **THE＋單數名詞が抽象名詞の意味と成る事がある。**

The pen is mightier than *the sword*.
＝筆の力（文）は劍の力（武）に勝さる。

What is learned in *the cradle* (＝infancy) is carried to *the grave* (＝death).
＝赤ん坊の時に覺えた事は死ぬまで忘れぬものだ。
He gave up *the sword* for *the plough*.
＝彼は劍を棄てゝ鋤を執つた、武人生活をやめて田園の人となつた。
When one is poor, *the beggar* will come out.
＝人は貧乏すると乞食根性が出るものだ。

The bar『辯護士の職』。 *The bench*『裁判官の職』。
The head『智力』。 *The heart*『情』。
The father『父の情』。 *The man*『人情』。

(4) THE は其他多くの成句に使はれる。例を擧ぐれば

In the morning『朝』。 *In the rain*『雨のいゝる所で』。
In the sun『日向で』。 *In the shade*『陰で』。
In the dark『暗闇で』。 *In the*
To the point『要領を得て居る』。 *In*
Out of the question『思ひもよらぬ』。

A と An.

(1) 不定冠詞は『一つ』の意味ではあるけれども邦語で『一つ』と言はぬ位意味の弱い場合に使ふと云ふ事は前にお話をした。

(a) 『～は……である』と云ふ場合。

He is *a* student.

＝彼は學生だ。

This is *an* apple.

＝是は林檎である。

是等の複數は名詞を複數にしさへすれば可い。"Some"は附けない。

They are *students*.

These are *apples*.

(b) "Have", "want", "give", "there is" 等と共に用ふる場合。

I have *a* novel.

＝僕は小説を持つて居る。

There is *a* carriage at the door.

＝玄關に馬車がある。

是等の複數には"some"を使ふ。〔參照: P. 50〕

I have *some novels*.

There are *some carriages* at the door.

否定は (a) の場合には "not a" を用ひ、(b) の場合には "no" を使ふ。

He is *not a* student.

This is *not an* apple.

I have *no* novel.

There is *no* carriage at the door.

但し打消の意味を一層強めん爲に (a) の場合に "no" を用ひ、(b)の場合には "not a" を使ふ事がある。一體に普通でない形を使へば意味が強くなるものである。

He is *no* scholar.

＝彼は學者でも何でもない。

Osaka is *no* place for a young man.

＝大阪は決して青年を置くべき處ではない。

There is *not a* cloud in the blue sky.

＝碧空一點の雲翳を止めず。

(2) 併し不定冠詞が "one" と同意味で同一の力で使はれる事がある。

I am going to stay here *a* day *or two*.

＝此處には一兩日滯在する積りだ。

He rose *at a bound*.

＝彼は一足飛びに昇進した。

One thing *at a time*.

＝一時に一事、物は一つ宛處理するもの。

邦語でも『同じ事』を『一つ事』と云ふ樣に "a" を "the same" の意味に使ふ事がある。此時には常に "of" が其前に附く。

Birds *of a* feather flock together.

＝羽毛の同じ鳥は一所に集まる、友は類を以て集まる。

Two *of a* trade seldom agree.

＝同商賣の二人は滅多に一致せぬ、商賣仇は仲の惡いもの。

We two are *of an* age.

＝吾々二人は同年だ。

(3) 不定冠詞が "any" 『どれでも』の弱い意味になつて、其類一般の事を云ふ時に使はれる事がある。

A child who has no parents is called an orphan.

＝親なき子を孤兒と云ふ。

A dog is more faithful than a *cat*.

＝犬は猫より忠實だ。

此場合には不定複數と全然同意味である。〔參照： P. 17〕

A dog is more faithful than *a cat*.

＝*Dogs* are more faithful than *cats*.

(4) 不定冠詞が "per" 即ち『毎に』の意味となる事がある。此場合に "one" を代用してはならぬ。

I write home three times *a month*.

＝僕は月に三度國へ手紙を出す。

This tea costs two yen *a pound*.

＝此茶は一斤二圓だ。

(5) "of a" で "-like" の意味となる事がある。

A mountain *of a* wave＝山なす浪。

A palace *of a house*＝御殿の樣な家。

That fool *of a* Kato＝あの馬鹿の〔樣な〕加藤。

以上の外に不定冠詞の附いた成句が數多ある。主要なるもの四五を列擧すれば

At a loss 『窮する』。 *As a rule* 『概して』。

On an average 『平均』。 *With a will* 『熱心に』。

To *have a mind* 『したい樣な心がする』。

It is a pity 『殘念だ』。

冠詞の位置

冠詞の位置は凡て名詞に附く形容語の前である。

The most interesting *book*.

A very energetic *man*.

けれども次の場合は例外である。

What / Such } a＋ADJECTIVE＋NOUN.

How / So / As / Too } ＋ADJECTIVE＋a＋NOUN.

All / Both / Half / Double } the＋NOUN.

Quite / Rather } a＋NOUN.

What a tall man he is!

＝何と丈の高い人だな。

I never saw *such a* tall man.

＝僕は斯んなに丈の高い人を見た事がない。

This shows *how* honest *a* man he is.

＝是によつて見れば彼はどんなに正直だかゝ分かる。

I never saw *so* energetic *a* man.

＝僕は斯んな精力家を見た事がない。

He is *as* honest *a* man as ever breathed.

＝嘗て此世に生息した誰にも劣らぬ正直な男だ。

This is *too* g

＝餘りの

All the stude

Both (*the*) brothers.

Half the sum ; *half an* hour. 〔但し *a* full *half*-hour〕

Double the sum (倍額). 〔但し *the double* end (二重の目的)〕

I found him *quite a* different man.

=來て見れば彼はスッカリ變つた人間になつて居た。

He is *rather a* proud man.

=彼はちと高慢だ。

◎冠詞の省略

前にも言ふ通りに單數普通名詞には定冠詞か不定冠詞を附けなければならぬ筈ではあるが、次の場合は例外で常に之を省略する。

(1) 稱號

(a) 稱號が名の前に附く時。

King Edward. *Admiral* Togo.

Dr. Nitobe. *Prof.* Murata.

"Emperor" は稱號には違ひないが、是は習慣上 "the" を附けて "*the Emperor* Godaigo" など丶云ふ。

"Professor" は稱號であるが "teacher" は稱號ではないから "*Teacher* Murata" とは云はぬ。

"*Uncle* George" (ヂョーヂ叔父さん); "*Sister* Ann" (アン姉さん); "*Mount* Asama" (淺間山); "*Lake* Biwa" (琵琶湖)などは皆之に倣つた形である。

(b) 稱號が同格名詞と成つて居る場合。

George V., *King* of England.

=英國 ヂョーヂ五世。

次の三つを比較せよ

King George.

The King of England.

George, *King* of England.

"Father", "son" も此形に倣つて "Kiyomori, *father* of Shigemori"; "Shigemori, *son* of Kiyomori" など丶云ふ。

(c) 稱號が Complement と成つて居る場合。

George V. is *King* of England.

He became *President* of the United States of America.

He was made *King*.

(2) 意味の關聯した二つの名詞を一對に並べた場合。

They are *man and wife*.=彼等は夫婦だ。

Mother and child are doing well.=母子共肥立よろしく候。

They eat with *knife and fork*.=彼等はナイフとフォークで食べる。

He laboured *night and day*.=彼は晝夜の別なく働いた。

He sits up till late *night after night*.=彼は毎晩毎晩夜更しをする。

The children are walking *hand in hand*.

=子供が手に手を取つて歩いて居る。

He went begging *from door to door*.

=彼は軒別に乞食をして歩いた。

He came along (with a) *book in* (his) *hand*.

=手に本を携げてやつて來た。

(3) 前置詞と名詞とで成句を

The ship is now *at sea*.=其船は今

He has *gone to sea*.=船乘りになつた。

Don't talk *at table*.=食事中に話をするな。

The captain is *on board*.=艦長は在艦。

I will inform you *by letter*.=手紙で御知らせ

We all went *on foot*.=皆徒歩で行つた。

(4) 動詞と名詞とで成句をなした場合。

He *keeps store* on the Ginza.＝彼は銀座で店を出して居る。

The examination *took place* on the tenth.＝試驗は十日にあつた。

I *took ship* at Yokohama.＝僕は横濱で乘船した。

(5) 其他

Y*oung man*, your kite is very high. 〔呼掛けの名詞〕

＝やあ君、大變凧が高く上つたね。

Hero as he was (＝though he was a hero), he shuddered at the sight.

＝勇者の彼も其光景を見て戰慄した。

I followed the army *as interpreter*.

＝僕は通辯と成つて從軍した。

集合名詞 (Collective Noun)

は一箇の物又は一人の人に附けた名稱ではなくして集合體に附けた名である。自分の内は三人家内、御隣は七人、三軒目は十二人家内とすれば三人でも七人でも十二人でも其人數に多寡こそあれ各一つの團體をなしてゐる。其團體につけた名稱"family"(即ち『家族』)は集合名詞である。一つの團體に附けた名前であるからには如何に人數が多からうとも"many family"とは云はれない。其團體が大きな團體なのだから"a large family"としなければならぬ。"Family"は狹い意味に用ひると一人の母親から生れた子供全體をひつくるめて云ふ意味になるから『あの女には子供が澤山ある』といふ文章を譯する場合に、"children"を用ふれば"many"を使つて

She has *many* children.

といふが"family"を使ふと"large"を用ひて

She has a *large* family.

と云はねばならぬ。一軒の家族が"a family"ならば隣の家族も"a family"であるから、そんな團體が幾つも幾つもあれば無論複數になつて

There are only twenty *families* in this village.

といふ事が出來る。即ち冠詞や單複數の關係は普通名詞と同樣である。其他集合名詞の例を擧ぐれば

Nation (國民). Fleet (艦隊).

Army (軍隊). Committee (委員).

唯是丈ならば普通名詞とさしたる違ひはないけれども茲に一つ六ケしい事がある。と云ふのは動詞との關係で、たとひ同一の"family"といふ字でも、唯一つの團體と見做した場合と、其團體の個人々々の意味に用ひられた時とは其動詞に變化がある。『家族が多い』といふ場合には其塊りが大きな塊りだといふ事だから勿論一つの團體としての御話。だから

His family *is* large.

と單數を用ひるが、『あの人の家族は達者だ』とか『病氣だ』とかいふ場合には、病氣になるとか壯健だとかいふのは一つの球の樣に見做した團體の働きではなく、其家の人々が皆打揃うて病氣だとか壯健だといふ意味であるから、"family"といふ字は形こそ單數であれ其意味は"the members of the family"(其内の人々)即ち復數の意味である。だから複數動詞を用ひて

His family *are* all very well.

としなければならぬ。又同じ"committee"といふ語でも、『其委員は十五名よりなる』と云ふ場合には其委員の各員々々を指すのではなくして一箇の團體としての話であるから單數の意味であるが、『委員の意見がわかれた』といへば"the members of the committee"即ち委員の人達の意見の意味であるから複數の意味になる。

The committee *consists* of fifteen members.

The committee *were* divided in their opinions.

集合名詞の中には單數の形であり乍ら常に複數の意味に用ひるものがある。此等の語は不定冠詞も附かなければ又複數の形にもならぬ。其最も普通なるものは"people"(人々、世人)である。尤も此"people"が『國民』の意味に用ひられた時には一國民二國民と數へられるから"a people", "two peoples"といはれるが、『世間の人々』の意味の時は決して"a"もとらず又複數の形になる事もない。其癖意味はいつも複數の意味であるから動詞は複數を用ひて

People say that he is not rich.

=その人は金持ではないさうだ。

Some people are foolish enough to think so.

=世間には愚にもそんな事を考へて居る人もある。

"People"には"many", "few"又は數詞をも附ける事が出來る。一體集合名詞は言葉毎に色々な用法があるから一語一語に就いてよく研究する必要がある。

名詞には三種ある。

第一類　普通名詞の樣に複數ともなれば、不定冠詞をもとるもの。

An army, armies.　　A family, families.

A fleet, fleets.　　A committee, committees.

A nation, nations.　　A party, parties.

He has *a large family.*

The family are all well.

Those men have *families.*

All *the families* are rich.

第二類　形は常に單數で複數の意味を持つもの。

People (人々), cattle (牛), clergy (僧侶), nobility (貴族), cavalry (騎兵隊).

The cavalry are taking dinner.

=騎兵隊は今食事中。

People say that there is going to be a war.

=戰爭が有るだらうといふ世間の評判だ。

In England, *the nobility* are wealthy.

=英國では貴族は金持だ。

比較:—

The cavalry was victorious.
(其騎兵隊は勝利を得た)
〔一團隊としての働〕
The cavalry (=the cavalry soldiers) *are* poorly mounted.
(其騎兵は皆下等の馬に乘つて居る)

The Chinese are an industrious *people.*
(支那人は勤勉なる國民である)
Asia is the home of many *peoples.*
(亞細亞には數多の國民が居る)
The people love their king.
(人民は王を愛す)
People say that he is rich.
(世間では彼は金持だと云ふ)

Ten *people* (十人); many *people* (多くの人達); the *people* present (居合した人々).

Cattle are raised here in great numbers.
(此土地では盛に牛を飼ふ)

Those cattle are all three years old.
(此牛は皆三歳だ)

注意:—"Cattle" は "people" と同様に "those" などを形容詞として取るけれども、數詞は之に附けられない。其數を云はんとする場合には "fifty *head* of cattle" の如く "head" といふ字を使ふ、そして此場合に使ふ "head" は複數の形にしない。

A people which is civilized, *knows its* own interests.
(文明國民は己が利益を知る)

People who are educated *know their* own interests.
(教育ある人は己が利益を知る)

第三類　常に單數の形で、複數の意味に用ひらるゝもの。

Furniture (家具); clothing (衣類); food (食物).

There is *little furniture* in the house.
=此家には道具は少しか無い。

A chair is *an article* [又は *a piece*] of *furniture*.
=椅子は一つの家具である。

People in cold countries need *much clothing*.
=寒國の人は衣類が澤山必要だ。

The tailor makes coats and other *articles* of *clothing*.
=仕立屋は上着其他の衣類をこしらへる。

固有名詞 (Proper Noun)

誰か特別の人や山や川の話をしようと思つても人や山や川は無數にあるから普通名詞だけでは充分に話が出來ない。是等に一々特別の名を附けて "Kato" とか

"Fuji" とか "Mississippi" とか云へば他のものと區別が出來て誰の事をいふのか、どの山、どの川の話をして居るのかがよく分かる。斯くの如く箇々の物や人に特別に附けた名が Proper Noun である。固有名詞は地名 (Tokyo; Japan; Asia) や、人名 (Yoshida; John) や、山 (Mt. Fuji; Mt. Everest) 川、湖、船、學校、書籍などの名ばかりではなく、月の名 (January, February)、七曜の名 (Sunday, Monday)、祭日 (Christmas, Kigensetsu) なども皆是に屬する。そして頭字は皆大文字 (Capital letter) を以て始める。『太陽』、『地球』、『月』は皆特別なものゝ名であるから固有名詞でなければならぬ筈ではあるが、此等は習慣上例外で普通名詞として用ひる。但し定まつたものを云ふのであるから常に定冠詞がつく。

The sun is much larger than *the moon*.
=太陽は月よりも餘程大きい。

前にもいふ通り固有名詞は其物だけに特別に附けた名前であるから不定冠詞を附ける事もなく、又複數にする事の有らう筈もない。また『其の』とか『此の』とかいふ意味の冠詞を附け加へて他のものと區別する必要の有らう筈もないが兎角物事は一概には行かぬものである。固有名詞の中にも他の固有名詞との區別を立てる爲に常に "the" の附くのがある。其重なるものを擧ぐれば第一に河である。河は流れて海に注ぐ。海には灣あり海峽あり、船は之に浮んで居る。

The (River) Am'azon; *the* Japan Sea; *the* Pacific; *the* Persian Gulf; *the* Strait of Gibraltar; *the* "M

但し"Bay"は、其次に"of"が來る場合には無論"the"を附けて"*the* Bay *of* Tokyo"などゝするけれども、名詞が"Bay"の前に來た場合には定冠詞を使はないで"Tokyo Bay,""Manila Bay"などゝいふ。

同じく水の系統でも湖水は例外で何もつけない。

Lake Biwa〔但し *the* Lake *of* Biwa〕; Lake Ontario.

陸の方では

官衙、學校、病院等の公共建物。(其處へは毎朝新聞も來れば雜誌も來るし又書物も備へ附けてある)。

The Tokyo-fu ; *the* Seisoku Eigo Gakko ; *the* Juntendo ; *the* Yasukuni Shrine ; *the* Asahi ; *the* Eigo-no-Tomo ; *the* Bible.

同じく書物の名でも人名を其儘書名とした場合には冠詞を附けない。

I am reading *Robinson Crusoe*.

今一つは複數の形の固有名詞。

The United States of America (北米合衆國); *the* Himalayas (ヒマラヤ山脈); *the* Philippins (ヒリッピン群島); *the* Tokugawas (德川家)。

地名でも次の樣なのは常に定冠詞を附ける。

The Orient (東洋); *the* Far East (極東); *the* Hague (ヘーグ); *the* Crimea (クリミーア)。

"*Station*"や"*Park*"には普通"the"を附けない。

Ueno Station; Hibiya Park.

"*Street*"と云ふ字が附いた固有名詞には"the"を附けないで"Lombard Street"などゝ云ふが、さもない時には通りや街道に定冠詞を附ける。

The Ginza; *the* Tokaido.

[illegible]詞が普通名詞として使はれる事がある。

He is *an Edison*.

＝彼はエヂソンの樣な大發明家である。

Japan is *the England* of the Far East.

＝日本は極東の英國なり。

He is Mr. Hara, and the young man who is speaking with him is *a Mr. Tanabe*.

＝あの方が原さんで、原さんと話をして居る人は田部さんと云ふ方です。

There are *three Tanakas* in our class.

＝僕の級には田中と云ふ人が三人ある。

This is *a* genuine *Masamune*.

＝是は本物の正宗(の作)だ。

物質名詞 (Material Noun)

は定まつた形のないものの名である。今玆に壜があると假定する。壜には定まつた形があつて、一つ二つと數へられるから無論普通名詞であるが、今之を庭の石に投げつけて毀すと假定する。其こはれた缺けは最早壜ではない、"glass"である。其かけをどんなに細かく毀して見ても矢張"glass"である。して見ると"bottle"には定まつた形があるが"glass"には定まつた形はないといふ事が分かる。又"paper"即ち紙は一枚二枚と數へる事が出來るから普通名詞ではないかと思はれるが、しかし之をどんなに小さく引裂いても切つても矢張紙に違ひない。して見ると紙にも定まつた形はないといふ事が分かる。斯ういふ樣な名詞が物質名詞[illegible]

"Wood" (材木)〔但し "tree" は『立樹』であるから普通名詞〕、"glass", "gold", "paper", "sugar," "wine' "smoke" 抔は皆物質名詞である。

物質名詞は定まつた形の無い物の名であるから一つ二つと數へられない、從つて "a" も附かなければ複數にも成らぬ。紙は一枚二枚と數へられるけれども "a paper"; "two papers" とは云はれない、必ずや "sheet" か "piece" を使つて "*a piece of* paper", "*two sheets of* paper" と云はなければならない。

『酒は』『葡萄酒といふものは』などと其類全體の事をいふ時には冠詞を附けないで

Wine is made from grapes.
　＝葡萄酒は葡萄で造る。

I am fond of *beer*.
　＝僕はビールが好きだ。

といふが、幾らかの分量を限る意味の場合〔參照: P. 18 (*b*)〕には "some" を其前に置いて

I have *some* bread.
　＝僕はパンを持つて居る。

I want *some* water.
　＝水がほしい。

Give me *some* sugar.
　＝砂糖を少し下さい。

斯んな場合には英語では必ず "some" か又は此に類語を附けなければならぬ。

物質名詞と成る定まつた物を言ひ表はす時には定冠詞をつける。比較:—

Water is the best drink in the world.
　(水程よい飲料は此世にない)
The water of this well is not fit to be drunk.
　(此井戸の水は飲料に適しない)

Saké is made from rice.
　(酒は米にて造る)
The saké we had yesterday was not very good.
　(昨日の酒は餘り上等ではなかつた)

名詞の中には物質名詞か普通名詞か紛らはしいのがある、"fsh" は其一例である。生きた魚には定まつた形があつて一尾二尾と數へられるから無論普通名詞であるが、料理して食卓の上にのせられた場合にはどんな小さな片でも皆 "fish" であるから物質名詞になつて了ふ。鯛の切身が一つあつても小さな魚が幾疋もあつても皆一樣に "fish" である。

次の場合には物質名詞は普通名詞と成る。

(1) 種類を云ふ時

Metal.
It is made of *metal*. 〔物〕
　(金屬製)
Platinum is a rare *metal*. 〔普〕
　(プラチナは稀な金屬)
Gold and silver are precious *metals*. 〔普〕
　(金銀は貴金屬)

(2) 箇々に分れた物を云ふ時

Light.
- *Light* proceeds from the sun. 〔物〕
  (光は太陽から出る)
- Bring me *a light*. 〔普〕
  (燈火を持つて來い)
- I saw many *lights* in the distance. 〔普〕
  (遠方に燈火が澤山見えた)

Stone.
- That house is built of *stone*. 〔物〕
  (あの家は石造り)
- He threw *a stone* at me. 〔普〕
  (僕に石を投げた)
- Don't throw *stones*. 〔普〕
  (石を投げるな)

(3) 材料其物を云ふのでなくて、それで作つた物を云ふ時

Glass.
- *Glasses* are made of *glass*. 〔普と物〕
  (コツプは硝子で作る)
- I gave the monkey *a* (looking) *glass*. 〔普〕
  (猿に鏡をやつた)

Paper.
- Give me some *paper*. 〔物〕
- I was made to sign *a paper*. 〔普〕
  (證文を書かせられた)
- According to the *papers*, there was a fire last night. 〔普〕
  (新聞で見ると昨夜火事が有つたさうだ)

(4) 出來事の意味と成る時

Fire.
- *Fire* burns wood. 〔物〕
  (火は木を燃やす)
- There were *two fires* last night. 〔普〕
  (昨夜火事が二度あつた)

[illegible] falls in June. 〔物〕
[illegible] 〔雨量〕)

Rain.
- We had many long *rains* in June. 〔普〕
  (六月には度々長雨が降つた〔度數〕)

"Sand" や "water" を複數にすれば其物の在る場所の意味と成る。即ち "sands" は『砂濱』、"waters" は『川』『湖』主として『海』の意味と成る。

The children are playing on the *sands*.
The ship is now in Chinese *waters*.
Still *waters* run deep.

抽象名詞 (Abstract Noun)

今茲に白いハンカチーフ、白い紙、白いチョーク、白い窓掛け、白い砂糖、白い雪の如き白い物體から『白』と云ふ性質を拔き出して考へる事が出來る。斯う云ふ風に物體其物に關係なくして其等に共通な性質や狀態や動作を抽き出して、其性質や狀態や動作に附けた名稱が抽象名詞である。だから抽象名詞には複數の形のあらう筈はなく又不定冠詞が之に附かう筈もない。此名詞の用ひ方は物質名詞と同樣で、一般の性質や動作を云ふ場合には冠詞は要らないが、或る特別の場合を云ふ時には定冠詞を附ける。例へば

(a) All men seek for *happiness*.
　　＝凡て人は皆幸福を求む。

(b) The rich envy *the happiness* of the poor.
　　＝富者は貧者の幸福を羨む。

に於て (a) の『幸福』は一般の幸福を云ふのであるから冠詞は附いて居ないが、(b) に於ては『貧者の幸福』と特別な場合の幸福を云ふのであ[illegible]附けるのである。夫と同樣に

Ignorance is bold.

＝知らざる(者)は大膽なり。

I am surprised at *the ignorance* of those people.

＝あの人々の無學なのには驚く。

物の性質を表はすのは形容詞の本領であるからして、性質を表はす抽象名詞は形容詞から作る。

White—white*ness*.	Diligent—diligen*ce*.
Wise—wis*dom*.	Young—you*th*.
High—heig*ht*.	False—false*hood*.
Rapid—rapid*ity*.	Poor—pover*ty*.

動作を表はすのは動詞の役目であるから動作の抽象名詞は動詞を變化させて之を作る。

To act—act*ion*.	To fail—fail*ure*.
To punish—punish*ment*.	To decide—deci*sion*.
To differ—differ*ence*.	To speak—speak*ing*; speech.
To do—do*ing*; deed.	To walk—walk*ing*; walk.

其他心の働き (memory, reason, will, &c.), 學科 (history, zoology, mathematics, &c.), 身分、境遇 (captaincy, widowhood, slavery, &c.) などを表はす語も皆之に屬する。

抽象名詞が普通名詞と成る事がある。

(1) 其種類を云ふ時

Art.
- *Art* is long and life is short. 〔抽〕
  (學藝は逢し[illegible]て人生は短し)
- Teaching is *an* [illegible] 〔普〕
  (教授法は一[illegible]技術である)

- The fine *arts*. 〔普〕
  (美術、即ち繪畫、彫刻、建築)

Vice.
- *Vice* is alluring. 〔抽〕
  (罪惡は人を誘惑する)
- Lying is *a vice*. 〔普〕
  (嘘言は一つの罪惡である)

(2) 別れたるものの一つ一つを云ふ時

Painting.
- We shall learn *painting* next year. 〔抽〕
  (來年になると圖畫を習ふ)
- He gave me *a painting* 〔普〕
  (彼は僕に畫を一枚與れた)

Room.
- There is *room* for one more. 〔抽〕
  (もう一人這入る餘地がある)
- There is *a* large *room* upstairs. 〔普〕
  (二階に大きな室がある)

Speech.
- Man alone has the gift of *speech*. 〔抽〕
  (言語を有するものは人間ばかり)
- He made *a speech*. 〔普〕
  (彼は演說をした)

(3) 其性質を有する人又は物を表はす時

Beauty.
- *Beauty* in dress is a good thing. 〔抽〕
  (着物の美しいのはいゝものだ)
- She was *a beauty*. 〔普〕
  (その女は美人だつた)

Wonder.
- They were lost in *wonder*. 〔抽〕
  (皆ひた驚きに驚いた)
- The seven *wonders* of the world. 〔普〕
  (世界の七不思議)

抽象名詞が其儘の姿で普通名詞と成る事がある。

Youth (＝young people) should respect *age* (＝old person).

=若い者は老人を尊敬すべきものである。

Flattery itself (=even flatterers) never reckoned temperance as one of his virtues.

=阿諛の徒と雖節制を彼の德には數へなかつた、御世辭にも節制家とは云へなかつた。

All＋抽象名詞及び抽象名詞＋itself は意味の強き形容詞の代用となる。

He is *all kindness.*
He is *kindness itself.* } =He is *very kind.*

本當から云ふと抽象名詞には複數のある可き筈はないが、意味の區別の爲に常に複數形で使ふのがある。

Advice (忠告) :—I gave him a piece of *advice.*
Advices (報告) :—You shall soon have full *advices.*

Content (滿足) :—I drank beer to my heart's *content* (思ふ存分).
Contents (在中物、內容) :—The *contents* of a box or a book.

Duty (本分) :—Do your *duty.*
Duties (職務) :—Attend to your *duties* (職務を大事に勤めよ).

Good (益) :—It will do you much *good.*
Goods (商品) :—We have a large supply of the *goods.*

Height (高さ) :—What is the *height* of Mt. Fuji?
Heights (頂、山、崖) :—Snow appears on the *heights* of Fuji.

Pain (苦痛) :—Do you feel any *pain*?
Pains (苦心、骨折) :—I took great *pains* over it.

Ruin (滅亡) :—The country will go to *ruin.*
Ruins (壞れ跡、舊跡) :—I wish to visit the *ruins* of Rome.

Spirit (勇氣、意氣地、負けぬ氣) :—Show your *spirit.*
Spirits (元氣) :—He is in high *spirits* (勇んで居る).

Study (研究) :—The *study* of English.
Studies (學問) :—I shall have to give up my *studies.*

Time (時) :—*Time* and tide wait for no man (歲月人を待たず).
Times (景氣) :—The *times* are bad.

抽象名詞を形容詞、副詞、動詞などで譯さなければならぬ事が度々ある。

I saw the *propriety* of it.
=I saw that it was proper for me to do so.
=さうするのが穩當だと思つた。

He blamed me for the *impropriety* of my *conduct.*
=He said that I ought not to have done such a thing.
=『お前がそんな事をしたのは惡かつた』と彼が言つた。

There is no *possibility* of his coming.
=He can not possibly come.
=彼は斷じて來る筈がない。

He admitted the *possibility* of the *truth* of my *statement.*
=He said, "It is possible that your statement is ture".
=He said, "What you say, may be true."

He denied his *knowledge* of the matter.
=He said that he did not know anything about the matter.

He expressed his *regret* at his *inability* to help me.
=He said that he was sorry that he could not help me.

I could not help smiling at the *abruptness* of his question.
=He asked me such an abrupt question that I could not help smiling.
=出し抜けに斯んな事を聞かれたので微笑せざるを得なかつた。

格 (Case)

名詞が其文中の他の語に對する關係を Case (格) と云ふ。格には Nominative Case (主格)、Possessive Case (所有格)、及び Objective Case (目的格) の三つある。

Nominative Case は動詞の主格となるものである。

Horses draw carriages.＝馬は馬車をひく。

Rivers flow.＝川は流れる。

の "Horses" や "Rivers" は即ち是で、名詞其儘の形で此格に成る。

此外次の場合の名詞も矢張 Nominative Case である。

(a) 不完自動詞や被動態動詞の Complement 〔P. 156〕となつた場合

He is *Tanaka*. He was made *king*.

(b) 呼掛けの名詞

Boys, work hard.

(c) Absolute Participial Construction 〔P. 272〕の Participle の意味の主格

The *moon* rising, we put out the light.

Possessive Case は所有を表はす格で

This is *Yoshida's* dictionary.

＝是は吉田の辭書である。

の "*Yoshida's*" は正に此格である。

英語の癖として有生物にも無生物にも "have" といふ字を使ふ。"He *has* many books." には誰も異議はないが、『此テーブルには脚が四本ある』といふ場合にも "have' を使つて "This table *has* four legs." と云ふ。それならば無生物も有生物と同樣所有格にされるかと云へばさうは行かぬ。所有格の形は人間と動物とに限られたもので物には使はれぬものと先づ覺えて置くがよい。

此格を作るには單數の場合には何でもかでも Apostrophe (アポストロウフィ)と "s" 即ち "'s" を其語尾に添へればよろしい。

Boy's ; lady's ; child's ; ass's.

複數の場合には若し語尾に "s" があれば單に Apostrophe 即ち "'" をつけるだけ。又たとひ複數でも語尾に "s" なくば單數の時と同樣 "'s" を附けなければならぬ。上の例で云へば

Boys' ; ladies' ; children's ; asses'.

とするのである。で此格を表はす "s" の讀方は複數の "s" の讀方と同樣で "lady's" も "ladies" も 'ladies'" も同じ發音になるし、"ass's" も "asses" も "asses'" も皆同樣の發音になる。單複の區別や、所有格で有るか無いかは前後の續合で判かるから心配は要らない。

Possessive Case は所有を表はす外に

(a) 著者又は發明者を示す。

Dickens's novels. *Marconi's* wireless telegraph.

(b) 其次の名詞の目的を表はす。

A *girls'* school (＝a school *for girls*). *Ladies'* shoes.

(c) 其次の名詞に對して主格關係を表はす。

My *father's* death (父が死んだ事).

The *man's* being rich is known to all.

＝其人が金持だと云ふ事は皆に知られて居る。

(d) 其次の名詞に對して目的關係を表はす。

No one came to my *mother's* rescue.

＝誰も母を援けに來る者はなかつた。

Possessive Case は人や動物に用ふる外に種々の場合に使はれるも其中最も注意すべきものは

(a) 時を表はす語

To-day's paper. *Yesterday's* lesson.

It is *five minutes'* walk from here to the station.

＝此處から停車場へは歩いて五分かゝる。

(b) 價格を表はす語

Give me *ten cents'* worth of sugar.

＝砂糖を十仙丈け御呉れ。

(c) "*Sake*" や "*end*" の前にある語

For *mercy's* sake (後生だから).

For *goodness'* sake (同上).

For *conscience'* sake (氣安めに).

("ss" や "ce" にて終る抽象名詞の所有格は語尾に Apostrophe を附けた丈で "s" を添へない)

At one's *wit's* end (智惠が盡きた).

One's *journey's* end (旅行の目的地).

所有格の次にある "house," "store" などは省略するのが普通である。

I am staying at *my uncle's*.

＝僕は叔父の内に逗留して居る。

I bought the book at *Maruya's*.

＝僕は此本を丸屋(書店)で買つた。

併し "house" などを略し得るのは名詞の次だけで代名詞の場合には應用が出來ぬ。『あの人の家へ昨夜泥棒が這入つた』といふ事を

A burglar broke into *his* last night.

とすれば誤である。必ずや "house" を附けて "A burglar broke into *his house* last night." としなければならぬ。序に店の稱へ方を一言して置かう。唯單に商人の姓や『屋號』を用ふる時は所有格にして "shop" や "store" を省くけれども、『堂』とか『社』『館』などは所有格を用ひずして "the" を其前に置く事になつて居る。賣る品物を云ふ場合には "store"

〔米〕や "shop" 〔英〕を附けて "a fruit-shop" (果物屋); "a book-store" (本屋〔米國〕)などゝいふ。

Arita's (有田の店).

Maruya's (丸屋書店).

The watchmaker's (時計屋).

The shoemaker's (靴屋).

The book-seller's (本屋〔英國〕).

The Sanseido (三省堂).

The Kōbunsha (興文社).

數語で一人の事を表はす場合には最後の語に所有格の印を附ける。例へば『英國の王樣の兄樣』と云ふ事は必ず

The *King of England's* brother.

と云つて、"The King's brother of England" とは決して言はない。是と同じ樣に

I met my *teacher Mr. Tano's* father on the way.

＝途中で田野先生の御父樣に逢つた。

又是と似た用法で

Taro and Jiro's dictionary.

と云へば『太郎と次郎と仲間で持つて居る辭書』で

Taro's and *Jiro's* dictionaries.

と云へば『太郎の辭書と次郎の辭書』とである。

Saito and Brinkley's readers.

＝齋藤氏と武氏共著の讀本。

Saito's and *Kanda's* grammars.

＝齋藤氏の文法と神田氏の文法。

所有格の附いた名詞には "the" の意味が含まれて居る。例へば

My brother's wife=*the* wife *of* my *brother*.

だから "a", "this", "that" などは所有格の前に置く事が出來ない。そこで『兄の一人の友達』『君の叔父さんの此の自動車』『君〔僕〕のあの帽子』などは

A friend *of my brother's*.

This automobile *of your uncle's*.

That hat *of yours* 〔*mine*〕.

と言はなければならない。〔參照: P. 108〕

Objective Case は名詞が他動詞の働きを受けた場合と前置詞の次にある時とで、Nominative Case の時と同樣名詞其儘の姿で此格に成る。

Columbus discovered *America*.

=コロンバスは亞米利加を發見した。

I bought *my brother a watch*.

=僕は弟に時計を買つてやつた。

We live on *the earth*.

=吾々は地球に住む。

I put it in *the box*.

=僕は其を箱に入れた。

是等の文中 "America", "brother", "watch", "earth", "box" は皆目的格である。

Objective Complement 〔P. 158〕も矢張目的格である。

I made her *my wife*.

又名詞で副詞の働きをする事がある。例へば

I rose early *that morning*.

に於て "that morning" は名詞であり乍ら "rose" なる動詞を形容して居るから副詞の働きをして居ると言はなければならない。名詞の前に前置詞があれば副詞の意味の Phrase に成る事はあるが名詞丈では副詞に成る筈がない。此 "that morning" も其前に "on" と云ふ前置詞が有るべきなのが省いてあるのだ。詰り "that morning" は略された "on" の Object たる可きもので同時に Adverb の働きをして居るから、此 "that morning" を **Adverbial Objective** と云ふ。類例の二三を擧ぐれば

I have been studying English *these five years*.

He is *twenty years* old.

He is coming *this way*.

Adverbial Objective も亦目的格である。

邦語では普通名詞であらうが固有名詞であらうが又抽象名詞であらうが其書き樣には何等の相違もないから之を分類する必要もないが、英語では一々其用法が違つて居るから各語の用法を充分に知らん爲には是非共其分類をよく研究しなければならない。今冠詞との關係を簡單に表にして見れば

	種類	單	複
名	普通名詞	A dog. The dog.	Dogs. Some dogs. The dogs.
	集合名詞	A family. The family. People. Furniture	(Some) families. The families.

詞	物質名詞	Water. The water (of this well).
	抽象名詞	Pain. Pains. The pain (I suffered).
	固有名詞	Fuji. The Sumida. The Himalayas.

形容詞

(ADJECTIVE)

名詞を形容する語は皆形容詞である。其中には

This book ; *that* chair.

の如く其名詞を指摘するものもあれば

A *good* girl ; a *sick* child.

の如く性質や有様を形容するものもあり、又

Ten houses ; *some* sugar.

の如く數量を表はすものもある。

形容詞は邦語に於けると同じく其形容する語の直ぐ前に來る事もあれば、其名詞を説明する賓辭のうちにある事もある。即ち

This is a *pretty flower*.

＝此は美しい花だ。

This *flower* is *pretty*.

＝此花は美しい。

小八釜しい分類などは止めにして、形容詞にはどんなのがあるかと云ふ事と、文を書く時に心得べき事とを簡單に述べる事としよう。

形容詞には

A *good* son ; a *tall* man ; a *heavy* gun.

などの如く本來形容詞のものもあれば、又他の品詞から轉じて形容詞と成つたものもある。例へば

A *gold* ring ; a *silver* spoon ; an *iron* bridge.

などは物質名詞其儘の姿で形容詞となつたのである。

"Gold" の外に "golden" といふ形容詞もあるが、普通『金色の』『いとも榮えたる』『貴き』といふ樣な形容的の意味に用ひられる。

Golden hair (金髮). The *golden* age (黄金時代).

A *golden* saying (金言). The *golden* rule.

"The *Golden* rule" といふのは

Do unto others as you would be done by.

＝己の欲する所之を人に施せよ。

といふ耶蘇の教をいふのである。

"Silvery" も "*silvery* gray hair" (銀髮) などの如く形容的に使はれる。

物質名詞の中には其語尾に "en" を附けなければ形容詞とならぬものもある。

A *wooden* ship ; *woolen* cloth (毛織物) ; *earthenware* (瀬戸物)。

又固有名詞から作つた形容詞がある。國名の形容詞はすぐ其儘で其國語になる。

Japan—Japanese. China—Chinese.
Korea—Korean. England—English.
Germany—German. France—French.
Russia—Russian.

是等の形容詞の前に "the" を置けば其國民全體の意味になる。

The Japanese (日本國民); *the* English (英國民).

併し語尾に "n" があれば語尾に "s" を附けなければならぬ。例へば

The Koreans; *the* Germans; *the* Russians; the Italians.

其國の人箇人々々を云ふ時には語尾 "ese" にて終るものは單複の區別なく、語尾 "ch", "sh" にて終るものには "man", "men" を附け、"n" にて終るものには複數に "s" を附ける。

A Japanese—many Japanese.
A Chinese—many Chinese.
An English*man*—many English*men*.
A French*man*—many French*men*.
A Russian—many Russians.
An Italian—many Italians.

動詞の現在分詞も、過去分詞も共に形容詞となる。是は邦語動詞の連體段に相當するものである。例を擧ぐれば

Interesting books (面白き本); a *cutting* wind (身を切る樣な風); *scorching* heat (燒くが如き炎熱).

A *broken* dish (毀れた皿); *stolen* fruit (盜んだ果物); *boiled* rice (御飯).

現在分詞は Active の意味で、過去分詞は Passive の意味である。今の例で云へば本は人に興味を與へ、風は身を切り、炎熱が焦す意であるが、皿は毀すのでなくて毀された皿であるし、果物は盜まれたものであり、"boiled rice" は煮られた米である。

併し自動詞の過去分詞には Passive の意味のあらう筈はないから無論 Active の意味である。

A *grown-up* son (=a son who has grown up; 成長した息子).
A *retired* officer (=an officer who has retired; 退職士官).
A *passed* candidate (=a candidate who has passed; 合格者).

又代名詞の所有格が形容詞になる事は言を待たない。

My library; *his* coat.

二つ以上の形容詞が一つの名詞を形容する場合には "my", "your" の樣な所有格や "the", "this", "that", "such" の樣な語を一番始めに置く。

それでは "my" と "this" とはどちらを先にするかといふ疑問が起るかも知れぬが所有格と指摘形容詞とは決して並べて用ひないもの。必要のある時には "This hat of mine" といふ樣な構造にしなければならぬ。〔參照: P. 44〕。

其次には數量を表はす形容詞を置き、其次に性質を表はす形容詞を置く。

Those two kind ladies.

性質を表はす形容詞にも色々あるが先づ大抵次の順序に並べたならば大過はあるまい。

1	2	3	4	5	6	7	8	9
(指摘代名詞 冠詞)	(數量)	(意見)	(大小)	(新舊)	(形狀)	(色)	(材料)	(名詞)
These	two		large		round			tables.
The		useful	little					animal.
My				new			gold	watch.
Those			big			white		birds.

併しこんな順序は中々覚えられないから各から始めの假名一つ宛をとつてスイタシケイヂ(好いた紙型き)位にしたらば記憶するのに都合がよからうか、呵々。

尤も "*young man*" (青年); "*old man*" (老人); "*little girl*" (小娘) などの如く殆んど複合名詞と言つてもよい様な語の結合や又固有名詞から出來た形容詞は常に名詞の直ぐ前に來なければならぬ。例へば

A wise *old* man; the two red *English* novels.

同種類に属する形容詞は口調よく配置しなければならぬが、緩の少ないのを先にやつて長い語を後にまはすのが普通である。そして唯二つの形容詞は "and" で結び附け、三つ以上の場合には各の間に Comma を置き、最後の形容詞の前に "and" を置く。

An *easy* and *interesting* book.

An *easy*, *interesting*, and *instructive* book.

Some と Any.

前にも言ふ通り邦語でも『子供達』『娘共』などと云ふ形はあるが大抵の場合に單數複數の別がない。例へば『あの籃に林檎が這入つて居る』と言へば其林檎は一つしかないのかも知れぬ又は二三十もあるのかも知れぬ。邦語にも『一つの林檎』『三十人』などいふ事があるが是は丁度英語の "*one* apple"; "*thirty* men" に相當する場合である。併し此『一つ』とか『三十』とか其數をハッキリと言ひ表はす必要のない場合には、邦語では何とも言はぬが英語では單數の時には "a"、複數の時には "some"

を使はなければならぬ。だから『あの籃に林檎が這入つて居る』なども

There is *an* apple in the basket.

と譯する場合もあれば又

There are *some* apples in the basket.

と譯する事もある。

I have bought *a* book.
I have bought *some* books. } =僕は本を買つた。

I have *a* picture.
I have *some* pictures. } =僕は畫を持つて居る。

I want *a* pen.
I want *some* pens. } =僕はペンが欲しい。

それでは "some" はどんな場合にも譯さなくても宜しいかと云へば左樣ではない。"Some" が上の諸例に於けるが如く唯複數を表はす符牒的のものでなくて、強い意味を表はす場合がある。其時には否が應でも譯をしなければならぬが、併し其譯の附け方に注意を要する。

Some of them speak English very well.

=中には英語を上手に話す者もある。

Some girls are foolish enough to think such a thing.

=女の子の中には愚にも斯んな事を考へて居るものもある。

否定文、疑問文、條件文には "some" の代りに "any" を使ふ。

I have *some* French novels. [肯定叙述文]

Do you want *any* French novels? [疑問文]

If you want *any* French novels, I will lend you some. 〔條件文〕

I do *not* want *any* French novels.

(=I want *no* French novels.) 〔否定文〕

物質名詞には單複の區別がないから"a"は附けられないが、定まつた分量をいふ場合には常に"some"を附けなければならぬ。

Do you need *any* money?

If you need *any*, I will lend you *some*.

今迄說明した處で見ると"some"の次に來る普通名詞は必ず複數でなければならぬ筈。處が"some"には此外に今一つの用法がある、即ち單數普通名詞の前に來て不定の意味を表はすものである。其時の"some"は"a の複數ではなくして"a"の代用語である。今迄の"some"は數量を表はしたが此分は不定の意味を表はす丈の働きをする。

Give me *some books*.
(本を〔二三冊〕與れたまへ)
Give me *some book*.
(何か本を與れたまへ)

物ならば『何か』でよいが、人ならば『誰か』、場所ならば『何處か』、時間ならば『何時か』と譯する。

Some student must have written it.
=誰か學生が書いたに違ひない。

There is *some* one at the door.
=誰か玄關に來て居る。

It must be *some* mistake.
=何か間違にちがひない。

*Some*thing must have happened.
=何事かあつたに違ひない。

He is connected with *some* firm.
=何處かの商會に出て居る。

I will take you with me *some* day.
=何時か連れていつて上げよう。

The house must be *some*where about here.
=其家は何處か此邊にちがひない。

此場合にも疑問、否定、條件には"any"を使ふ。

今迄御話した"any"は疑問文、否定文及び條件文に限られた用法であつたが、茲に又"any"を肯定叙述文に使ふ別な用法がある。其場合には其次に來る名詞は常に單數で『誰でも』『何でも』『何時でも』『何處でも』と譯する。

Any student can solve such an easy problem.
=そんな容易い問題は誰にでも出來る。

I will lend you *any* sum you may need.
=いくらでも御入用な丈け御用だちませう。

Any time will do.=何時でもよろしい。

You may go *any*where you like.
=何處へなりとも好きな所へいつて宜しい。

Some と A Certain

前に述べた通り "some" が數量を表はす時には邦語には譯さないのが普通であるし、單數普通名詞の前に在りて "a" の代用をなす場合には『何か』『誰か』『何時か』『何處か』と譯する。けれども何れの場合に於ても『或る』と譯してはいけない。以前盛に行はれた直譯流の遺物として今でも時々耳にする事があるけれども是は早く改めなければならぬ、何故かと云へば『或る』に相當する英語は "a certain" であつて "some" ではないから。

"Some" は話手が其物又は人を知らぬ場合に使ふ語で邦語の『誰か』『何か』などに當たるが、"a certain" は話手自身は其何人なるか又は何物なるかをよく知つては居るけれども其名を特に言ふ必要のない場合又は言ふ事を欲しない場合に使ふ語である。例へば

Some one must have been here in my absence.
＝僕の留守に誰か此處へ來たに違ひない。
〔其人は何人なるかを知らず〕

*Some*body has forgotten his umbrella.
＝誰か傘を忘れたものがある。

He was reading *some* large book.
＝あの人は何だか大きな本を讀んで居た。
〔其書名は知らず〕

There is *some*thing in this box.
＝此箱に何か這入つて居る。

A *certain* student called on me yesterday and informed me of her arrival.
＝或る生徒が昨日私の處へ來てその女は到着しましたと云つた。

A few days ago I met a *certain* gentleman in a *certain* place.
＝二三日前にさる所でさる人に逢つた。

I am now reading a *certain* novel.
＝僕は今或小說を讀んで居る。

Any と Either

"Any" は三つ以上あるものゝ中で『どれでも』『誰でも』と云ふ場合に用ひ、"either" は二つの中で『どちらでも』と云ふ場合に使ふ。

Any book will do.＝どの本でも宜しい。

Either book will do.＝どちらの本でも宜しい。

Any one of you may go.
＝君方の中誰が行つても可い。

Either of you may go.
＝君方の中どちらが行つても可い。

疑問文章に於ても是と同樣に "any" は『どれか』『誰か』に相當し、"either" は『どちらか』に當たる。

Do you know *any* of these students?
＝此生徒の中誰か御存じですか。

Do you know *either* of the two brothers?
＝此兄弟の中どちらか御存じですか。

是等兩語の打消は "Not All と Not Both" 〔P. 62〕の項を見よ。

Any と What.

"Any" は斯かる人又は斯かる物のありやなしやを問ふ場合に使ふが、"what", "who", "when", "where" は或る定まれる物の名や、定まれる事件の時又は場所などを尋ねる場合に使ふ。今向ふから一人の男が手をポケットに突っ込んで來る。ポケットの中に何か這入って居るのかどうか分からぬ時には

Have you got *any*thing in your pocket?

＝何かポケットに入れて居るのかい。

すると又別の男がポケットを膨まして來る。其中に何か這入つて居る事は明かだ。其時には中に物の有無を聞く必要はないから

What have you got in your pocket?

＝君のポケットには何が這入つて居るのか。

なほ二三の例をあぐれば

This box is very light. Is there *any*thing in it?

——No, there is nothing in it.

＝此箱は大層輕い、何か這入つて居るのかい

——イーエ何も這入つて居ない。

The other is so heavy that I can't lift it up. *What* does it contain?——It contains some books.

＝今一つのは馬鹿に重くて僕には持ち上がらない、何が這入つてるのだ——本が這入つてる。

Has *any*one told you of his death?

＝誰か彼の死んだ事を君に話した人があるか。

Who told you the news?

＝誰が君に話して聞かせたか。

Are you going *any*where to-morrow?

＝明日何處かへ行くのか。

Where are you going?＝何處へ行くのか。

Any と Every.

"Any" が肯定文に用ひられた場合は『何でも』『誰でも』『何時でも』『何處でも』となり (a) 常に "you like" の意味が含まれて居る。そして (b) 動作を表はす動詞と共に用ひ、(c) 常に未來の意味が含まれて居る。

"Every" は "all" の意味の強いのである。(a) どれを見ても一としてさうでないのは無い、例外は一つも無いと云ふ意味で、(b) 多くは有樣を表はす動詞と共に用ひ (c) 現在、又は過去の事をいふ場合に使ふのが普通である。

今『皆の人が其事を知つて居る』といふ文章は "every" を使つても "any" を使つても譯される。

*Every*body knows it. ..... (i)

*Any*body can tell you. ..... (ii)

(i) に於ては意味は現在で "know" は有樣の動詞。(ii) に於ては『君の好きな人誰に聞いて見ても其人は君に話して聞かせる事が出來る』で未來の意味、而して "tell" は動作の動詞である。

Any paper will do.＝何紙でもよろしい。

You may go *any*where.

＝(君の好きな所)何處へ行つても宜しい。

He has been *every*where.

＝彼の行かない所は無い。

You must tell it to *every*body.

＝一人も漏れなく皆に言はなければならぬ。

He may come at *any* moment.

＝I expect him (to come) *every* moment.

＝今にも來るかもしれぬ。

Not Any と Not Every.

打消の形"not any"は"no"と等しく、"not every"は"very few"又は"some"の意味である。

Scholar as he is, he can *not* know *every*thing.

＝如何に學者の彼にも分らぬ事がある。

He is very ignorant and does *not* know *any*thing.

＝馬鹿で何も知らぬ。

I am *not* asked out *every* day.

＝餘所へ御よばれに行く事は滅多にない。

Every man can *not* be a poet.

＝詩人になれる人は實に少ない。

Each と Every.

"Each"は『銘々に所有する、分配する』など云ふ場

合に用ひ、常に單數に使ふ。邦語の『銘々』『夫々』『…づゝ』などに相當する。

Each pupil has his own knapsack.

＝生徒は各自に背嚢を持つて居る。

I gave *each* boy one yen.

＝僕は其子供達に一圓宛やつた。

『夫々』の意味であり乍ら"several"や"respective"は複數に使ふ。

The boys went to their $\left\{\begin{matrix}\textit{several}\\ \textit{respective}\end{matrix}\right\}$ homes.

"Every"は"all"の意味の強きものである。"All"の方では總體を一くるめにして言ふ場合であるから時には例外があるかもしれぬが、"every"の方では『あれを見ても是れを見ても一として左樣でないのはない』と云ふので、一つ一つ吟味して見た上で其例外のない事を言ふのだから從て意味も非常に強い。そして此語も常に單數に用ひる。

I know *every* one of them.

＝どの人もどの人も皆知つて居る、知らぬ人は一人もない。

You must examine *every* one of them.

＝一人も殘らず試驗しなければならぬ。

是を以て見れば"every"は"each"と"all"の意味を兼ねたもので、しかも何れよりも力が強いといふ事が判かる。

Each country has its own customs.

＝國には夫々習慣があるものだ。

Every country has its customs.

＝どの國でも夫々習慣のない國は一つもない。

"Each" は形容詞にも代名詞にも使ひ、其位置も形容する語の前後何れにも置かれるが、"Every" は形容詞としてのみ用ひられ常に形容する語の前に置かなければならぬ。"Each" の位置は次の諸例を見て判斷して貰ひたい。

Each pupil has his own knapsack.
〔單數名詞と共に用ひたる時〕
Each of *the pupils* has his own knapsack.
〔複數名詞と共に用ひたる場合には "of" を附す〕
Each (one) of *them* has his own knapsack.
〔代名詞の前に用ひたる時には "of" を附す、而して "each" の次の "one" は省略し得〕
The pupils / *They* } have *each* his own knapsack.
〔名詞代名詞の後に置く場合には "each" 以下は凡て單數となる〕
I gave { *each of them* ten yen. / *them* ten yen *each*.

Every Jack has his Jill.
＝破鍋に綴蓋、どんな男でも皆それ相當に女がある。
You must tell *every one* of them.
〔"Every" の次の "one" は省く事を得す〕

Every Other Day.

『一つ置きに』『三つ置きに』などは "every" を以て之を言ひ表はす。

おきに

Every day『日毎に』『毎日』。

Every two days / *Every second* day / *Every other* day } 『二日に一度』『隔日』。

Every five days / *Every fifth* day } 『五日に一度宛』。

Write it on *every other* line.
＝一行置きに書け。 appears

That star appears *every seventh* year.
＝あの星は七年毎に出る。

He comes round to see me *every few* days.
＝二三日毎にやつて來る。

All と Both.

三つ以上の場合には "all" を用ひ、二つの場合には "both" を使ふ。是等兩語の位置は "each" に於けるが如く其形容する語の前後何れにも置く事が出來る。

凡て形容詞は冠詞の次に置くものであるのに此兩語は冠詞、指摘形容詞及び所有格代名詞の前に置かなければならぬ。〔參照： P. 21〕

All / *Both* } { *the* / *his* } *brothers* are diligent. 〔名詞の前〕

All these students are diligent. diligent 勤勉

比較：—

Each of the ...

His *brothers* are {*all* / *both*} diligent. 〔名詞の後〕

{*All* / *Both*} of them are diligent. 〔代名詞の前〕

They are {*all* / *both*} diligent. 〔代名詞の後〕

Not All と Not Both.

今

All of them did not go.

と云ふ文章があるとすれば、初學者の大多數は『彼等は皆行かなかつた』と譯する事であらう。けれども是は誤である。『行つた者もあれば行かない者もあつた』と譯さなければならない。

凡て "all" の打消は一部の打消にしかならぬ。それと同樣に "both" の打消も一つの打消にしかならぬ。

All did *not* go.

=Some went; some did not go.

=皆が行つたと云ふのではない、行かない者もあつた。

Both his parents are *not* living.

=One of his parents is living and the other is dead.

=兩親とも存命だと云ふのではない、親は一人しかない。

I have *not* read *all* these books.

=此本は皆讀んだと云ふのぢやない、中には未だ讀まないのもある。

I don't know *both* of them.

=二人共知つてると云ふのぢやない、一人しか知らぬ。

それでは全部の打消、兩方の打消は如何にして之を言ひ表はすかと云ふに、三つ以上の場合には "not—any" (=no...=none) を用ひ、二つの場合には "not—either" (=neither) を使ふ。但し "not" と "any" と相隣る場合や、"not" と "either" とが相隣る場合には "no..." 〔又は "none"〕 や "neither" を使はなければならぬ。

I have *not* read *any* of these books.
I have read *none* of these books.
=此本は未だ一冊も讀まぬ。

I have *no* books.

=僕は本は一冊も持つて居ない。

〔I have *not any* books. は誤〕

I do *not* know *either*.
I know *neither*.
=どちらも知らぬ。

併したとひ "not" と "any" 又は "not" と "either" とが相隣らざる場合でも文章の始めに "any" 又は "either" を置いて之を打消す事は出來ぬ。

No students went.
None of the students went.
=學生は一人も行かなかつた

〔*Any* students did *not* go. とは言はず〕

Neither of his parents is living.

=Both his parents are dead.

=彼の兩親は二人とも生きて居ない。

上述の事を表に示せば

Not all=some.
Not both=one. 〔なかばの打消〕

Not any=no.
Not either=neither. 〔全部の打消〕

Both と Either.

"Both" は『二つ共』の意味であるから常に複數に用ひる。

"Either" には "one or the other of two" 即ち『どちらか』の意味の外に "each of two" の意味がある。後者の場合には "both" とよく似て居る。

There is a door at *either* end of the room.

=室の兩端に戸が一つ宛ある。

Holding a flower in *either* hand.

=兩手に花。

是等の場合に "both" を用ひて

There are *doors* at *both ends* of the room.

とせば室の兩端に戸が二つ宛あるのか片方に一つ有つて片方に三つあるのか判らないし、又

Holding *flowers* in *both hands*.

と云へば片手に一つ宛持つて居るのか澤山宛持つて居るのか判らない。だから

『日本では正月の飾に門の兩側に松をたてる』は

In Japan we set up a pine-tree on *either* side of the gate for the New Year's decorations.

『彼等は兩側に座を占めた』は

They took seats on *either* side.

All と Only.

"All" も "only" も共に『……だけ』と譯する事がある。但し "all" は數量を言ひ表はし、"only" は種類を示す。『私の金は是丈け』と云へば量を表すから "all" を用ひて

This is *all* the money I have.

となるし、『あの男の欲しがるのは金だけだ』と云へば入用なものゝ種類になるから

Money is the *only* thing he wants.

となる。換言すれば "all" は "no more" の意味で、"only" は "no other" の意味である、即ち上の二文を Paraphrase すれば

This is *all* the money I have.

=I have *no more* money.

Money is the *only* thing he wants.

=He wants *nothing else*.

These are *all* the books he has.

=あの人の持つてる本は是丈け。

This was *all* the wine there was in the bottle.

＝德利にあつた葡萄酒は是丈でした。

Paper was the *only* thing I found in the drawer.

＝抽斗には紙しかありませんでした。

Practice is the *only* way to learn a language.

＝國語を覺えるには練習の外に道はない。

The Same.

"Same" は色々の品詞に用ひられるが常に "the" を其前に附ける。

We all attend *the same* school.

＝私共は皆同じ學校に出ます。

The same is the case with me.

＝私も御同樣です。

I have done my duty *the same* as he has done his.

＝彼が彼の本分を盡したと同樣に僕も僕の本分を盡した。

"The same" は『同一の』となる事と『同種類の』となる事とある。其の意味の相違は前後の續き合ひで之を見分ける。

He comes from *the same* province *as* myself.

＝あの人は僕と同國です。〔同一〕

I have *the same* dictionary *as* your brother.

＝君の兄樣と同じ辭書を持て居る。〔同種類〕

此二文に於て見るが如く、次に "myself"; "your brother" の如き語が來る時には其語の前に "as" を置き、若し其次に Clause が來た場合には『同一』には

"that" を用ひ、『同種類』には "as" を使ふ。

This is *the same* purse *that* I lost.

＝是が僕のなくした財布だ。〔同一〕

This is *the same* purse *as* I lost.

＝僕のなくしたのは斯んな財布だ。〔同種類〕

He is *the same* beggar *that* I gave a nickel coin yesterday.

＝昨日僕が白銅をやつたのはあの乞食だ。

併し無形名詞が其次に來る場合には "as" を使つても "that" を使つても宜しい。

I gave the *same* price $\left\{\begin{matrix} as \\ that \end{matrix}\right\}$ you did.

＝僕は君と同じ丈け出した。

だから『彼は御尊父樣と同じ事をして居ます』は三通りの書き方がある。

He is engaged in *the same* work *as* your father.

He is engaged in *the same* work *as* your father is.

He is engaged in *the same* work *that* your father is.

Such.

"Such" は形容詞ではあるけれども冠詞は其次に置く。〔參照： P. 21〕

I never read *such an* interesting book.

＝斯んな面白い本は讀んだ事がない。

併し "such" の次には必ず不定冠詞を置くものと思つては可けない。

You must not stay at home in *such* fine weather.

＝斯んな好い天氣に引込んで居ては可けない。
〔"Weather" は普通名詞では無いから "a" は附けられない〕

I don't read *such* books.
＝僕は其樣な本は讀まぬ。

但し "a" の代用語の "some", "any", "no" や "many", "all" などは其前に置く。

I want *some such* book.
＝僕は何か斯う云ふ本が欲しい。

Don't you know of *any such* person?
＝君は誰か斯う云ふ人を知らないか。

I can think of *no such* person.
＝誰もさう云ふ人の心當たりは無い。

There are *many such* persons.
＝さう云ふ人は澤山ある。

"Such" は "as" や "that" と關聯して用ふるのが普通である。"Such.....as" は "those.....who〔又は which〕" 又は "that sort of.....who〔又は which〕" などの意味だから常に後ろから溯つて譯をする。

Such (people) *as* have much money do not want for friends.
＝金のある人は友達に不自由しない。

Eat *such* things *as* are set before you.
＝何でも御膳について出たものを食べなさい。

His energy is *such as* is rarely to be heard of.
＝彼の精力(の如き)は稀に聞く處である。

"Such as" の次に名詞(又は代名詞)が來れば "like" の意。

Such people *as* these
People *such as* these } ＝斯う云ふ樣な人。

"Such.....that" は "so.....that" と同じく原因結果の關係を表はす形であるから『(非常に).....であるから』と眞直に譯を下す。

She had *such* a fright *that* she could hardly speak.
＝She was *so* frightened *that* she could hardly speak.
＝其女は非常に怖がつて殆ど物も言へなかつた。

Such was his diligence *that* he made remarkable progress.
＝He was *so* diligent *that* he made remarkable progress.
＝彼は非常な勉强家だからズンズン進んだ。

比較:—

(a) The book is written in *such* easy English *as* I can read.
(其本は僕の讀める樣なたやすい英語で書いてある)

(b) The book is written in *such* easy English *that* I can read *it*.
(其本はたやすい英語で書いてあるから僕に讀める)

(a) の "as" は關係代名詞で "read" の目的に成つて居るから "it" が無い。

(b) の "that" は接續詞だから其次に完全な文章が來なければならぬ。だから "read" の次に "it" がある。

"Such" に "what!" の意味が含まれる事がある。

What a man! I never saw *such a* man!

＝何と偉い男だな、僕はあんな人を見た事が無い。

Such a smile!

＝其笑顔のいゝこと、その笑顔ったらない。

"Such (and such) a" は邦語の『斯く斯くの』に相當す。

If you had told me to do *so and so* at *such and such a* time, I would have done so.

＝何時いつかに是々の事をせよと仰有つたなら私はさうしたんですのに。

"Such" も代名詞として用ひられる事がある。

He was a scholar, and was greatly respected as *such* (＝a scholar).

＝彼は學者であつた、そして學者として大に尊敬された。

Other.

"Other" と冠詞との關係は普通名詞の場合と同じい。卽ち定まれる他の物を云ふ時には "the" を附し、不定の場合には "an" を用ひる、但し此場合には "an" と "other" とを一緒にして "another" とする。

A book.....	*Another* book.	〔形〕	Books.....	*Other* books.	〔形〕
	Another.	〔代〕		*Others.*	〔代〕
The book....	*The other* book.	〔形〕	The books	*The other* books.	〔形〕
	The other.	〔代〕		*The others.*	〔代〕

〔"Other" の次に名詞が來れば形容詞で、名詞が來なければ代名詞である〕

次の例を見て用法を知れよ。

We keep two dogs. *One* is white and *the other* is black.

＝内では犬を二疋飼つて居ます。一疋は白犬で、今一疋は黑犬です。

〔二疋の内一疋を除けば後には一疋しか殘らぬから定冠詞の "the" を附ける〕

Abe and Tano came this morning. *The one* (前者、卽ち安部) gave me this book and *the other* (後者、卽ち田野) gave me that one.

＝今朝安部と田野がやつて來た。安部は僕に此本を呉れるし、田野はあの本を呉れた。

The ferry-boat is now on *the other* side of the river.

＝渡舟は今向岸にある。

〔川には "this side" (此方側) と "the other side" の外に "side" はない〕

Do you know those five gentlemen?

I know the four gentlemen with beards, but I have never seen *the other* gentleman.

＝髯の生えた四人は知つてるが今一人の紳士には逢つた事もない。

〔五人の内四人を除けば一人しか殘らない〕

Give me *another* (＝one more) cup.

＝もう一杯呉れたまへ。

If I am a mad man, you are *another* (＝a mad man too).

＝僕が狂氣なら君も狂氣だ。

Ten of them are from Kyūshū; { *the other* students / *the others* }

come from *other* parts of the country.

＝彼の中十人は九州のもの、外は皆他地方のものです。

〔"Other parts of the country" は何處と定まらず〕

They love *each other*.

＝They love each the other.

＝彼等は互に相愛し合つて居る。〔二人の場合〕

They shouted to *one another*.

＝They shouted one to another.

＝They shouted—one shouted to another.

＝彼等は互に聲を掛け合つた。

〔三人以上の場合〕

The elephant raised up and set down *one* of his great fore feet *after the other*.

＝象は大きな前足を交る々々擧げたり卸したりした。〔二つの場合〕

They all died *one after another*.

＝一人死に二人死にして皆死んだ、彼等は皆續々と死んで了つた。〔三人以上の場合〕

疑問詞 (what; who) や不定代名詞 (something; no one; anybody; &c.) には "other" を使はないで、"else" を是等の語の次に置く

What *else* do you want?

＝其外には何が要るか。

Who *else* is coming?

＝其外に誰が來るか。

Is anybody *else* coming?

＝誰か外に來る人があるか。

He must have given you something *else*.

＝此外に何か君に呉れた物があるに違ひない。

Many と Much.

"Many" は數を表はし、"much" は量を表はす。だから一つ二つと數へる事の出來るもの、即ち普通名詞の複數には前者を用ひ、一つ二つと數へる事の出來ぬもの、即ち物質名詞や抽象名詞には後者を使ふ。

There are *many books* in the library.

There is *much water* in the pond.

He has *much experience* in teaching English.

であるからして物の數を問ふ場合は "How many" 『幾つ』を用ひ、量を問ふ時には "How much" 『幾ら』を用ふる事は云ふまでもない。

How many students attended the meeting?

＝學生は幾人其會に出席したか。

How much money have you got?

＝金を幾ら持つて居るか。

金は一錢十錢五圓六圓と數へるから "How many" ではないかと思ふ人があるかもしれぬが、是には是非 "much" を使はなければならぬ。今之を説明する前に諸君に一つ質問したい事がある:—『一升とは幾つの事ですか』。諸君は笑つて答へるであらう『一升とは桝目の單位で、數ではありません』と。然り、一升は唯桝目の名稱であるから一升は幾つだとは云はれない。併し今馬鈴薯を一升量つて見れば十五六はあらう、同じ一升でも豆ならば七八千以上もあらう、即ち一升の馬鈴薯は "fifteen potatoes" 又

は "sixteen potatoes" で、豆の方は "seven thousand peas" だと數へる事が出來る。今又『一圓』といふ金高を桝目と見て考へる事が出來よう。此枡は五十錢銀貨ならば二箇で一杯になり、一錢銅貨ならば百で一杯になるが、一圓は二つだとか百だとか云ふ事は出來ない、即ち一圓は唯金高を量る桝目に過ぎない。酒は物質名詞で數へられないが一升二升と桝目は數へる事が出來る。金高も一圓とか一錢とかいふ桝目で量つて其量の多寡を云ふ事は出來るが其數は數へる事は出來ぬ。併し馬鈴薯や豆が數へられる通りに銀貨、銅貨などの "coins" は "two fifty-sen silver coins"; "one hundred copper coins" とは數へられるが、"money" は數へる事は出來ない。であるから

How *much money* have you got?

How *many* gold *coins* have you got?

と云はなければならぬ。圓や弗は數へられるから

How *many* { *yen* / *dollars* } have you got?

と言ふ事は言を待たぬ。

"How much" の代りに又 "what" を用ふる事もある。例へば

How much / *What* } did you give for it?

How much / *What* } did it cost you?

＝それを幾らで買つたか。

"Many a" は複數の事を單數の形で言ひ表はす elegant form で、"many" よりも力が強い。

Many a student has fallen into this error.

＝此過失に陷つた學生は幾人も幾人もある。

Few と A Few.

Little と A Little.

"Few" は "many" に對して數の少き事を表はし、"little" は "much" に對し量の少き事を表はすが、邦語では共に『少ない』と譯する。

Many books; *few* books.

Much water; *little* water.

『此本の讀める生徒は少ない』

を譯するのに

There are *few* students that can read this book.

とする人が多い。是は正しい英語には違ひないが唯『……するものは少ない』とか『……するものは多い』とか云ふ場合には "there are" を附けないで、"few", "many" を以て文を始めるのが普通である。

Few students can read this book.

Many people think so.

"Few", "many" は最後に譯して『此本の讀める生徒は少ない』『左樣思ふ人が多い』と譯すべきである。併し『……せぬものは少ない』『……せぬものは多い』の場合には "there are" を用ひる。

There are few students that *do not* study English.

＝英語をやらぬ生徒は少ない。

There are many Japanese who *do not* like foreign food.

＝日本人で洋食の嫌ひな人が澤山ある。

"Few", "little" は "many", "much" に對し『多い事はない、少ない』と常に打消の意味に用ひられ、"a few", "a little" は "no" に對し『無い事はない、少しはある』と常に肯定に譯する。

Are there *many* Russians in Tokyo?

No, there are *few*.

＝東京に露西亞人は多いか——少ない。

Is there *much* beer in the bottle?

No, there is *little*.

＝德利にビールが澤山あるか——少ない。

Have you *no* books?

Yes, I have *a few*.

＝書物がないのか——少しは持つて居る。

Is there *any* money in the purse?

Yes, there is *a little*.

＝財布に金があるか——少しはある。

"A" の有無によつて數量に差異があるのではない。同じものでも見樣によつて "a" を附けたり省いたりするのである。今此處に一つの文章があつて其中に誤が七つあると假定して見る。其作文に誤が少ないと云へば之を譽める事になり、同じ數の七つでも誤が少しはあるといへば非難の意味が含まれる。

There are *few* mistakes in this composition.
（少ない）
There are *a few* mistakes in it.
（少しはある）

He has much money, but *few* friends.
（金はあるが友達は少ない）
He has many English books, and *a few* French books too.
（英書は澤山ある、又佛語の本も少しはある）

"Not a little" は "much"; "not a few" は "many" の意味である。

There was *not a little* (=much) money in the purse.

＝財布には少からぬ金が這入つて居た。

This book has *not a few* (=many) mistakes.

＝此本には少からぬ間違がある。

"Little" には『小さい』と『少ない』との兩意があるけれども意味上に混雜を來す憂はない。何故かなれば『小さい』『大きい』と云ふのは形の備はつた物、即ち普通名詞に用ひる語で、『少ない』の意味の "little" は形の定まらぬ物質名詞にのみ用ひるからである。

數詞

"One", "two", "three"（即ち『一』、『二』、『三』）などの如き基數（Cardinal Numerals）に關して注意すべき事は

(a) 二十以上の十位の數に一位の數を加ふる時には其間に Hyphen 即ち "-" を挿む。

Twenty-three. Eighty-five.

(b) "Four" や "fourteen" には "u" があるが、"forty" には "u" は無い。

(c) "Hundred" の次に數が續く場合には其間に "and" を挿む。"Thousand" の次に "hundred" の無い場合も同樣である。

300—Three hundred.

322—Three hundred *and* twenty-two.

3220—Three thousand two hundred *and* twenty.

3020——Three thousand *and* twenty.

1,234,567,890—One billion, two hundred〔又は one thousand two hundred〕 *and* thirty-four million, five hundred *and* sixty-seven thousand, eight hundred *and* ninety.

(d) "Hundred" や "thousand" は其前に數があつても決して複數にしない。一體形容詞には複數の形は無いものである〔但し "this" と "that" は例外〕。だから『三千』とか『四百』とかの定まつた數を云ふ場合に "three thousands", "four hundreds" などとするのは誤である。常に單數の形で "three thousand (students); "four hundred (ships)" としなければならぬ。

但し不定多數を表はす "*thousands* of students" (何千人と云ふ學生); "*hundreds* of ships" (幾百艘と云ふ多數の船舶) などは別である。〔參照: P. 8〕

"*Million*" は用法が違ふ。定まつた數詞が其前に來た時でも其次に名詞が無ければ複數にする。

Ten *million* years.

Ten *millions* of years.

"First", "second", "third" (即ち『第一』、『第二』、『第三』) などの如き序數 (Ordinal Numerals) に關して注意すべき事は

(a) 次の綴は特に注意を要する。

Fi*f*th; eigh*th*; ni*n*th; twel*f*th.

(b) 次の發音に注意しなければならぬ。

"Eighth" は "eitth" の樣に發音する。

"Twentieth" は "twentēth" と發音するのは誤である、必ず "twentiĕth" と讀まなければならぬ。"Thirtieth", "fortieth" 以下皆同樣である。

(c) 略字を書く時に特に注意すべきものは

1 st; 2 nd; 3 rd;

11 th; 12 th; 13 th;

21 st; 22 nd; 23 rd;

31 st; 32 nd; 33 rd; &c.

(d) 序數には常に定冠詞を附けて

The first; *the* thirty-first.

などゝ云ふ。

A second; *a* third; *a* fourth.

などは順序を表はすのではない、皆 "another" の意味である。

One was blind; *another* was lame; *a third* was deaf; *a fourth* was mad;……

=一人は盲、一人は跛、一人は聾、一人は狂氣……

(e) 序數の代りに基數を使ふ事がある、其場合には名詞の位置が違ふ。

The first……Number 1 〔No. 1〕

The second page……Page two.

The tenth lesson……Lesson ten.

倍數 〔參照： P 90〕

Half

『半哩』—*half a* mile; *one half of* a mile.

『半額』—*half the* sum.

『給料の半分』—*half one's* pay. 〔但し "one's half-pay"(休職給)〕

『半時間』—*half an* hour. 〔但し a full half-hour"〕

『二時間半』—two hours *and a half*.

『五里半』—five miles *and a half*.

Double

The double capacity of preacher and teacher.

＝說教者と教師との二重の資格。

Double the usual postage.

＝二倍の郵稅。

分數の讀み方は

$\frac{1}{2}$ —one half 又は a half.

$\frac{2}{3}$ —two thirds.

$\frac{1}{4}$ —a quarter.

$\frac{3}{4}$ —three quarters.

$2\frac{7}{8}$ —two *and* seven eighths.

$\frac{172}{256}$ —a hundred and seventy-two two hundred and fifty-sixths. 又は a hundred and seventy-two *over* two hundred and fifty-sixths.

$\frac{4\frac{25}{372}}{5\frac{291}{352}}$ —four *and* twenty-five *over* three hundred and seventy-two, *over* five *and* two hundred and ninety-one *over* three hundred and fifty-two.

小數の讀み分は

28•372—twenty-eight $\left\{\begin{matrix}\textit{decimal}\\ \textit{point}\end{matrix}\right\}$ three seven two.

$2\cdot\dot{7}$—two point seven *recurring*.

$3\cdot02\dot{3}\dot{5}$—three decimal nought two three five, three five recurring.

其他

a^2 —"a" square.

a^3 —"a" cube(d).

a^4 —"a" to the fourth.

a^{-4}—"a" to the minus four.

$\sqrt{235}$—the (square) root of 235.

$\sqrt[3]{725}$—the cube root of 725.

$(a+b-c\times d)\div e=f$.—"a" plus "b" minus "c" multiplied by "d," all divided by "e", equals "f".

時間は常に基數を用ふ。日本では『一時十分』、『一時五十八分』といふ樣に常に其前の時を基礎として數へるけれども、英語では三十分までは "past" を用ひて『何時を過ぎる何分』といふが、三十分後は "to" を用ひて『其次の時間までもう何分』といふ。又『十五分』には "quarter" を用ひ、『三十分』には "half" を用ひる習慣である。

『二時十分』—ten minutes *past* two (o'clock).

『二時十五分』—a *quarter past* two (o'clock).

『二時半』—*half past* two (o'clock).

『三時三十五分』—twenty-five minutes *to three* (o'clock).

『二時四十五分』—a quarter *to three* (o'clock).

『二時五十五分』—five minutes *to three* (o'clock).

"O'clock" は "of clock" の略字であるからして是非略字の印の "'" を附けなければならない。然るに往々是を Accent の附號だと間違へて「オクロク」と發音する學生があるも是は無論誤である、必ずや「オヶロク」と云はねばならぬ。汽車の時間などは此言ひ方によらず日本流に時間と分を棒讀みにする。

2·08 a. m. (午前二時八分)—two eight ei em.
3·35 a. m. (午前三時三十五分)—three thirty-five ei em.
2·15 p. m. (午後二時十五分)—two fifteen pe em.
The 7·32 train (七時三十二分の列車)—The seven thirty-two train.

日は常に序數にして云ふ。『一月廿二日』は

January the twenty-second.

とか The twenty-second of January.

とか云ふ。"Jan. 22 (nd)" などゝ書いても常に "the" を添へて讀む。

年は基數を使つて

1829—— (千八百廿九年)
(The year) one thousand eight hundred and twenty-nine.
(The year) eighteen hundred and twenty-nine.
Eighteen twenty-nine. 〔此讀み方最も普通〕

1809—— (千八百九年)
(The year) one thousand eight hundred and nine.
(The year) eighteen hundred and nine.
Eighteen nought nine. 〔此讀み方最も普通〕

18—— (千八百何年) Eighteen hundred and something.

但し日本の年號は常に序數を用ふ。『明治四十二年』は

The forty-second year of Meiji.

年齡

He died *at* (the age of) *thirty*.
=He died *at thirty* (years of age).
=He died *in his thirtieth year*.
=彼は三十才で死んだ。

She married while she was still *in her teens*.
=あの女は未だ十臺の時に結婚した。
〔Thi*teen* から nine*teen* までの間〕

He is *not* yet *out of his teens*.
=彼は未だ二十歳にもならぬ。

A man *in his twenties* 〔thirties, forties, &c.〕
=二〔三、四……〕十臺の人。

貨幣

『二圓三十五錢』—Two yen thirty-five (sen).
『二弗三十五仙』—Two dollars thirty-five (cents).
『二磅五志二片』—Two pounds, five shillings and two pence.

寒暖計

The thermometer 〔又は mercury〕 stands at 90° in the shade.
=日陰で九十度。
〔"ninety degrees" と讀む〕

疑問形容詞

疑問の意を表はす形容詞は "what" と "which" で、兩方とも人にも物にも使はれる。

What man is he? 〔人〕
=彼は何人か、何處の誰だ。

What book are you reading? 〔物〕
=君は何本を讀んで居るのか。

Which man are you going to employ? 〔人〕
=どちらの方を御雇ひになりますか。

Which room do you sleep in? 〔物〕
=どの室で御休みになりますか。

"Which" には常に選ぶ意味が含まれて居る。

"What" が感嘆詞として用ひられる事がある。此場合には ("such" に於けるが如く) 不定冠詞は其次に來る。〔參照: P. 21〕

What a fool he is!
What a foolish man he is!
=彼は何たる馬鹿者だらう。

What partial judges they are!
=彼等は何たる不公平な裁判官だらう。

What impudence!
=何たる鐵面皮ぞや。

What genius he has!
=何と偉い天才だな。

比較:—

(a) *What man is* he?
(彼は何人か)

(b) *What a man* he *is*!
(彼は何と偉い男だな〔又は〕彼は何たる男だらう)

(a) は疑問文で "What" の次に冠詞がない。そして動詞は主格の前に來る。

(b) は感嘆文で "What" の次に冠詞があり、動詞は主格の次に來る。

感嘆文には形容詞を省略する事が度々ある。此場合には形容詞のない方が却て力が強い、そして其形容詞の意味は前後の續き合ひで直ぐ分かる。

What a (fine) sight!
What a (great) man!

"How" も感嘆詞である。但し副詞であるからして其次には是が形容すべき形容詞か副詞か動詞かゝ無ければならない。

How many there are!=マー澤山ある事。

How eloquently he speaks!=何と雄辯だナー。

How he *snores!*=何とひどい鼾聲だナー。

比較:—

How far *is* it?
(幾里ありますか)

How far it *is*!
(遠いんですね)

其次に名詞が來る場合には冠詞の位置に注意しなければならぬ。〔參照: P. 21〕

比較:—

What a great man he is!
How great *a* man he is!

比較 (Comparison)

『John は Brown よりも勉強だ』とか『豹は象よりも小さい』とか云ふ樣に二つの物又は人を比較する時に使ふ形容詞の形を**比較級**、(Comparative Degree) の形容詞と云ひ、『全級で John が一番勉強だ』とか『三つの中で一番短かい』とか云ふ樣に三つ以上の物又は人を比較して其中の一つが或性質に於て他のものよりも最も勝れて居ると云ふ事を表はす形を**最上級** (Superlative Degree) の形容詞といふのである。

John is *more diligent* than Brown.

=チョンはブラウンよりも勉強だ。

John is the *most diligent* in the whole class.

=チョンは全級で一番勉強だ。

A leopard is *smaller* than an elephant.

=豹は象よりも小さい。

This is the *shortest* of the three.

=三つの中で是が一番短い。

の中で "more diligent" と "smaller" は比較級で "most diligent" と "shortest" は最上級である。

比較級及び最上級の作り方

一節又は二節の形容詞は其語尾に "-er", "-est" を附けて比較級、最上級を作る。

	原級	比較級	最上級
	Small	small*er*	small*est*.
	Nar-row	narrow*er*	narrow*est*.

尤も其時に

(*a*) 語尾に "e" のある時は之を除き

(*b*) 一つの子音字にて終り其前に短母音がある時は其子音字を重ね

(*c*) 語尾が "y" で其前に子音字がある時には "y" を "i" に變へ

然る後 "-er", "-est" を附ける。

	原級	比較級	最上級
(*a*)	Wise	wis*er*	wis*est*.
(*b*)	Big	big*ger*	big*gest*.

(*c*) Hap-py happ*ier* happ*iest*.

同じ二節の語でも語尾が "-ful", "-less", "-ous", "-ive", "-ing" で終つた語、及び三節以上の語には其語の前に "more", "most" を置いて比較級、最上級を作る。

原級	比較級	最上級
Use-ful	more useful	most useful.
Use-less	more useless	most useless.
Fa-mous	more famous	most famous.
Act-ive	more active	most active.
Lov-ing	more loving	most loving.
Beau-ti-ful	more beautiful	most beautiful.

凡そ節の數は其語の中に含む響く母音の數と等しい。例へば "head," "stretch," "catch," "book," "oil" (二重母音) などは一節で、"polite," "sincere," "handsome," "pleasant" などは二節、"beautiful," "idea," "difficult" が三節であると言へば大抵了解し得た事と思ふ。但し語尾が (子音+l〔又は r〕+e) の場合には之を一節と見做し "noble", "able", "sabre" などは皆二節だとする。

今迄述べたのは皆規則正しい變化計りであつたが、中には不規則な變化をなすものもある。その最も普通なのは

Good	better	best.
Bad	worse	worst.
Many / Much	more	most.
Little	less	least.
Old	older / elder	oldest. / eldest.

"Elder", "eldest" は名詞の前に來て "*elder* brother" (兄); "*elder* sister" (姉); "*eldest* son" (長男) などの如く家族の關係を表はす場合に使はれる形である。

以上述べた比較級、最上級は『大きい』なら『大きい』、『小さい』なら『小さい』といふ度合が增して行くので謂はば "＋(プラス)" の方であるが、玆に又 "－(マイナス)" に進むのがある、即ち益其度合が減じて行くのである。例へば『A は B よりも勉强しない』と云へば『A は B よりも勉强の度が少ない』事で、『C は D よりも懶けない』と云へば『C は D よりも懶け方が少ない』詰まり『C の方が D よりも勉强する』と云ふ事である。此 "－" の方の比較級や最上級の形を作る事は何の難作もない。節の數の多少に拘らず其前に "less" を置けば比較級と成り、"least" を置けば最上級の形と成る。

A is *less diligent* than B.
=A is not so diligent as B.
=B is more diligent than A.
=A は B よりも勉强しない。

C is *less idle* than D.
=C is not so idle as D.
=C is more diligent than D.
=C は D よりも懶けない。

E is *less tall* than F.
=E is not so tall as F.
=E is shorter than F.
=F is taller than E.

=E は F よりも低い。

比較級

最も普通の形は "than" を用ひる形である。

A is *richer than* B.
=A は B よりも金持だ。

Iron is *more useful than* gold.
=鐵は金よりも役に立つ。

She is *more beautiful than* her sister.
=あの女は姉さんよりも美しい。

But she is *less clever than* her sister.
=併し姉さんよりも利口ではない。

今『田中は高田よりも丈が高い』と云ふ事は

Tanaka is *taller than* Takata.

此場合に "taller" の次に名詞を入れたならば必ず其前に冠詞がなければならぬ。處で "Takata" より丈の高い人は幾人も有らう、そして唯單に "Takata" よりも丈が高い丈では誰の事とも定まらぬからして "a" なる不定冠詞を附けて

Tanaka is *a taller boy* than Tanaka.

と云ふ。是と同じ意味の事を『二人の中では彼の方が丈が高い』ともいふ。此場合には二人の中で丈の高い方と云へば一人の人と定まるから "taller" の次に名詞が有つても無くても必ず定冠詞 "the" を附けなければならぬ。

Tanaka is *the taller* (boy) *of* the two.

=二人の中で田中の方が丈が高い。

She is *the less beautiful* (girl) *of* the two.

=二人の中では彼の女の方がみつともない。

"Which?" を用ひた疑問文には第二の形を用ひて形容詞の前に "the" を置く。

Which is *the* taller (boy), Taro or Jiro?

=太郎と次郎とどちらの方が高いか。

Which do you think is *the* more interesting, English or mathematics?

=英語と數學とどちらが面白いと思ふか。

比較級の度合を示すには次の樣にすればよい。

A is { *two inches* (二吋丈) / *a little* (少し) / *much* (餘程) / *far* (餘程) } taller than B.

A is taller than B *by two inches* (二吋丈).

A is { *much* (餘程) / *by far* (餘程) } *the* taller *of* the two.

之から推して考へると倍數を表はす場合にも比較級を用ひて、『二倍大きい』と云ふ事は "twice larger" と云へばよさゝうに思はれるが、是は宜しくない。必ず次の形を使ふ可きものである。

This is { *twice as* large *as* / *as* large *again as* } that.

=是はあれよりも二倍大きい。

My dictionary is *twice as* heavy *as* yours.

=僕の辭書は君のゝ二倍重さがある。

This is *half as* heavy *as* that.

=是はあの重さの半分。

This is *half as* much *again as* that.

=是はあの一倍半ある。

This is *twice and a half as* long *as* that.

=是はあれよりも二倍半長い。

This is *three times as* large *as* (=three times the size of) that.

=是はあれの三倍大さがある。

They have *ten times as* many ships *as* we have.

=彼等は僕等よりも十倍も船を持つて居る。

Russia is *fifty times as* large *as* Japan.

=露西亞は日本の五十倍。

They have *twice as* large an army *as* we.

=敵は味方より二倍の軍勢。

Mine is *not half so* large *as* his.

=僕のは彼の分の半分も大さがない。

多くの物を二つに分類して其中の『大きい方』とか『小さい方』又は『重い方』『輕い方』などゝ云ふ場合があるが此時には

The bigger boys made the ascent of Mt. Fuji, and *the smaller boys* went on an excursion to Kamakura.

=大きい方の生徒は富士登山をし、少さい方は鎌倉へ遠足に行つた。

The poorer people wear cotton-cloth.

=其中でも貧乏な方の人々は木綿着物を着る。

などゝ云ふ。

最上級

今玆に五人の子供があると假定すれば一番丈の高いものは一人しかあるまいし、又一番低いものも一人しかない筈、即ち "tallest" とか "shortest" なる人は其人丈で他にはないから定冠詞 "the" を附けて "*the tallest* boy" とか "*the shortest* boy" とか云ふ。斯の如く或性質の最も勝れたものと云へば一つのものに定まつて了ふから最上級の形容詞には常に定冠詞 "the" を附けなければならぬ。

A is *the* tall*est* boy.

=A が一番丈が高い。

E is *the* short*est* of them all.

=皆の中で E が一番丈が低い。

Mt. Everest is *the highest* mountain in the world.

=エヴエレスト山は世界第一の高山である。

She is *the most* beautiful of all his daughters.

=彼の娘の中ではあの女が一番美しい。

『……の中で』の『中で』は "of" 又は "among" を用ひる。其使用法は次の數例を見れば容易に理解が出來よう。

He is the most diligent {*of all* / *among*} the students.

=彼は生徒中で一番勉强する。

He is the cleverest {*of all* the students. / *boy among* them.}

=彼は生徒中で一番の才子だ。

〔最上級の次に名詞が來る時には "among" か "in" を使つて "of" は使はない〕

He is the best English scholar {*in Japan.* / *among us.*}

=彼は日本一の英學者だ。

〔次に來る名詞が單數ならば "in" を使ふ、"among" は複數の前にしか使はれない〕

最上級の形容詞を附け得べきものは唯一つに限られて居る筈ではあるけれども、邦語に於けると同樣に『あの子はあの級で一番出來る方だ』『一番丈の低い方だ』と漠然とした分類をする事が出來る。其場合には最上級の附いた複數名詞の前に "one of" か "among" を附ける。

He is {*one of* / *among*} *the best scholars* in his class.

=彼はあの級で一番出來る方だ。

Mt. Fuji is {*one of* / *among*} *the highest mountains* in the world.

=富士山は世界の最高山の中に數へられる。

They are *among the richest men* in Japan.

=あの人達は日本で屈指の財産家である。

England and Japan are *among the greatest naval powers.*

=英國や日本は天下有數の海軍國である。

"The Mississippi is the longest river in the world." 即ち『ミ川は世界第一の長流である』といふ事を邦語で比較級の形を用ひて『ミ川は何川よりも長い』といひ得るが如く、英語にも同樣な言ひ表はし方がある。併し日本語は英語ほど理屈っぽくなく又正確でもない。此場合に於て『何川よりも』と云へば『何川』と云はるゝ中には世界のどの川をも含む事になる、即ち『何川』と云はるゝ中にはミ川も含まれて居なければならぬ筈。すると邦語の儘では『ミ川はミ川よりも長い』と云ふ不合理な事までも許さなければならぬ事に成るから英語では必ず『どの外の川よりも』と云はねば誤に成る。

The Mississippi is *longer than any* other *river* in the world.

I like autumn *better than any* other *season.*

=僕はどの季節よりも秋が好きだ。

He is *taller than any one* else.

(=He is the tallest of all.)

=彼は誰れよりも丈が高い。

This is *larger than either of the* other *two.*

(=This is the largest of the three.)

=三つの中是がシ番大きい。

Tokyo is *larger than* either *Kyoto or Osaka.*

(=Tokyo is the largest of the three.)

=東京は京都よりも大阪よりも大きい。

比較:—

Mt. Everest is higher than *any other* mountain.
Mt. Everest is higher than *any* mountain *in Japan.*

比較級の打消は最上級の意味となる。

I *never* saw a *taller* man (than he).

(あの男より高い人は見た事がない)

=I *never* saw *such* a *tall* man (as he).

(あんなに丈の高い男は見た事がない)

=He is the *tallest* man I ever saw.

(僕が今迄見た中ではあの男が一番丈が高い)

No Less Than と No More Than.

同じ數でも見樣次第では澤山に見らるゝ事と少なく見らるゝ事とがある。例へば今苦學生が『軍資金に拾圓までも献納した』と云へば拾圓は拾圓に違ひないが多額の金と見做した場合。然るに非常な分限者が同じ拾圓献納しても世人は『あんな金持がたつた拾圓出した』と言ふであらう。『たつた十圓』と云へば同じ拾圓でも少なく見た場合である。英語では前者を "*no less than* ten yen" (十圓以下の金ではない、十圓といふ大金)と云ひ、後者を "*no more than* (=only) ten yen" (十圓以上の金ではない、たつた十圓)と云ふ。換言すれば "no more than" や "no less than" を數字の前に附けても、夫が爲に數

其物に何等の違ひも無い、唯夫を多く見たのと少なく見たのとの相違がある丈である。けれども"no"の代りに"not"を使ふと其表はす數は漠然とした數と成る。

He wrote it when he was *no more than* ten years old.

＝彼はたつた十歳の時にそれを書いた。

There are *not more than* three hundred students in that school.

＝あの學校には生徒が三百人位しか居ない。

He gave *no less than* fifty yen toward the expenses.

＝彼は其費用に五十圓{といふ大金を／までも}寄附した。

She has *not less than* ten rings.

＝あの女は指輪を十以上も持つて居る。

If the use of my jack-knife afforded me pleasure, the idea of its possession was *no less* (＝as great) a source of enjoyment.

＝ヂャクナイフの使用は僕に愉快を與へた事は與へたが、(其ナイフを使はなくとも)唯單に夫を所有して居ると云ふ事が其使用に劣らぬ愉快を僕に與へた。

He is *no less* a personage *than* Prince Fushimi.

＝あの方は誰あらう(畏多くも)伏見宮殿下である。

The affliction was *no less than* a disappointment in love.

＝其苦痛は外でもない失戀であつた。

The animal is *no bigger than* a cat.

＝其動物は猫丈の大さしかない。

"No more.....than"は二つの打消を比較する。今『僕は狂氣ではない、僕が狂氣でないのは丁度君が狂氣で無い樣なものだ』と云ふ事を英語では

I am not mad just as you are not mad.

とは決して云はない、必ずや

I am *not* mad *any more than* you are.

とか

I am *no more* mad *than* you are.

とか云ふ。凡て"no more...than"の"than"以下には常に事實の反對だと分かり切つた事計りを書く、そして其を引合ひに出し、"than"の前に述べた事も其と同樣、さうでないと打消す形であるから、此文も『僕は君以上に少しも狂氣では無い、そして君はゼロ丈け狂氣だから僕も狂氣でない』と云ふ意味に成る。即ち此文の主眼とする處は

I am not mad.

であつて、"you"の事は唯其意味を強める爲に引合ひに出したまでである。だから

『僕は狂氣では無い、僕が狂氣なら君も狂氣だらうよ』位の口調に譯すれば宜しい。

He can *no more* swim *than* fly.

＝あの男に泳ぎが出來たら飛べもしようよ。

You have *no more* mind *than* a blade of grass.

＝君に意見があつたら一枚の草葉にも意見があらうよ。

A home without love is *no more* a home *than* a body without a soul is a man.

＝愛なくてホームと云はれるなら魂のない肉體も人間と云はれよう。

You have *no better* a right *than* I.

＝僕にも權利はないが君にだつて無いぢやないか。

比較：—

He is *no more* diligent *than* you are.
〔二人共勉强しない〕

He is *not more* diligent *than* you are.
〔二人共勉强はするが彼は君程には勉强しない〕

Farther と Further.

"Farther" も "further" も共に "far" の比較級だと云ふ說もあれば、"further" は "forth" の比較級だと云ふ說もある。それは兎に角、此等兩語間にハッキリとした意味の區別を立てる事は六ケしい、併し前者は距離を云ふ時に用ひ、後者は其他の意味に用ふるのが普通である。

The sun is *farther* from the earth than the moon.

＝地球からは月よりも太陽の方が遠方にある。

I have a *further* (＝another) reason.

＝今一つ別な理由がある。

I have nothing *further* (＝else) to say.

＝外には何も言ふ事はない。

I am to stay here till *further* orders.

＝追つて命令のある迄は此處に居る事になつて居る。

More.

He is *more* brave than wise.

の "more brave" は比較級では無い。"Brave" と "wise" との如く全く違つた二つの性質の比較が出來るなら一尺と云ふ長さと五匁と云ふ重さとを比較する事も出來よう筈。此 "more" は "rather" の意味であつて

He is *more* brave than wise.

＝He is brave rather than wise.

＝He is brave, but not wise.

＝彼は勇氣はあるが賢くはない。

此場合には決して

He is braver than wise.

としない。

He has *more* money than wisdom.

の "more" も矢張 "rather" の意味である。

Most.

"Most" が最上級を表はす場合には必ず其前に定冠

詞の "the" を置かなければならぬが次の樣な場合には "the" をとらない。

(1) "Most" が "very" の意味に用ひられた時。

He is a *most proud* man.

=彼は極めて傲慢な男だ。

此場合には決して "*proudest*" とは成らない。

比較:—

This is *a most* interesting book.
(是は頗る面白い本だ)
This is *the most* interesting book.
(此本が一番面白い)

(2) "Most" が『大抵』『大概』の意味に用ひられた時。

I spent *most* of my time in reading.

=大抵は讀書に日を暮した。

比較:—

Most learned men『大抵の學者』。
The most learned men『最も學問のよく出來る人達』。

Later, Latest;

Latter, Last.

共に "late" の比較級最上級ではあるが、"later", "latest" は時を表はし、"latter," "last" は順序を示す。

He was *later* than I.=彼は僕よりも遲かつた。

Later editions『後に出た版』。

One's *later* days『晩年』。

He died two days *later* (=after).

=二日後に死んだ。

I will explain it *later on*.=後で說明しよう。

The *latest* report『最近の報告』。

A and B were absent; *the former* was ill and *the latter* had gone into the country.

=A と B は缺席した、前者は病氣で後者は田舍へ行つたのであつた。

In *former* times—in these *latter* days.

=以前には—近頃は。

The *latter* part of the day『午後』。

One's *last* work『最後の作』。

One's *last* moment『臨終』。

The *last* boy on whom it was conferred was Master Manners.

=此前に夫れを貰つたのはマナーズ子で有た。

He was the *last* man I had expected to meet there.

=其處であの人に逢はうとは思はなかつた。

The + ADJECTIVE.

(1) 複數普通名詞の意味の事がある。

The rich=rich people『金持』。
The poor=poor people『貧乏人』。
The learned=learned men『學者』。
The sick=sick people『病人』。

The rich envy the happiness of *the poor*.

＝富者は貧民の幸福を羨む。

None but *the brave* (＝brave men) deserve *the fair* (＝fair ladies).

＝勇者に非ずんば美人を得るに足らず。

同じ形な單數の意味に使ふ事がある。

The deceased (故人). *The unknown* (未知物、知らぬ人).

The present (現在). *The accused* (被告).

Who is *his intended*?

＝彼の細君たる可き人は誰か。

(2) 抽象名詞の意味の事がある。

The true＝truth『眞理』。

The beautiful＝beauty『美』。

There is but a step from *the sublime* (＝sublimity) to *the ridiculous* (＝ridiculousness).

＝莊嚴と滑稽とは相距る唯一歩のみ。

(3) 部分を表はす事がある。

The yellow (part) of an egg『卵の黄身』。

The middle (part) of a river『川の中流』。

代名詞

(PRONOUN)

代名詞は其名の示すが如く名詞の代りに用ひる言葉である。若し代名詞がなくて一々名詞を使はなければならなかつたら繁雜に堪へない事であらう。此繁雜を避ける爲に用ひられるのが代名詞で至極重寶なものである。併し邦語や漢文では英語の樣に頻繁に代名詞を使はない。例へば清正なら清正の傳記を見給へ、清正と云ふ名が一頁に五つや十は珍らしくはなからう、けれども慣れて居るせいか左程耳障りにもならずに讀んで行くが英語では左樣はいかぬ。英語では同一名詞の連發は見っともないから出來得るだけ避けなければならぬ。隨つて英語では代名詞の用ひられる事は非常なものである。話の中に大勢の人の話が出て代名詞丈では分かり兼ねる場合にも或は前者と呼び後者といひ、或は職名を用ひ、或は何處國人といひ、或は渾名を呼んで成るべく同一名詞の連發を避ける。

且又邦語では不要な場合にでも英語では是非代名詞を使はなければならぬ事が度々ある。例へば

I lost *my* way in the woods.

＝森で道に迷つた。

Have you had *your* dinner?

＝御飯は濟みましたか。

I always drink *my saké* hot.

＝私は酒は何時も熱燗で飲みます。

He does not know *his* letters.

＝あの人はイロハも知らぬ。

人稱代名詞 (Personal Pronoun)

第一人稱と云ふのは話をする人、即ち "I" や "we" で、話を聞く相手の "you" が第二人稱。話題にのぼ

る人又は物（"he", "she", "it", "they"）は之を第三人稱と云ふ。第二人稱の"you"には單數複數の區別がないから前後の關係から之を推するより外に道はない。又一人稱や二人稱には男女の區別がないが、三人稱には男と女と物と皆夫々別々の語がある。併し複數は、"he"も"she"も"it"も皆"they"である。

格

名詞は主格の場合にも目的格の場合にも名詞其儘の姿を用ひ形の上からは少しの變化もなかつた、(だから其語の位置によつて主格であるか目的格であるかを判ずるより外はない)。唯所有格の時だけは語尾に Apostrophe (') や"'s"を附けるのであつた。

併し代名詞に於ては格毎に其形が變はる。隨つて Apostrophe を用ひる事もない。其變化を表に表はして見れば

		單數			複數		
		主格	所有格	目的格	主格	所有格	目的格
(一人稱)		I	my	me	we	our	us
(二人稱)		you	your	you	you	your	you
(三人稱)	男性	he	his	him	they	their	them
	女性	she	her	her			
	無性	it	its	it			

"Its"を間違へて"it's"とする人が往々あるが、"it's"は"it is"の略字であつて所有格ではない。

Case の事に關しては名詞の部〔P. 39〕で說明したから玆には五六の例を擧げる丈けに止めて置く。

(Nominative Case)

I am a man.

It was *he*. 〔參照: P. 157〕

It being cold, I had on a heavy coat.

(Possessive Case)

It is *your* coat.

(Objective Case)

He struck *me*.

He gave *it* to *me*.

He has no money with *him*.

本來"we"は複數の語であるけれども一國の帝王又は新聞雜誌記者が自分の事を"we"と云ふ事が度々ある。是れ主權者は萬民を代表するもの、記者も社員全體を代表する考から斯ういふ用法が出來たのである。我邦でも陛下が『朕』と仰せらるゝを譯したてまつるには常に"We"を用ふるのである。例へば『朕が忠良なる臣民』なども"Our good and loyal subjects"などゝ譯すべきものである。

又"we", "you", "they"が特別の人々を指すのではなく不定の意味に用ひられる事がある。其場合には之を譯する必要はない。

We should obey *our* parents.

= *You* should obey *your* parents.

(= *One* should obey *one's* parents.)

＝親の命には從はなければならぬ。

Do *you* eat this fish in your country?

＝御國では此魚を食べますか。

No, *we* never eat it.

＝イーエ決して食べません。

What language do *they* speak in America?

＝米國では何語を話しますか。

〔"they" は漠然と米國人を指す〕

They speak English there.

＝英語を話します。

They teach English in that school.

＝あの學校では英語を敎へます。

〔"They" は漠然と敎師を指す〕

On getting clear of the station, *we* get a sight of the sea.

＝停車場を離れると海が見える。

As *you* leave the village, a wide plain stretches before *you*.

＝村を出ると大きな原があります。

名詞の所有格の次には名詞を省略する事もあるけれども、代名詞の所有格の次には必ず名詞を置いて

My dictionary; *your* father; *his* name; *our* dog, *their* school.

などゝ云はなければならぬ。今『此は僕の本だ』を譯すれば無論

This is my book.

であるが是と同意味の『此本は僕のだ』は

This book is my book.

で正しい事は正しいが "book" が重複するから此形は避けなければならぬ。と云つて又

This book is my.

丈でもいけない、今も言ふ通りに "my" の次には必ず名詞が來なければならぬから。斯の如く代名詞の次の名詞を略する場合に備へん爲にチャンと特別な形が出來て居る。其形を所有格の Absolute Form だと云ふ。

My ＋名詞＝*mine.*
Our ＋名詞＝*ours.*
Your ＋名詞＝*yours.*
His ＋名詞＝*his.*
Her ＋名詞＝*hers.*
Their＋名詞＝*theirs.*

The hat on that hat-rack is not *mine*, but *yours*.

＝あの帽子掛の帽子は僕のぢやない、君のだ。

Mine is better than *his*.

＝僕のは彼のよりも善い。

A Friend of Mine.

That Book of Mine.

今『彼は僕の友人だ』を譯するに當り

He is my friend.

とするのは可けない。名詞の部で話した通りに〔P. 44〕

所有格は定冠詞の "the" に代はつたものと見る可きものであるから『兄嫁』即ち "*the* wife of my brother" ならば "my brother's wife" と云つて少しの差支もないが、『僕の友人』は澤山ある、そして『彼』なる人は其友人の一人に過ぎないから "my friend" とは云はれない。"My friend" と云へば "the friend" の意味になつて一人の定まれる友を指す事に成る。

He is one of my friends.

とすれば無論正しいには違ひないが普通は

He is *a friend of mine.*

の形を使ふ。

He is *a relation of hers.*

＝あの人はあの女の親戚だ。

I went there with *a friend of yours.*

＝僕は或る君の友人と行つた。

He seems to be *a friend of my brother's.*

＝あの人は僕の兄の友人らしい。

それでは "my friend" は絶對に使はれぬ形かと云へばさうでもない。次に舉ぐるが如き或る特別の定まれる友を指す場合には無論使はれる。

(*a*) 誰の事を話して居るのかゞ相手の人に判かる時—

Mr. Sato and I used to live in the same house. *My friend* (=he) was an early riser, while I always got up at eight or nine.

＝佐藤君と僕とは元同じ家に居たが、佐藤君は早起なのに引かへて僕は何時も八時か九時に起きたものだ。

(*b*) 人の姓名と共に用ふる時—

My friend Kato is a late riser.

＝僕の友達の加藤は寝坊だ。

現今の英語では "this", "that", "no" などを所有格の前に置く事は出來ない事になつて居る。だから『僕のあの本』を "my that book" と直譯すれば誤である。斯ういふ場合には矢張 "a friend of mine" の形に倣つて "*that* book *of mine*" とする。併し此形を使へばとて其所有物は必ずしも澤山あるとは限らぬ。たつた一つしか無い場合でも宜しい。

This watch of mine is a good time-keeper.

＝此僕の時計は時間がよく合ふ。

That uncle of yours is very kind, isn't he?

＝あの君の叔父さんは大層深切な方ですね。

May I look at *that album of yours?*

＝あの君のアルバムを見ても可いか。

That is *no business of yours.*

＝貴様の知つた事ぢやない。

One's Self.

He killed her.＝彼は其女を殺した。

と云へば殺した人は "He" で、殺された人は "her" だと云ふ事は言を待たないが、今 "He" が他人を殺したのでなくて自分自身を殺す、即ち自殺したと云ふ場合には

He killed him.

とは云はない。自分の動作を自分で受けたと云ふ事を表はす爲に "self" を附けて

He killed *himself*.

と云はなければならない。斯くの如く "-self" の附いた形を Reflexive Pronoun と云ふ。一般的の形は "one's self" 〔普通には "oneself" と云ふ〕で、人稱別にして書きならべて見れば

Myself.....Ourselves.
Yourself.....Yourselves.
Himself, Herself, Itself .....Themselves.

〔是等は Nominative の場合でも Objective の場合でも同じ形を使ふ〕

I seated *myself*=I sat down.
=僕は腰掛けた。

〔"Seat" は『腰掛けさせる』と云ふ事。で自分で吾身を腰掛けさせるのなら詰り『腰掛ける』と同じ事に成る〕

She laid *herself* down (=lay down).
=其女はねころんだ。

She hanged *herself*.=縊死した。

They drowned *themselves*.=身を投げて死んだ。

It is hard to know *oneself*.=己を知るは難し。

He concealed *himself* behind the door.
=彼は戸の陰に身を隠した、〔即ち〕隱れた。

He picked *himself* up.=彼は起き上がつた。

I overate 〔overslept, overworked〕 *myself*.
=僕は食ひ〔寢、働き〕過ごした。

Help *yourself*.=(他人の力に賴らず)自分でやれ。

Please help *yourself* to the cake.
=どうか勝手に御菓子を御取り下さい。

Please make *yourself* at home.
=どうかお寛ろぎ遊して。

I could not make *myself* understood.
=I could not make them understand me.
=僕の言ふ事が先方に通じなかつた。

He made *himself* feared by his cruelty.
=彼は殘酷な爲に恐れられた。

He thinks *himself* (=that he is) right.
=彼は自分で正しい積りだ。

I found *myself* (=that I was) safe in bed.
=見ると自分はチャンと床の中に居た。

I have greatly *enjoyed myself*.
=大層愉快でした。

It is no use trying to *excuse yourself*.
=言譯しようとしても駄目だよ。

Do not *absent yourself* on any account.
=どんな事があつても缺席するな。

He *availed himself of* the opportunity.
=彼は其機會を利用した。

I will *revenge myself* (on the enemy).

=僕は仇を打つ。

前置詞と合して成句をなす主な例を擧ぐれば

He is *beside himself* with anger.

=彼は氣違の樣に成つて怒つて居る。

I went there all *by myself* (=alone).

=私はたつた一人で行きました。

I like to do everything *for myself*.

=僕は何でも(人の助をからずに)獨(力)でする事が好きだ。

I love labour *for itself* 〔又は for its own sake; for labour's sake〕.

=彼は勞働其ものを愛して居る、働くのが好きで働く(報酬の爲に働くのではない)。

The light went out *of itself*.

=灯は獨り手に(自然と)消えた。

A thing good *in itself* may become bad by its use.

=本來善い物でも用ひ樣によつては惡くもなる。

Between ourselves, he is a Eurasian.

=內證ですがね、彼は混血兒ですよ。

Reflexive Pronoun は又唯單に意味を强める爲に用ひられる事がある。

I did it *myself*.

=(人にさせたのではない)僕が自分でやつたのだ。

It was the president *himself*

=それは大統領其人であつた。

Napoleon *himself* (=even Napoleon) could not have done it.

=ナポーリオンだつて到底出來なかつたらうよ。

I am a student *myself* (=too).

=私も矢張學生です。

Reflexive の所有格の形は普通の所有格の次に "own" を添へて

My own.....Our own.
Your own.....Your own.
His own / Her own / Its own .....Their own.

と云ふ。そして其一般的の形は "one's own" である。

One's Own.

"One's own" は普通の所有格よりも意味が强い。

I mistook your book for *my own*.

=僕は君の本を僕の本と間違へた。

I saw it with *my own* eyes.

=僕は現在此黑い目で見たのだ。

My own dear child.

=私の可愛い可愛い子供。

"His house" と云つても彼の所有の家なのか又は借

りた家なのか判然しない。所有の意味を明かに表はすには "own" を用ひて

That is *his own* house.

＝あれは彼の〔所有の〕家だ。

とすれば宜しい。處で『彼は自分の家がある』と云ふ事はどう譯したらば可からうか。

He has his own house.

で可さゝうに思はれるが能く考へて見ると可笑しな文章だ。先づ "his own house" と云へば『彼の所有の家』である。それに "He has" を附けると『彼は彼の所有の家を所有して居る』と云ふ意味に成るから此形は決して使つては可けない。必ずや

He has *a* house *of his own*.

＝彼には家がある、其家は彼自身のだ。

としなければならぬ〔參照： P. 108〕。其否定は

I have *no* house *of my own*.

＝僕には自分の家がない。

The moon has *no* light *of its own*.

＝月は自分で光るのではない。

要するに "have" の次には "one's own＋NOUN" は使はれない。但し主格に "each" がある場合は例外で習慣が之を許して居る。

Each boy *has* his *own* room.

＝子供には銘々室が一つ宛當てがつてある。

Each of them *has* his *own* dictionary.

＝彼等は銘々辭書を持つて居る。

"One's own" には又一つの慣用的な用法がある。例へば

He cooks *his own* food.

と云へば日本人の頭には『彼は自分丈けの食物は料理するが他人のは料理しない』と云ふ風に思はれるけれども、夫は此眞意義ではない。此の "own" には "for oneself" 卽ち『獨力』での意味が含まれて居て

『彼は自分の食物は自分で料理する』

と云ふ意味である。尙ほ一二の例を擧ぐれば

He cleans *his own* boots.

＝彼は自分で靴を磨く。

He can not get *his own* living.

＝彼は自分で口過ぎが出來ぬ。

It.

○ "It" は或る定まつた單數名詞を受ける場合に使ふ代名詞であるから

Do you want *my knife*?

と云ふ問に對してならば

Yes, I want *it*.

と言へるが、定まらぬ名詞を "it" で受ける事は出來ない。例へば

Do you want *a knife*?

と云ふ文章に於ては其ナイフは或る定まつたナイフを云ふのではない、どんなナイフでも構はぬが兎に角『ナイフが(一挺)要るか』と云ふ問であるから此場合に

Yes, I want *it*.

と返答すれば誤謬に成る。必ずや不定單數名詞を受ける "one" を使つて

I want *one*.

としなければならない。

併し假令不定冠詞の附いた單數名詞を受ける場合でも次の樣な場合には定まつた物の事を云ふのだから "it" を使ふ。

He brought *a knife* and lent *it* to me.

=彼はナイフを持つて來て其を僕に貸して呉れた。

又主格と成る場合には不定名詞を受ける時でも "it" を使ふ。

What is *a fox* like? (狐はどんなものか)

I have never seen *one* (=a fox); so I don't know what *it* (=a fox) is like.

(見た事がないからどんなものか知らぬ)

It (=a fox) looks like a small dog.

(小さい犬の樣なものだ)

"It" は又前に在る Infinitive ("to" の附いた動詞) や文章を受ける事もある。

I attempted *to speak*, but I found *it* impossible.

=物を言はうとしたが駄目だつた。

I have treated him as he deserved: and he knows *it*.

=僕は彼相當な取扱をしたのであつた、そして彼は其事を知つて居る。

"It" は又後に來る Infinitive や、"that" などで始まつた Noun Clause (名詞の意味の文章) を受けて形式上の主格や目的と成る事がある。例へば

It is wrong *to tell a lie*.

=嘘を言ふのは惡い。

It is certain *that we shall succeed*.

=僕等が成功する事は慥な事だ。

英語では何故こんな言ひ方をするのか日本人には不思議に思はれる。"*To tell a lie* is wrong"; "*That we shall succeed* is certain." と眞直に言つても可からうではないかと云ふ疑が起こる。成程此言ひ方も有る事は有るが普通ではない。凡そ英語では長い言葉を文章の主格にしたり目的にしたりする事を嫌がる。先づ成るべく簡單に大體の事を言つて置いて、然る後に詳細な事を説明するのが英語の癖である。さつきの場合でも『嘘を言ふ事は』『僕等の成功する事は』は文章の主格ではあるが長いから皆文章の最後に押しやつて、主格のあるべき地位には "it" といふ形式的の主格を置くのである。類例を示さば

It is not good *for students to smoke*.

=學生が喫煙するのは善からぬ事である。

("For" の附いた名詞が "to" のついた動詞の前に來る時には其名詞は其動詞の意味の主格であるから常に『……が……する事は』と譯する)

It is a secret *how I did it*.

=どうしてしたかそれや秘密だ。

I thought *it* wrong *to disobey*.

＝命令に背くのは惡いと思つた。

I think *it* likely *that he will fail this time*.

＝今度彼が失敗する事は有りさうな事と思ふ、あの人は今度は失敗しさうだ。

"It" が又人稱、數に關係なく人や物などを指す事がある。

Who are you!—*It* is *I*.

＝誰だ——僕だ。

（"It is *I*" は正しい形には違ひないが、普通は "It is *me*" と云ふ。P. 158 參照）

Who broke it?—*It* was *they* that broke it.

＝誰が毀したか——毀したのは彼等だつた。

文章中の或一語又は一句に特に力を添へん爲に之を "It is.....that" の間に挿みて文の冒頭に置く事がある。

He struck this boy on the head yesterday.

（彼は昨日此子の頭を打つた）

It was he *that* struck the boy.

（あの男だつたよ、此子を打つたのは）

It was this boy *that* he struck,

（此子だつたよ、彼が打つたのは）

It was on the head *that* he struck this boy.

（頭だつたよ、彼が此子を打つたのは）

It was yesterday *that* he struck this boy.

（昨日だつたよ、彼が此子を打つたのは）

"It" はまた天氣、時間、距離を表はす時に漠然と其主格として用ひられる。『雨が降る』なら

Rain falls.

でもよいが、"rain" といふ動詞は其一語で『雨が降る』意味に成る。併し動詞だけあつても文章にならぬから "it" を主格として

It rains.

とする。

（天候）

It snows.＝雪が降る。

It blows.＝風が吹く。

It hails.＝霰が降る。

It thunders.＝雷がなる。

It has cleared up.＝霽れた。

It is fine.＝好天氣だ。

It is cloudy.＝曇天だ。

It is cold.＝寒い。

It is getting colder.＝日增しに寒くなつて來ます。

It is ten years since he died.

＝彼が死んでから十年に成る。

（時間）

It is Sunday to-day.＝今日は日曜だ。

It is eight o'clock.＝今八時だ。

It is time to go to school.＝學校へ行く時間だ。

（距離）

How far is *it* from here to Sendai?

＝仙臺へは何里ありますか。

It is about two hundred miles.

＝彼是二百哩あります。

It is five minutes' walk from here to the station.

＝停車場へは歩いて五分ばかりかゝります。

"It" はまた不定の意味を以て慣用的に使はれる事がある。

I had to *foot it* (=go on foot).

＝テクテク歩かなければならなかつた。

Can you swim *it*?

＝(其距離が)泳いで行けるか；泳いで來られるか。

Rumour *has it* (=says) that he left town last Sunday.

＝此前の日曜日に退京したと云ふ噂だ。

Let us *fight it out*.

＝飽くまで戰はう。

You will *catch it*.

＝叱られるぞ、御目玉を頂戴するぞ。

We *had a hard time of it*.

＝ひどい目に遇つた。

He felt that he *had the best of it*.

＝彼は自分が勝つたのだなと思つた。

It fared well with him.

＝彼は都合よくいつた。

It went hard with him.

＝彼は酷い目に逢つた。

It is with ignorant people *as with* shallow waters.

＝Ignorant people *are like* shallow waters.

＝無學な人は淺い川の樣なものだ。

One.

前の名詞を受けて不定冠詞を用ふる場合、即ち(a＋名詞)の代りに用ふる代名詞は "one" である。

Have you a pencil?

Yes, I have *one* (=a pencil).

＝鉛筆があるか——ある。

I want a dictionary, but I have no money to buy *one* (=a dictionary) with.

＝僕は字引が要るが買ふ金がない。

今云ふ通り "one" は (a＋名詞)の代用語ではあるが、形容詞が附く場合には別に冠詞を附けて "a ～ one" とし、複數の場合には語尾に "s" を附けて "ones" とする。是を以て之を見れば此 "one" は『一つ』と云ふ意味の形容詞 "one" と形こそ同じけれ全く別物で、唯名詞の反覆を避ける爲に使ふ語だと云ふ事が判かる。

This apple is *a big one*.＝此林檎は大きなのだ。

I have three coats; *a new one* and *two old ones*.

＝僕は上着が三つある、新しいのが一つと古いのが二つと。

但し "ones" は形容詞の無い場合には使はぬ。

Have you a knife?

Yes, I have *one*.

Have you any knives?

Yes, I have *some*.

I have some *sharp ones*.

併し "one" は必ずしも不定冠詞のつく場合のみとは限られて居ない。假令 "the" がつく場合でも同名異物ならば矢張 "one" を用ひて "the one" と云ふ。

Is this cap yours?

No, *it* (=the cap) is my brother's. .....〔同一物〕

Mine is *the one* (=the cap) on the table.〔同名異物〕

=僕のはテーブルの上にある分だ。

This book is more interesting than *the one* (=the book) I read yesterday.

=此本は昨日讀んだのよりも面白い。

同じく "the" の附くべき同名異物でも其次に "of" が來る場合に限り "the one" を用ひずして "that of" とする。

Its tail is just like *that* (=the tail) *of* a deer.

=其尻尾は丁度鹿の尻尾の樣だ。

The ears of a rabbit are much longer than *those* (=the ears) *of* a dog.

=兎の耳は犬のよりも餘程長い。

比較:—

This gate is finer than *the one* over there.
This gate is finer than *that of* our school.

今迄の譯語によつて "one" は邦語の『この分』『どちらの方』『大きいの』などの『分』『方』『の』に相當すると云ふ事が分かる。

Which *one* shall I give you?

=どちらの方を差上げませうか。

Give me that *one*.

=あの分を下さい。

I want the larger *one*.

=僕は大きい方が欲しい。

"One" は所有格の次には用ひられない。例へば『田中の分』は "Tanaka's one" とは云はないで唯單に "Tanaka's" とする。代名詞の場合でも "my one" とか "your one" とは決して云はないで、必ず Absolute Form〔P. 107〕を使ふ。

Mine is better than *his*.

=僕のは彼のよりもよい。

My brother's is a black *one*, while *hers* is a red *one*.

=兄さんのは黑いのだが、あの女のは赤いのだ。

併し所有格の場合でも形容詞がある場合には矢張 "one" を使ふ。

My old *one*.=僕の古い分。

Tanaka's new *one*.=田中の新しい分。

今迄御話した "My brother's" とか "Tanaka's" とか云つて其次に名詞を略するのは勿論前からの話の續き合ひで『兄さんの本』とか『田中のナイフ』とかいふ事がすぐ了解の出來る場合に限られて居る。此場合に "My brother's book," "Tanaka's knife" と云へば無論完全ではあるが "book" とか "knife" とか云ふ語が前に出て居る爲に別に其名詞を繰返す必要はないから之を略したのである。處が茲に何等話の續き合ひもなく始めから "My brother's," "Tanaka's" と云つて意味の通ずる事

がある、此場合には其次に "house" とか "shop" とかの字を省いたものである。〔參照: P. 42〕

I met him at *Tanaka's* yesterday.

＝昨日田中の家で彼に逢つた。

I have been to my *uncle's*.

＝僕は伯父の處へいつて來た。

I bought this atlas at *Nakanishiya's*.

＝僕は此地圖を中西屋書店で買つた。

"One" は又 "first", "second" などの如き序數の次には用ひられない、又物質名詞の代りにも使はれない。

We finished the second chapter yesterday. To-day we begin *the third*.

＝昨日第二章が濟んだから、今日は第三章を始める。

At sea they have to use salt water instead of *fresh*.

＝航海中には淡水の代りに鹽水を使はなければならぬ。

"One" が "any one" の意味になる事がある。此場合には "we," "you" などと等しく『凡そ人は』の意味ではあるが譯語を下さぬ場合が多い。

One 〔又は we, you〕 can not be too careful.

＝人といふものは如何に注意しても尙且つ注意の足りないもので注意し過ぎると云ふ事はないものだ、念には念を入れよ。

One must avoid bad company.

＝惡友は避けなければならぬ。

One who is contented is happy.

＝Those who are contented are happy.

＝分に安ずるものは幸なり。

"One" を受ける代名詞は常に "one" である。

One should obey *one's* parents.

＝人は兩親の言に從ふべきものである。

One must keep *one's* promise.

＝約束は守らなければならぬ。

When the roads are muddy, *one* must pick *one's* way.

＝道が惡い時には道を拾つて歩かなければならぬ。

但し "one" の前に "no", "any", "every" などの形容詞があつた時には "he" で受ける。

Every one of them did *his* best.

＝みんなが全力を盡した。

No one could sign *his* own name.

＝自分の名の書けるものは一人もなかつた。

If *any one* of you needs help, let *him* come to me.

＝諸君の內誰か助けて貰ひたい人があるなら僕の處へ來給へ。

疑問代名詞 (Interrogative Pronoun)

疑問代名詞とは人又は物の名などを問ふ時に用ふる言葉で "who," "what," "which" の三語は即ち是である。

是等の語は單複とも皆同じ形である。そして直接疑問の時には常に之を文の冒頭に置かなければならぬ。

"Who" は人にのみ用ふる語で、其人の名や其人の血族關係などを尋ねる場合に用ひられる。

Who is he?——He is Mr. Brown.

Who is she?——She is a friend of my sister's.

Who are those boys?——They are my sons.

"What" が人に用ひられた時には其職業を尋ねる事になり、事物に用ひられた時には其名を聞く事になる。

What is he?——He is a physician.

What do you need?——I need some money.

What did you do?——I struck him.

"What" から出來た成句の二三を示さば

The table is loaded with toys, pictures, *and what not.*

=卓上には玩弄物や、繪畫や其他何やかや載せてある。

I'll tell you what,——you will have to fight him some day.

=あのね、君は何時かあの男と喧嘩しなくちゃなるまいよ。

What 〔would you do *or* would be the result〕 *if* you should fall ill?

=病氣に成つたらどうする、大變だ。

What 〔matters it〕 *though* 〔or *if*〕 I fall ill?

=病氣に罹つたつて何ともない。

What with illness, *what with* idleness, he is now on the brink of bankruptcy.

=病氣するやら怠けるやらで彼は今破產に瀕して居る。〔原因〕

What by threats, *what by* entreaties, he accomplished his purpose.

=脅したり賺したりして目的を遂げた。〔手段〕

"Which" は人にも物にも用ひられ常に撰擇の意を表はす。

Which is your father?

=どれが御賢父樣なんですか。

Which will you have, beer or wine?

=どちらを上げませうか、麥酒ですか葡萄酒ですか。

Which are your books?

=どれとどれが君の本ですか。

比較:—

Who went there?
(誰が行つたのか)
Which of you went there?
(君方の中誰が行つたのか)

"Which" や "what" は格、即ち Case によつて其形の變る事はないが、"who" は所有格の時には "whose" と成り、目的格の時には "whom" となる。

This is *his* book.
Whose book is this?

I teach *him.*
Whom do you teach?

若し疑問代名詞が前置詞の目的に成つた場合には、其前置詞は疑問詞の前に來る事もあれば、元の位置に留ま

る事もあるし、又兩方孰れの位置に置いても差支ない場合もある。

He is speaking of Mr. Smith.
（あの人はスミスさんの事を言つてるのです）
Whom is she speaking *of*?
Of whom is she speaking?
（あの女は誰の事を言つてるのですか）

That letter is for my father.
（あの手紙は御父さんに來たんだ）
Whom is this letter *for*?
（此の手紙は誰に來たのか）

That was painted by my brother.
（あれは兄さんが畫いたのだ）
By whom was this painted?
（是は誰が畫いたのか）

We eat with chopsticks.
（僕等は箸で食べる）
What do they eat *with*?
（あの人達は何で食べるか）

比較：—

Did you meet *any one*?
（誰かに逢つたか）
Whom did you meet?
（誰に逢つたか）

Do you want *anything*?
（何か要るのか）

What do you want?
（何が要るのか）

Have you read *any* of these books?
（此本の中どれか讀んだのか）
Which (book) have you read?
（どの本を讀んだのか）

Have you *any* pencils?
（鉛筆があるか）
How many pencils have you?
（何本あるか）

凡そ疑問文には助動詞（又は "be" や "have"）を以て始まるものと、疑問詞を以て始まるものとある。而して前者は "Yes," "No" で返答が出來るが、後者は "Yes," "No" で返答する事は出來ない。例へば

(*a*) *Are* you a student?
Yes, I am.
Have you a pencil?
No, I have none.
Do you want a pencil?
Yes, I want one.

(*b*) *What* do you want?
I want some pens.

即ち (*a*) に於ては皆 "Yes," "No" を以て之に答へる事が出來るが (*b*) は "Yes," "No" で返答が出來ない。

今『彼は誰だか御存じですか』ならば "Yes," "No" で返答が出來るから助動詞を文の始に置いて

Do you know who he is?

とすれば可いが、『彼は誰だと思ひますか』は "Yes," "No" では返答が出來ない。だから此文章は疑問詞を以て始めなければならぬと云ふ事が分かる。そして其場合には "do you think" を疑問詞の次に置いて

Who *do you think* he is?

としなければならない。

是を以て見れば "Do you *know*?" "Did he *tell* you?" "Has she *asked* you?" などは疑問詞の前に置く可きものであるけれども、"do you *think*?" "did you *imagine*?" "do you *suppose*?" などの如き判斷動詞は疑問詞の次に置く可きものだと云ふ事が判かる。例を擧ぐれば

Have you asked him what he wants?
　＝彼は何が要るのか君は聞いて見たか。
Did he tell you when he was going abroad?
　＝彼は何時洋行するか君に話したか。
When *do you suppose* he left Tokyo?
　＝彼は何時退京したと思ふか。
What *do you imagine* he has come for?
　＝彼は何しに來てると思ふ。

Do you know what this box contains?
　(此箱には何が這入つて居るか御存じですか)
What *do you think* this box contains?
　(此箱には何が這入つて居ると思ひますか)

併し "say" には兩方の形共使はれる。けれども其意味に相違ある事は言ふまでもない。

What *did you say* you wanted?
　—I said I wanted some paper.
　(君の欲しい物は何だと言ひましたつけね
　　—紙が欲しいと言ひました)
Did you say what you wanted?
　—*No*, I did not.
　(何が要るのか君は僕に言つたつけね
　　—イーエ言ひませんでした)

意味ハ何ニ相違アリヤ

What time *did he say* he was coming again?
　—He said he would be here again at six.
　(何時にまた來ると云つたか
　　—六時に來ると申されました)
Did he say what time he was coming again?
　—No, he didn't.
　(また來る時間を言つて置いたか—
　　—イーエ何とも申されませんでした)

關係代名詞 (Relative Pronoun)

邦語では名詞を形容する語句は其長短を問はず必ず名詞の前に置くが、英語でも形容詞や分詞の或る者は邦語に於けると同樣名詞の前に置くけれども、形容する言葉が長い場合、即ち Phrase や Clause が形容詞の働きを

して名詞に或る意味を添へる場合には必ず其次に置かなければならぬ。

『大きな本』は　A *large* book.
『面白い本』は　An *interesting* book.
『君が借して呉れた本』は
The book *which you have lent me.*

『長い川』は　A *long* river.
『東京市を流るゝ川』は
The river *which flows through the city of Tokyo.*

『是は重大な問題である』は
This is an *important* question.
『是は等閑に附する事の出來ない重大な問題である』は
This is a question *too important to be neglected.*

是と同様に『無人島』と云ふ事でも一つの分詞を使つて云へば "An *uninhabited* island" と云ふが、同じ意味でも『人の住まはぬ島』と長い形容句を使ふ場合には英語では『島——人の住まはぬ』と云ふ様に書かなければならぬ。であるからして斯う云ふ英文を邦語に譯する場合には必ず後ろの方から溯つて譯をしなければならぬと云ふ事が分かる。

今云ふ通り日本語ではどんな形容語句でも必ず名詞の前に置くからして言葉の順序によつて、動詞が名詞を形容して居るか(即ち連體段であるか)又は賓辭(即ち終止段)であるかゞ分かる。『人が來た』の『來た』は賓辭で、『來た人』の『來た』は連體段だと云ふ事が分かるし、『彼

は僕に本を貸して呉れた』と『彼が僕に貸して呉れた本』とに於ても、前者の『貸して呉れた』は賓辭で、後のは『本』を形容したものだと云ふ事が分かる。併し英語では何れの場合にも動詞を名詞の次に置くからして、兩者の混同を避ける爲めに特別の機關がなければならぬ。此特別機關が "wh," "which" などの關係代名詞である。

『人が來た』は　A man came.
『來た人』は　The man *who* came.

『彼は僕に本を貸して呉れた』は
He has lent me a book.
『彼が僕に貸して呉れた本』は
The book *which* he has lent me.

關係代名詞は接續詞の働きと代名詞の働きとを一語に兼ねたものである。人に用ふる關係代名詞は "who" で、物や動物には "which" を使ふ。格の變化は

	〔主格〕	〔所有格〕	〔目的格〕
(人)	who	whose	whom
(物)	which	whose / of which	which

今『あれが僕に本を呉れた人です』と云ふ文章を見るに、此文は

A man gave me the book.....(*a*)
That is the man.....(*b*)

の二文を結合したものと見られる。そして『僕に本を呉れた』は『人』なる名詞を形容したものである、即ち(*a*)は長い形容文であるから之を(*b*)の "the man" の次

に置く。二文を結ぶのには接續詞が必要であるから

That is the man 〔接〕 *He* gave me the book.

と成る。今接續詞の働きと"*He*"の働きとを一語に兼ねた關係代名詞を使はうと思ふ。"*He*"は人で、格は主格であるから"who"を用ひて

That is the man *who* gave me the book.

又『是は叔父が呉れた本です』は

{My uncle gave me a book .....(*c*)
{This is the book .....(*d*)

の二文を合したものである。そして『叔父が呉れた』は『本』を形容するから、(*c*)を(*d*)の"book"の次に並べて見ると

This is the book 〔接〕 My uncle gave *it* me.

"*it*"は無生物で、格は目的格であるから此場合に用ふべき關係代名詞は"which"である。凡て關係代名詞は二文接續の働きをするから"which"を"book"の次に置いて此等兩文を結ぶ。そして"which"は又代名詞の働きをも兼ねて居るから"*it*"を省いて

This is the book *which* my uncle gave me.

とする。

形容文(Adjective Clause)〔參照 P.429〕によつて形容せらるゝ名詞を先行語(Antecedent)と云ふ。そして關係代名詞以下の形容文は先行語を說明する形容詞の樣なものであるから、其先行語は主文の始めにあつても、中程にあつても、終りにあつても、形容文は常に直ぐ其次に

置かなければならぬ。丁度幹から出た枝の樣なものであるから、其枝は必要な場所ならば何處からでも處嫌はず出る。今『ランダン市中を流るゝ川をテムズと云ふ』と云ふ文を譯するに、此文は

{A river flows through the city of London .....
{The river is called the Thames.....(*f*)

の結合と見るべきものである、そして『ランダン市中を流るゝ』と云ふ形容文は"The river"を形容して居るから(*e*)を其次に置いて見ると

The river (〔接〕 *It* flows through the city of London) is called the Thames.

川は無生物であるから"which"を使つて

The river *which* flows through the city of London is called the Thames.

『昨日僕等が加藤の處で逢つた人は金持らしい』は

{The man (〔接〕 We met *him* at Kato's yesterday) seems to be a rich man.
{The man *whom* we met at Kato's yesterday seems to be a rich man.

『兩親のなき子を孤兒といふ』は

{A child (〔接〕 *His* parents are dead) is called an orphan.
{A child *whose* parents are dead is called an orphan.

『昨日家の燒けたのは此の方です』は

This is the gentleman 〔接〕 *His* house was burned down yesterday.
This is the gentleman *whose* house was burnt down yesterday.

『玄關に立つて居る婦人を知つて居るか』は

Do you know the lady (〔接〕 *She* is standing at the door)?
Do you know the lady *who* is standing at the door?

『寡婦とは一度結婚して其夫の死んだ女である』は

A widow is a woman (〔接〕 *She* has once been married and *her* husband is dead.)
A widow is a woman *who* has once been married and *whose* husband is dead.

『頂上が見えるあの山が新高山だ』は

The mountain (〔接〕 We see *its* summit) is Mt. Niitaka.
The mountain *whose* summit we see is Mt. Niitaka.

The mountain (〔接〕 We see the summit *of the mountain*) is Mt. Niitaka.
The mountain *of which* we see *the summit* is Mt. Niitaka.
The mountain *the summit of which* we see is Mt. Niitaka.

前にも言ふ通り

『僕は外國人に逢つた』は I *met* a foreigner.
『僕の逢つた外國人』は The foreinger *whom* I *met*.

『彼は椅子を買つた』は He has *bought* a chair.
『彼の買つた椅子』は
The chair *which* he has *bought*.

であるが、是等は皆他動詞であるから容易いが、自動詞の場合には餘程注意をしないと間違をし易い。

『僕は此家に住む』は "I live *in* this house." であるから
『僕の住む家』は The house *in which* I live.
又は The house *which* I live *in*.
としなければならぬ。然るに日本學生は往々此 "in" を脱かして "the house which I live" とする傾があるから特に注意をして前置詞を落さぬ樣にしなければならない。

『僕は其西洋人に物を言つた』は
~~I spoke to~~ the foreigner.

『僕が物を言つた西洋人』は
The foreigner *to whom* I spoke.
The foreigner *whom* I spoke *to*.

『君は椅子に掛けて居る』は
You are sitting *on* a chair.

『君の掛けて居る椅子』は
The chair *on which* you are sitting.
The chair *which* you are sitting *on*.

『僕は人の家に世話になつて居る』は
I live *with* a man.

『僕の世話になつて居る人』は

The man *with whom* I live.
The man *whom* I live *with*.

『僕は英語學校へ行く』は

I attend an English school.
I go to an English school.

『僕の行く英語學校』は

The English school *which* I attend.
The English school *to which* I go.
The English school *which* I go *to*.

『君の御話の人は未だ來ません』は

The man (〔接〕You speak of *him*) has not come yet.
The man {*of whom* you speak / *whom* you speak *of*} has not come yet.

是に依つて見れば斯の如き場合の前置詞は關係代名詞の前に來る事もあれば自動詞の次に來る事もあると云ふ事が判かる。

關係代名詞には "who," "which" の外に "that" もある。"That" は "who," "whom," "which" の代用となり、人の場合にも物の場合にも使はれるが、所有格の場合には決して使はれない。

『あれが僕等に英語を敎へる英國人です』は

He is the Englishman {*who* / *that*} teaches us English.

『あれが僕の敎へる子供だ』は

That is the boy {*whom* / *that*} I teach.

『容易くて面白い本が欲しい』は

I want a book {*which* / *that*} is both easy and interesting.

併し "that" の前には前置詞を置く事が出來ないから "that" を用ふる場合には前置詞は必ずや動詞の次に置かなければならない。例へば

『僕が敎育された學校』は

The school *in which* I was educated.
The school *which* I was educated *in*.
The school *that* I was educated *in*.

『僕が泊つて居る内の人』は

The man *with whom* I am staying.
The man *whom* I am staying *with*.
The man *that* I am staying *with*.

(I am staying *with him*. / =I am staying *at his house*.)

是等いづれの形も同樣に使はれる。"That" は今云ふ通り "who" や "which" などの代用ではあるが、次の樣な場合には必ず "that" を使はなければならない。

(1) 先行語の形容詞が最上級の時。

He is the *tallest* man *that* I ever saw.
=僕が今迄見た中で彼が一番丈が高い。

He was the *first* teacher *that* came.
=眞先に來られた先生はあの先生だつた。

(2) "*The only*," "*the same*," "*the very*" などの次。

He was the *only* boy *that* failed.

=落第したのはあの子丈け。

This is the *same* watch *that* I lost.

=是が即ち僕の失くした時計だ。

(3) 人と動物(又は物)とが先行語の時。

The *boy* and his *horse that* fell over the precipice were killed on the spot.

=崖から落ちた子供と馬とは即死した。

此場合に "who and which" では可笑しいから然うは云はぬ。

(4) 疑問代名詞の次にも必ず "that" を使ふ、と云ふのは "Who who.....?" "What which.....?" は聞き苦しいからである。

Who that has common sense can do such a thing?

=常識ある者に誰がそんな事が出來るものか。

Who is the man *that* is standing outside the gate?

=門の外に立つて居るのは誰か。

"That" が目的格の時には隨意に之を省略する事が出來る、又實際談話の際には省略するのが普通である。語を換へて云へば、凡そ目的格の關係代名詞は何時でも省いて構はない、但し其場合には前置詞は元々通りの位置、即ち動詞の次に來なければならない。

『僕の讀んで居る本は易さしい』は

The book {*which* / *that*} I am reading is easy.

The book I am reading is easy.

『僕が昨日逢うた人』は

The man {*whom* / *that*} I met yesterday.

The man I met yesterday.

『君が掛けて居る椅子は毀れて居る』は

The chair *on which* you are sitting is broken.

The chair {*which* / *that*} you are sitting *on* is broken.

The chair you are sitting *on* is broken.

『あれが僕の乘つて行く船です』は

That is the steamer *in which* I am going.

That is the steamer {*which* / *that*} I am going *in*.

That is the steamer I am going *in*.

『僕が一緒に行かうとして居る人は米國人だ』は

The man *with whom* I am going is an American.

The man {*whom* / *that*} I am going *with* is an American.

The man I am going *with* is an American.

目的格の關係代名詞は何故省略する事が出來るのであらうか。其理由は今迄御話した處から容易く推知する事が出來ようが、今一度簡單に說明したいと思ふ。

『人が來た』.....A man *came*.

『來た人』.....The man *who came*.

に於けるが如く邦語では同じく『來た』でも其位置によつて終止段に使つてあるか、連體段となつて名詞を形容して居るかゞ容易に判かるから都合が好いけれども、英語では語の配列順序丈では其區別を知る事が出來ない。だから此"came"は連體段の働きをして其前の"The man"を形容するのであるぞと云ふ事を示さん爲に"who"と云ふ關係代名詞の必要があつた。此場合には"who"は必要缺くべからざるものである、即ち關係代名詞が Nominative Case の場合には省略が出來ないのが通則である。

然るに次の樣な場合ではどうであらう。

『僕は其本を讀んだ』は　*I have read* the book.

『僕が讀んだ本』は　The book (which) *I have read*.

日本語では語の配列順序によつて『讀んだ』が終止段に成つて居るか、連體段に成つて居るかゞ判かると同樣に、英語でも此等兩文中の"I have read"は其位置が全く違ふから、語の配列順序によつて"book"を形容したものであるかどうかと云ふ事が容易に見分けが附く。順序によつて立派に見分けが附くものなら何も關係代名詞などゝいふ厄介な物は使はなくても濟む筈、簡潔を貴ぶ口語に於ては猶更の事である。だから關係代名詞が Objective Case の場合には屢々省略されるのである。

以上述べた處から考へて見ると關係代名詞が Objective Case でない場合でも、語の配列順序によつて明かに其意味が判かる場合には關係代名詞を省く事があると云ふ事も想像が出來よう。今二三の例を擧ぐれば

This is all (*that*) there is in the purse.

＝財布にあるのは是れ丈。

It is he (*that*) is in the wrong.

＝彼の方だよ、惡いのは。

There is no one (*who*) knows it.

＝誰も知る人はない。

以上の事が解かつて見れば時を表はす關係副詞も屢々省略されると云ふ事が分る。

『彼は其日に死んだ』は　*He died* on the day.

『其女は彼が死んだ日に生れた』は

She was born on the day (*when* or *that*) *he died*.

"Who"や"Which"には以上述べたのと全く別な用法がある。今迄說明した處では、關係代名詞以下の Clause は其前にある語、即ち先行語の意味を形容する文章であつた、換言すれば形容詞の働きをする文であつたから、邦語に譯する時には必ず其 Clause の方から逆に溯つて譯をしなければならなかつた。そして是等の"who"や"which"は接續詞と代名詞との二つの働きを兼ねたものではあるけれども、是を別な二語に言ひ換へる事は出來なかつた。そして是等の關代係名詞の前

には Comma を打たなかつた。

然るに今茲で說かうとする今一つの用法〔假に第二の用法と名けて置く〕は今迄のとは全然違つたもので、譯する場合にも眞直に譯をし、且つ接續詞と代名詞とに書き替へる事も出來る。 そして此場合には關係代名詞の前に Comma をうつ。 例へば

I met a friend, *who* told me the news.....(*a*)

は

I met a friend, *and he* told me the news.

と同意義であるから『僕は一人の友人に逢つた、すると其友は僕に其報を告げた』と眞直に譯すべきものである。決して之を『僕は僕に其報を告げた友に逢つた』と譯す可きものではない。 夫では『僕は僕に其報を告げた友に逢つた』と云ふ意味を表はすには何う云へば可いか。『僕に其報を告げた友』と云へば『僕に其報を告げた』は『友』を形容する文であるから

I met *the* friend *who had told* me the news.....(*b*)

となる。 今 (*a*) (*b*) 兩文を比較して見れば、(*a*) の方では動作を表はす語を動作の順序の儘に書き連ねたのだから "met" も "told" も共に過去の形を使つたが、(*b*) の方では『報を告げた』と云ふ動作は『逢つた』と云ふ動作よりも以前に起つた動作であり乍ら、"met" と云ふ語よりも後に書いてある。だから "tell" の動作が "meet" の動作よりも以前に起つた動作だと云ふ事を知らしめんために "had told" と大過去の形にしたのである。 又 (*a*) では唯『一友に逢つた』と計りでは誰の事を云ふのか

分からぬから "*a* friend" と "a" を使つたが、(*b*) では『報を告げた友』と云へば定つた友の事であるから "the" を使つたのである。 又 (*a*) の方では "who" の前に Comma があるが、(*b*) の前には Comma がない。

詰まり第二の用法の "who" や "which" は接續詞と代名詞とを一語に代へた丈けのものである。"Who" を人に使ひ、"which" を物に使ふ事は第一の用法と同一である。 今

There is something like a pestle in the flower...(*c*)
(花の中には乳棒の樣なものがある)
It is called a pistil .....(*d*)
(それを雌蕊と云ふ)

の二文を結合しようと思ふ。 今度は物であるから "which" を使つて

In the flower there is something like a pestle, *which* is called a pistil .....(*e*)

と斯うするのである。 併し今度出來上つた (*e*) を見ると "in the flower" の位置が (*c*) の文とは違ふ。 是は關係代名詞は出來る丈け先行語に近づけなければならぬから "in the flower" を冒頭に置いて、"pestle" と "which" とを隣らしめたのである。 今又

I met a rickshaman on the way.....(*f*)
I employed him as my guide .....(*g*)

の二文を關係代名詞を使つて結合しようと思ふ。 (*g*) の "him" は (*f*) の "rickshaman" と同一人だから "him" を "whom" にかへて繋がなければならぬ。 然るに代

名詞の"him"は"employ"の目的であつて文章の中程に挿まれて居る。併し關係代名詞は接續詞の働きをするから"whom"を二文の繋ぎ目に置いて

On the way I met a rickshaman, *whom* I employed as my guide.

=途中で車夫に逢つたから道案内に雇うた。

とする。今二三の例を示せば

I went into the room.
There hung many pictures on the walls of the room.

I went into the room, *on the walls of which* there hung many pictures.

=其室へ這入つて見ると其壁には繪が澤山かゝつて居た。

He had five children.
All of them died young.

He had five children, *all of whom* died young.

=あの人には子供が五人あつたが皆若死にした。

He has two daughters.
Both of them are married.

He has two daughters, *both of whom* are married.

=娘が二人あるが、二人共片づいて居る。

以上の例では"who"や"which"が(*and*+代名詞)の場合丈けであつたが、其外に理由や目的を表はす事がある。

I will employ Kato, *who* understands English.

=I will employ Kato, *because he* understands English.

=加藤を雇はう、英語が分かるから。

The King, *who* was a merciful ruler, forgave them.

=The King forgave them, *for he* was a merciful ruler.

=其王は仁君だつたから彼等を赦した。

Envoys were sent, *who* should sue for peace.

=Envoys were sent, *that* they *might* sue for peace.

=和を乞はんが爲に使臣が遣はされた。

今迄は關係代名詞が名詞を先行語とした場合丈けであつたが"which"は又 Clause を受ける事もある。

He went to sea, *which* he did in order to improve his eye-sight.

=彼は水夫になつた、それは眼を善くする爲めであつた。

P. 138 で"that"は"who"や"which"の代用となると云ふ事を說いたが、"that"が是等の代用となり得るのは第一の用法の時計りで、第二の用法即ち眞直に譯する樣な場合には決して"that"を使つてはいけない。だから

I love my parents that are very kind to me.

の文章は誤である。何故かと云へば深切であらうがあるまいが兩親は兩親に違ひない。深切にして呉れる兩親と云ふ兩親が別にあらう筈がない、即ち"that are very kind to me"は"parents"の意味を制限する Clause ではないから

I love my parents, *who* are very kind to me.

としなければならない。

"What" も關係代名詞ではあるが "who," "which," "that" の如き純粹な關係代名詞ではなく、先行語と關係代名詞とを一語に兼ねたものである。場合によつて "the thing which," "those which," "all that" など色々な意味になる。

That is *what* (=the thing which) I want.
=是が即ち僕の入用な物。

Don't attempt to do *what* (=the thing which) is impossible.
=到底出來ない事はしようなどゝ企てるな。

I gave him *what* little money I had.
=I gave him *all* the little money *that* I had.
=少ない乍ら僕の持つてる丈けの金を皆彼にやつた。

I will do *what* (little) I can.
=及ばず乍ら出來る丈けやりませう。
〔"What" の次に "little" が無くとも其意味を表はす〕

I understand *what* you mean.
=君はどういふ事を言ふ積だか僕に分かつた。

He has made me *what* I am.
=僕が今の樣に成つたのも彼の御蔭だ。

He is not *what* he used to be.
=彼はもとの彼ではない。

He is *what they call* a lady-killer.
=彼は世間で云ふ女殺しさ。

He is young, energetic, and, *what is better*, a good scholar.
=彼は年は若いし精力は盛だし、更に結構な事には非常な學者と來て居る。

Japan is to Asia *what* England is to Europe.
=Japan is *that* to Asia *which* England is to Europe.
=日本が亞細亞に於けるは英國が歐羅巴に於けるが如し。

序に言ふ、最後の例の樣な比例の云ひ表はし方には色々ある。

A : B :: C : D.
A is to B *as* C is to D.
As C is to D, *so is* A to B.
A is *that* to B *which* C is to D.
A is to B *what* C is to D.
What C is to D, *that is* A to B.

"What" 以外にも先行語と關係代名詞との二つの働きを一語に兼ねた語がある。Indefinite Relative と名くるものは即ち是で "whatever," "whoever," "whichever" は是に屬する。そして "whoever" には格の變化がある。

Whatever =anything which.
Whoever =any one *who*.
Whosever=any one *whose*.
Whomever=any one *whom*.
Whichever=any that (三つ以上の時); either that (二つの時).

He succeeds in *whatever* (=anything that) he undertakes.

=彼が企てる事は何事でも成功する。

Whoever (=any one who) wishes to succeed, must persevere.

=成功しようと思ふ人は誰でも忍耐しなければならぬ。

He flatters *whosever* (=any one whose) father is rich.

=彼は金持の息子には誰にでも諂ふ。

Bring *whomever* (=any one whom) you like.

=君の好きな人誰なりとも連れて來給へ。

Choose *whichever* (=either that) you like.

=好きな方どちらなりとも採り給へ。

"Whoever" は "one who" よりも力が強い。

One who is contented is happy.
(滿足せるものは幸福なり)
Whoever comes, will be admitted.
(來る人は誰でも入場を許される)

初學者の中には "**whoever**" と "**whomever**" とを誤用する人がよくある。今『誰でも欲しい人には之をやる』といふ文を譯するに當つて "I will give it to ....." の次には孰れを用ひようか。"to" なる前置詞の次には目的格を置かなければならぬから "whomever" だらうと誤解する人が多い。處が "whoever," "whomever" の格の相違は次の文章に對する關係によつて定まるので、前の文章には何等の關係もない。若し其語が次の文章の主格になつて居る場合には "whoever" を用ひ、其次の文章の動詞や前置詞の目的になつて居る場合には "whomever" を使ふのである。即

ち "any one who" の時が "whoever" で、"any one whom" の時が "whomever" なのである。

I will give it to {any one *who* / *whoever*} wishes to have it.
(欲しい人には誰にでもやる)
I will give it to {any one *whom* / *whomever*} you like.
(君の好きな人誰にでもやる)

Bring *whoever* wants to come.
(來たい人は誰でも伴れて來い)
Bring *whomever* you meet.
(君が逢ふ人誰でも伴れて來い)

以上どの文を見ても "ever" の隨いた語は必ず兩方の文の主格や目的に成つて居る。併し若し是等の語の次に "may" が來ると關係代名詞の性質を失つて了つて其主文の主格や目的に成る事はない、即ち其主文は主格も目的も揃つた完全な文章でなければならぬ。そして言ひ表はす意味は結局同一の事でも "may" を用ひた構文の方が語勢が強い。

Whoever (=any one who) says so, is a liar.
(さう言ふ人は誰でも嘘吐きだ)
Whoever (=no matter who) *may* say so, *he* is a liar
(誰がさう言はうとも其人は嘘吐きだ)

He succeeds in *whatever* he undertakes.
(彼の企てる事は何事でも皆成功する)
Whatever he *may* undertake, he succeeds in *it*.
(何事を企てても彼は成功する)

"Whenever," "wherever," "however" は副詞ではあるけれども用法が似て居るから序に二三の例を擧げて置く。

You may go *wherever* (=to any place that) you like.

=君の望みの所何處へ行つても可い。

Whenever (=no matter where) you *may* go, you will be welcome.

=君は何處へ行かうとも歡迎されるよ。

I go to bed *whenever* I feel sleepy.

=ねむい時には何時でも床につく。

Whenever you *may* come, you will find my father at home.

=何時御出になりましても父は在宅です。

However hard he *may* work, he is sure to fail.

=どんなに勉强してもあの男は屹度失敗する。

〔"However" には第一の用法なし〕

關係代名詞には以上の外に "as," "but," "than" がある。

"As" は "such," "the same," "as" などと關聯して使ふのが普通である。

Choose *such* friends *as* can benefit you.

=Choose that sort of friends who can benefit you.

=君を益する樣な友を選べ。

I have bought *the same* watch *as* you have.

=僕は君のと同じ時計を買つた。

He is *as* honest a man *as* ever breathed.

=彼は誰にも劣らぬ正直者。

"As" も單獨に用ひられる場合には "which" に於けると等しく其 Antecedent が一語の事もあれば又 Clause の事もある〔參照: P. 147〕。そして "which" は必ず其受くる Clause の次に置かなければならぬが、"as" は文の冒頭に置く事もある、その時には Antecedent たるべき Clause は無論其後ろに來る。

We found that the Admiral, *as* we called him, was a very jolly fellow.

=附合つて見ると海軍大將(と僕等は彼を呼んで居たが、其海軍大將)は中々面白い男であつた。

The sea was frozen over, *as* frequently happens in those latitudes.

=海は氷結して居た、海が氷結する事は斯かる高緯度の地方にはよくある事だ。

As was often the case, he came home drunk.

=度々の事だつたが、其時も彼は醉つて歸つた。

"But" が關係代名詞となる場合には "that not" の意味で、打消語の次にしか使はれない。

There is *no* school-boy *but* knows it.

=There is *no* school-boy *that* does *not* know it.

=*Every* school-boy knows it.

=三尺の童子も皆之を知る。

There is *nothing*, however difficult, *but* can be conquered by perseverance.

=There is *no*thing *so* difficult *but* it can (=*that* it can *not*) be conquered by perseverance.

=However difficult a thing may be, it can be conquered by perseverance.

=どんな六ケしい事でも忍耐して出來ぬ事はない。

"Than" も關係代名詞として用ひられる事がある。次の例の "than" も關係代名詞である事は次の比較を見れば容易に理解が出來よう。

He has as much money *as* he can spend.

(使へる丈の金)

He has more money *than* he can spend.
(使ひ切れぬ程の金)

There is as much money *as* is needed.
(入用な丈の金)

There is more money *than* is needed.
(あり餘る程の金)

2.20

動詞
(VERB)

動詞は主格の有樣や動作を言ひ表はす語で、文章には缺く可からざる要素である。

He *is* a man. Birds *fly*.
I *know* him. A soldier *killed* him.

自動詞と他動詞

動詞が唯其主格の有樣や動作を言ひ表はす丈で他の人や物に作用を及ぼさない場合には其動詞を自動詞 (Intransitive Verb) と云ひ、他の人や物に作用する動詞を他動詞 (Transitive Verb) と云ふ。

Birds *sing*. The sun *shines*.
A cat can *see* at night.

中の "sing," "shine," "see" は自動詞で

We *struck* the dog.
Does he *speak* English?

に於ける "struck," "speak" は他動詞である。そして

なぐられた "dog" や、話さるゝ "English" は是等の動詞の目的 (Object) だと云ふ。

邦語文典にも動詞の自他があるけれども英文典の自他とは全く違ふから此兩者を混同せぬ樣に注意しなければならぬ。邦語では他の人や物を處分する意味の動詞が他動詞で、其意なきものが自動詞、『枝を折る』『箱をこはす』の『折る』『こはす』は他動詞で、『鳥は飛ぶ』『夏來る』の『飛ぶ』『來る』は自動詞、『川を渉る』の『渉る』は一見他動詞の樣ではあるが『渉る』は唯川に働きを及ぼし掛ける丈けで處分するのではないから自動詞だと說明する。これならば動詞の意味によつて其自他の區別を立てる事も出來ようが、英語では意味によつて其自他を定める事の出來ない場合がある、と云ふのは英語では同一の事でも自動詞で言ひ表はす事も他動詞で言ひ表はす事も出來る場合があるから。例へば

『學校へ出る』……{To *go* to school. / To *attend* school.}
『室に這入る』……{To *come* into a room. / To *enter* a room.}

に於て "go" や "come" は自動詞で、"attend" や "enter" は他動詞である。だから一番精確に定義を下せば

自動詞は其次に目的の來ない動詞
他動詞は其次に目的の來る動詞

と云ふより外に仕方はない。併し英語では大抵の動詞が皆自他を兼ねて居るから其使ひ分けを熟知する必要がある。例へば例に出した "attend" や "enter" も次の場合には自動詞となるのである。

You must att[illegible] your duties.

[illegible]話を始めた。

[illegible]中には人の目的 (Indirect Object) と物の目的 (Dire[illegible]ject) と、目的を二つとる動詞がある。或文法家

は此種の動詞を名けて Dative Verb と云ふ。此動詞を含む文章は二通りの書き方がある。

He gave *me* a *book*.
He gave a book *to me*.

Bring *me* some *water*.
Bring some water *to me*.

He made *me* a *kite*.
He made a kite *for me*.

しかし Direct Object が "it" の場合には夫れを最後に置かない、そして其時に Indirect Object も代名詞の時には "to" は度々省略される。

I gave *it* to the boy.
〔"I gave the boy *it*." とは云はない〕
I gave *it* (to) *him*.

二つ目的をとる動詞の主なるものは "give," "bring," "lend," "send," "sell," "pay," "tell," "write," "owe," "teach," "buy," "get" などである。Indirect Object を最後に置く場合には大抵は前置詞 "to" を使ふけれども、"buy," "get," "make" などには "for" を使ふ。

Complement.

自動詞の中には

Wind *blows*. Bells *ring*.

などの如く動詞丈けで完全に意味が表はされるが、"be" "become" などの如き N 動詞は夫れ丈けでは纏まつた意味をなさない。唯 "He is"; "He became"

と云つた丈けでは何を云ふのか少しも分からないから其意味を完全にする爲には其意味を補ふ言葉、即ち Complement (完成語、又は補缺語) を其次に置かなければならない。Complement と成る言葉は名詞、代名詞、形容詞などである。

He is *kind*. He is a *student*.
He became *rich*. He became a *merchant*.
It is *he*.＝其人は彼なんだ。
You look *pale*.＝君は顔色が悪い。
He fell *sick*.＝彼は病氣に成つた。
He went *mad*.＝彼は氣違ひに成つた。

此 "kind," "student," "rich," "merchant," "he," "pale," "sick," "mad" は皆 Complement である。

以上の外に Infinitive, Participle, Phrase, Clause も Complement になる。

He seems *to be* rich. 〔Infinitive〕
He sat *reading*. 〔Present Participle〕
He died *lamented*. 〔Past Participle〕
He is *at work*. 〔Phrase〕
He is not *what he used to be*. 〔Clause〕

是等の Complement は皆主格を説明した Complement であるから其格も主格と同じく Nominative Case でなければならない。之を Nominative Complement と云ふ。

I [illegible] *he*.＝其人は彼だつた。
I [illegible] ought to be *she*.＝其女だと思はれて居る。
[illegible] peared to be *he*.＝彼らしかつた。

Who do you think *I* am?

＝僕は誰だと君は思ふか。

だから第一人稱に於ても當然 "It is *I*." とす可き筈であるが現今では教育のある人でも皆 "It is *me*." と言ふから此形も正しい形と見做されて居る。

他動詞の中には Object をとつても尙且つ完全な意味をなさぬものがあるから、是にも亦 Complement を附ける必要がある。此種の動詞を名けて **Factitive Verb** と云ふ。例へば "I made her"; "I think him" では意味が通じないから其 Object を說明する **Objective Complement** を附けて

I made her *my wife*.

I think him *honest*.

などゝ云はなければならない。尙二三の例を擧ぐれば

I have named my son *Fujio*.

＝子供に不二男と名をつけた。

I found the book *interesting*.

＝其本を讀んで見たら面白かつた。

We knew *it* to be *him* by his gait.

＝歩き振りで其人は彼だと云ふ事は分かつて居た。

Whom do you think *me* to be?

＝君は僕を誰だと思つて居る

比較:—

(I thought *it* was *he*.....
(I thought *it* to be *him*. .....

(*a*) の "it" は主格で、(*b*) の "it" は "thought" の目的である。

Object は Subject の働きを受けるものだから Subject とは別ものであるが、Complement は Subject か又は Object を說明する語であるから是等と同一のものでなければならぬ。だから

(*a*) He became a *merchant*. (彼は商人に成つた)
(*b*) He killed a *merchant*. (彼は商人を殺した)

に於ても (*a*) の "merchant" は "He" と同一の人だから Complement で、(*b*) の "He" は殺した人、"merchant" は殺された人で異つた人の事だから此文の "merchant" は Object である。又

(*c*) I made him a *box*. (彼に箱を拵へてやつた)
(*d*) I made him a *servant*. (彼を下男にした)

に於ても "box" は "him" とは別なものだから Object で、"servant" は "him" と同一人だから Complement だと云ふ事が分かる。

Complement は意味を完全にする爲に必要缺くべからざるもので、譬へて言へば人體の手足の樣なものだから之を省略する事は出來ないが、Adverb は上着やズボンの樣なもの〔參照: P. 2〕だから之を省いても文章の意味に違ひはない。だから Predicate に Complement の Adjective を附けようか又は Adverb を附けようかと迷ふ場合には、何れを附けないでも意味が違はなければ Adverb を附け、若し附けなければ意味をなさぬとか又は意味が違ふ場合には Adjective を附ければ宜しい。

(*a*) It may sound *strange*, and yet it is true.
(其事は妙に聞こえるかもしれぬが夫れにも拘らず本當だ)

(b) The trumpet sounded *loudly*.
（喇叭の音が高くひゞいた）

(a) "It may sound" では其事が音がする意味、併しそんな不合理な事はないから Adjective の "strange" を附けるが、(b) は "The trumpet sounded"（喇叭の音がした）丈けで意味が通ずる、だから Adverb の "loudly" を附けたのである。

(c) He looked *haughty*.
（傲慢ちきな顔をして居た）

(d) He looked *haughtily* around.
（傲然と見廻した）

(e) I found the book *easily*.
（難作なく其本が見つけ出せた）

(f) I found the book *easy*.
（讀んで見たら其本は易しかつた）

(e) の "easily" は副詞だから "found" なる動詞を形容し、(f) の "easy" は形容詞だから "book" なる名詞を形容す。

This wine tastes *bad*.
＝此葡萄酒はまづい。

The child seems *sickly*.
＝此子は病身らしい。〔"Sickly" は Adjective〕

自動詞として用ひられたる他動詞

I. Transitive Verb の Object を略して Intransitive に使ふ事がある。之を大別すれば (a) 一般の物を目的語とする爲に省略する場合、及び (b) 目的語が何物を指すかを言ふ必要のない場合。

The cat can *see* in the dark.
＝猫は暗闇でも物が見える。

He can neither *read* nor *write*.
＝彼は讀む事も書く事も出來ぬ。

This tree will *bear* [fruit] next year.
＝此樹は來年は實がなる。

This hen has begun to *lay* [eggs].
＝此牝鶏は卵を産み出した。

It is more blessed to *give* than to *receive*.
＝與ふるは受くるよりも幸福なり。

This road *leads* to the station.
＝此の道は停車場へ行く道だ。

Idleness *leads* to ruin.
＝懶けると終には身を滅ぼす樣になる。

Every shot *told*.
＝うつ銃丸が皆功を奏した、百發百中。

I will undertake the work, if it *pays*.
＝引合ふ仕事なら引受けよう。

Anybody *will do* [the business].
＝誰でも間に合ふ。

I will *send* [a messenger] for a copy.
＝一部取りにやらう。

II. Transitive Verb が Passive の意味に用ひられたる場合。

This book *sells* very well.
＝此本は非常によく賣れる。

The house is *building* (=is being built).
＝其家は建築中です。

This stuff *wears* well.
＝此の地は保ちがよい。

Will this meat *keep* overnight?
＝此肉は明日まで保てるだらうか。

The rose *smells* sweet.

=The rose is sweet, when it is smelt.

=薔薇はよい匂がする。

The students *numbered* six hundred.

=The students were found to be six hundred in number, when they were numbered

=生徒は六百人だつた。

I *weigh* just one hundred pounds.

=僕は目方が丁度十二貫ある。

III. Reflexive Object の省かれて熟語となりたる場合。

The ship *put to sea*.

(=The ship put herself to sea.)

=其船は出帆した。

I can not *get over* my cold.

=僕はどうしても風邪が治らぬ。

They *set out* (=set themselves out) for Nikko.

=彼等は日光へ向けて出發した。

I will go and see for myself, to *make sure* (=to make myself sure) of the fact.

=其事實を慥めに(念の爲)自分でいつて見よう。

The enemy *held out* for a long time.

=敵兵は久しい間持ちこたへた。

他動詞として用ひられたる自動詞

Intransitive Verb が Transitive Verb として用ひられる事がある。

I. Intransitive Verb が『させる』意味に用ひられた場合。

I *ran* a rope through it.

=僕は繩を通した。

He *swam* his horse across the river.

=彼は川を乘り切つた。

I *stood* the boy by the door.

=私は其の子を戸のそばに立たせた。

II. Intransitive Verb が同意義若しくは類意義の名詞を目的とした場合。〔此場合の動詞を Cognate Verb; 目的を Cognate Object と云ふ〕

He *lived* a happy *life*.

=He lived happily.

=彼は幸福な生涯を送つた。

He *slept* the *sleep* that knows no waking.

=彼は覺むる事なき眠りに就いた。〔即ち〕彼は死んだ。

A great *battle* was *fought*.

=大戰爭があつた。

I will *fight it* out.

(=I will fight the fight out.)

=最後まで戰つて勝負を決しよう。

She *sang* her sweetest.

=She sang her sweet st song.

=其時の歌は一番上出來であつた。

He *breathed* his last (*breath*).

=息を引取つた。

He *looked* [a look of] thanks.

=目で御禮をいつた、感謝の意を顏に表はした。

When I asked him, he *nodded* [a nod of] assent,

=私が頼んだら默頭いて承諾した。

Always *do* your best [doing]. = 常に全力を盡せよ。

I hope to have *seen* the last [sight] of him.

=是が彼の見納めならよい。

〔最後の二例は他動詞だけれども似た形だから擧げて置く〕。

III. Intransitive Verb が Adjective や Adverb や Phrase と結びついて Transitive Verb となる場合。

You had better *sleep off* your fatigue.

=君は寢て疲を拔いた方がよい。

You must not *dream* your life *away*.

=君は醉生夢死してはならぬ。

We *talked* a night *away*.

=一晩を語り明かした。

I *sat out* the play.

=僕は其芝居を仕舞まで見た。

I will *look up* this word in that dictionary.

=此語をあの辭書でひいて見よう。

The nurse *sang* the baby *to sleep*.

=乳母は歌をうたつて赤ん坊を寢附かせた。

I *talked* him *into* compliance.

=I talked and made him comply.

=口車に乘せて彼に承諾させた。

The teacher *frowned* the children *into* silence.

=教師は顰面して其子供を靜かにさせた。

You can not *laugh* me *out of* my resolution.

=However you may laugh, I will not give up my resolution.

=君はどんなに笑つても僕は決心を譲さぬ。

I *reasoned* him *out of* his fears.

=僕は道理を說いて彼の懸念を捨てさせた。

He *talked* himself *hoarse* (=made himself hoarse by talking)

=彼は喋つて聲を嗄らした。

He *laughed* himself *red* in the face.

=彼は笑つて顏が赤く成つた。

The baby *cried* itself *to* sleep.

=赤ん坊が泣寢入した。

She *worried* herself *into* consumption.

=あの女はクヨクヨ心配して肺病に成つた。

I *ran* myself *out of* breath.

=僕は走つて息が切れた。

Idiomatic Transitive.

無生物や抽象名詞が文章の主格になつて生物に働きをしかけるなどといふ事は邦語には珍らしい言ひ方だが、英語では極く普通の事で、さう云ふ風な言ひ方をした方が英語らしい英語に成る。例を擧ぐれば

What *made* him angry?

之を逐語譯すれば『何事が彼を怒らせたか』となるけれども邦語ではさうは云はない、是非自動詞を使つて『何故あの人はおこつたか』と云はなければならぬ。即ち此文は

Why did he get angry?

と同じ意味ではあるが他動詞を使つた方が氣の利いた言ひ方である。

His haughtiness *makes* him unpopular.

=He is not popular, because he is haughty.

=あの人は威張るから人望が無い。

The bare idea *shudders* me.

=I shudder at the bare idea.

=其事を考へた丈けでゾッとする。

What has *brought* you here?

=What have you come here for?

=君は何用で此處へ來たか。

Illness *prevented* me from going abroad.

=I could not go abroad on account of illness.

=僕は病氣で洋行が出來なかつた。

He *reminds* me of his dead father.

=When I see him, I think of his dead father.

=彼を見ると彼の死んだ父を思ひ出す。

Their ignorance *surprises* me.

=I am surprised at their ignorance.

=あの人達の無學には驚く。

The noise and confusion *drove* me out of the house.

=I could not stay in the house on account of the noise and confusion.

=騷動と混雜とで僕は家の中に居れなかつた。

His wealth *enables* him to do anything.

=He can do anything, because he is wealthy.

=彼は金持だから何でも出來る。

A good night's rest will *set* you right.

=If you take a good night's rest, you will be all right.

=一晩よく休めば癒ります。

The next day *saw* [or *found*] us on our way home.

=We started for home the next day.

=其翌日僕等は歸途に就いた。

動詞の人稱と數

凡て動詞は其主格の人稱と數とに一致した形を使はなければならぬ、とは云ふものゝ"be"以外の動詞に於ては唯第三人稱の單數の事を現在で言ひ表はす場合に其語尾に"s"を附ける丈けの事で其他には何等の變化も

ない。語尾に"s"を附けるのには名詞を複數にする場合と同じ規則に從ふ〔參照: P. 5〕、但し"have"は"haves"とせずして"has"とする。

(To **be**)

第一人稱	I *am*	We *are*
第二人稱	You *are*	You *are*
第三人稱	He, She, It *is*	They *are*

(To **come**)

第一人稱	I, You *come*	We *come*
第二人稱		You *come*
第三人稱	He, She, It *comes*	They *come*

過去の場合には

(To **be**)

第一人稱	I *was*	We *were*
第二人稱	You *were*	You *were*
第三人稱	He, She, It *was*	They *were*

(To **come**)

第一人稱	I, You, He, She, It *came*	We *came*
第二人稱		You *came*
第三人稱		They *came*

但し助動詞は第三人稱の單數の場合でも變化を受けない。例へば

I / You / He } *need* not go.

今言ふ通り複數の名詞は複數の動詞で之を受け、單數名詞は單數動詞で之を受くべき筈ではあるが、形は單數でも意味が複數の事もあれば、又形は複數でも單數の意味の事もある。斯くの如き場合には其單數複數は意味に依つて之を定む可きものであつて、形によつて之を定むべきものではない。

(a) A hundred *miles is* not a short distance.

＝百哩といふ距離は短い距離ではない。

此文の "A hundred miles" は形は複數であるけれども其意味は單數である。百哩といふ澤山なものがあるのではなくして唯百哩と云ふ一つの距離を表はすに過ぎない、卽ち "*the distance* of a hundred miles" といふ意味であるから單數の "is" で受けたのである。距離のみならず價格、時間等も皆同樣に取扱ふべきものである。

Two hundred *dollars is* not a small sum of money.

＝二百弗といふ金は少額の金ではない。

Six *months is* too short a time to learn it.

＝六ケ月では覺えられない。

但し

Six *months have elapsed* 〔又は *passed*〕 since he died.

＝彼が死んでから六ケ月に成る。

(b) Curry *and* rice *is* his favourite food.

＝ライスカリは彼の好きな食物である。

二つの名詞を "and" で結び附けたのは複數なのが當り前である。"He *and* I" ならば "we" の意味だから

He *and* I *have* been intimate friends since our school-days.

＝彼と私とは學校時代からの親友です。

と "have" を用ひる。斯うなるのが當り前であるが玆にあげた文章では『ライス』と『カリ』と二つの別な物でなくてライスとカリとをまぜた一つの食物である、卽ち形は複數であるが意味は單數であるから "is" を使つたのである。

Whose *is* this watch *and* chain?

＝此鎖附きの時計は誰のか。

The scholar *and* poet *is* dead.

＝學者にして詩人たりし其人や今は無し。

比較:—

The scholar *and the* poet *are* dead.

＝其學者と其詩人とは死にました。

Slow *and* steady *wins* the race.

＝One who is slow and steady wins the race.

＝遲くとも撓まぬものが競走に勝つ。

The ebb *and* flow of the tides *is* due to the gravitation of the moon.

＝潮の滿干は月の引力の爲だ。

此 "ebb" と "flow" とは表面から見たのと裏面から見たとの違ひこそあれ結局一つの事を云ふのだから單數の "is" で之を受けたのである。

(c) 結合された二つの名詞が全く異れる人又は物の場

合でも、各の名詞の前に "no," "each," "every" が來た場合には假令 "and" で結合してあつても之を單數として取扱ふ。

No sound *and no* voice *was* heard.

=聲も音も聞こえなかつた。

Each man *and each* boy *was* assigned to his proper work.

=大人も子供も各自適當な仕事を割當てられた。

Every emotion *and every* operation of the mind *has* a corresponding expression of the countenance.

=各の感情、各の心の働きは皆夫々顏に表はるゝものである。

(d) *He as well as* his brother *was* arrested.

=彼の兄のみならず彼も亦拘引された。

"A *as well as* B" は "*not only* B *but* A" と同じく『Bは無論の事 A も』といふ意味である。此文章の主なる部分は "He was arrested" で "his brother" は唯御附合ひに出た客に過ぎないから "He" 丈けを受けて "has" としたのである。"As well as" を "and" と同じものだと思ふのは誤解である。

(e) Either you *or* he *has* done it.

=君かあの人かゝやつたのだ。

是は

Either you (have done it) or he has done it.

を簡單にした形である。凡そ二語が "or" や "nor" で結合された場合には其動詞は常に "or," "nor" の次に來る主格と一致し、始めの主格からは少しの影響も受けない。

(f) 集合名詞は場合によつて單數の意味の事もあれば複數の意味の事もあるから明かに其處の見わけを附けなければならぬ。〔參照: P. 25〕

(イ) *People say* that he is rich.

=あの人は金滿家だと云ふ噂だ。

(ロ) A civilized *people knows* its own interests.

=文明國民はおのが利害を知る。

(イ) の "people" は世間一般の『人々』を指すので、一の團體を示すのではない。唯世間の人々が箇々別々に話し合ふのであるから意味は複數であるが、(ロ) の "people" は一國民として、一の團體としての話であるから單數の意味である。

(ハ) The *infantry was* victorious. infantry ヲ敢容ク

=其歩兵隊は勝利を得た。

(ニ) The *infantry were* at dinner.

=其歩兵どもは御飯を食べて居た。

(ハ) の "infantry" は一の團體と見た場合である。成程其戰爭で其部隊の中には死者もあらう負傷者もあらう、箇人として見たらば隨分悲慘な目に逢つたものもあらう、或は其隊の半數以上も殺されたかも知れない、が併し兎に角其隊全體の働きとしては勝利を得たのである。勝敗は箇人々々の問題でなく團體の問題である。

(ニ)に於ては團體其物が食べたのではなくて、其團體を組立つる各員が皆々打ち揃うて食べたのである。詰まり此場合の "infantry" は "*all the soldiers of* the infantry" の意味になる。今二三の例を擧くれば

His *family is* large.
(家族が多い)〔大きい團體〕
His *family are* all well.
(あの人の内では皆達者です)
〔健康不健康は箇人々々の狀態〕

The *number* of the students *has* increased.
(生徒の數が增した)
A great *number* of (=many) ladies *were* present.
(婦人の方が大勢出席して居た)

The *committee were* divided in their opinions.
(委員の意見がわかれた)
The *committee consists* of twelve members.
(委員は十二人よりなる)

しかし英米人でも紛れる事があると見えて隨分亂暴な書き方をしたのがある。嘗て見たうちで最も面白く感じたのは "Tom Brown's School-days" に

Then *the crowd laughs* vehemently and *invents* nicknames for them.

と單數にして書いてあると思へば其次のページには複數にして

The *crowd*, of course, first *cheer*, then *chaff* as usual.

と書いてある。

動詞の三段變化

邦語の動詞には將然、連用、終止、連體、既然の五段變化があつて夫れに助動詞を附けて色々な事を言ひ表はすのであるが、英語動詞の變化は三つある。

動詞は最も多く其形を變ずる語類ではあるが其どの形も皆此三つの形から作るものであるから是等を名けて動詞の主要なる形、即ち Principal Parts と云ふ。其主要なる形とは **Root-Form** (原形), **Past Tense** (過去) 及び **Past Participle** (過去分詞)の三つである。

此三つの形で十二通りの時 (Tense) や其被働 (Passive) の形を言ひ表はすのには必ずや**助動詞** (Auxiliary Verb) の助を借りなければならない。助動詞の主なるものは

Do.	Have.
Shall.	Be.
Will.	Ought.
May.	Dare.
Can.	Need.
Must.	

Root-Form は動詞の原形であつて之に "to" を加へると Infinitive になる。其用法は

(a) 其儘の姿で現在を表はす。

See.....I *see* a bird in the cage.

但し "Be" は其例外で I *am*; you *are*; he *is*; we *are*; you *are*; they *are* となる。

(b) 命令法を作る。〔參照: 253〕

(c) 助動詞 "do," "will," "shall," "may," "can," "must" の次に置く。

(d) 他動詞の Complement となる。〔參照: P. 264〕

(e) 其語尾に "-ing" を加へて Present Participle (現在分詞) を作る。〔參照: P. 266〕

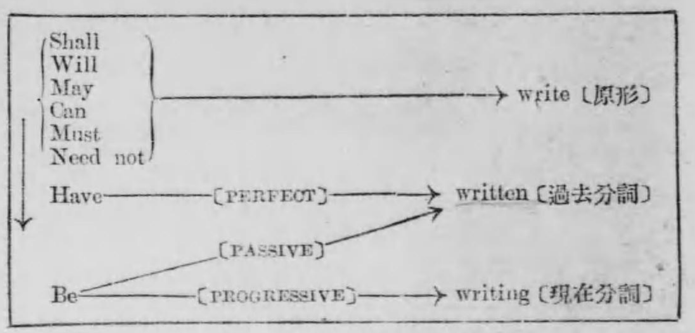
Past Tense は其儘で過去の形と成る。

Past Participle は

(a) "Be" と共に用ひて Passive を表はし、

(b) "Have" と共に用ひて Perfect Tense を作る。

助動詞のくっつけ方を表にすれば



注意:—

(1) "Shall", "will," "may," "can," "must," "need not" に從ふ形は Root-form に限る。だから

He may *has* done so.

He can not *has* done so.

は共に誤である。必ず

He may *have* done so. (彼は左樣したかも知れぬ)

He can not *have* done so. (そんな事をした筈がない)

としなければならぬ。

(2) "Be" の次に Root-form が來る事は決して無い。初學者の中には『僕は林檎が好きである』を "I *am* like apples." と譯する人が隨分あるが、是は『ある』とあるから "am" を使つたのであらう。併し若し『僕は林檎を好む』と云へば其人達も屹度 "I *like* apples." と譯するに違ひない。併し『好きである』『好きだ』『好む』は皆同じ事ではないか。"Be" を "like" の前に置けば『似て居る』意味に成つて了ふ。日本學生が此誤を繰返すのは

I *am fond of* it=I *like* it.

He *is afraid of* it=he *fears* it.

などの如き (Be+形容詞+前置詞=動詞) の場合と是とを混同するからであらうと思はれる。

規則動詞と不規則動詞

Root-form の語尾に "-ed" を附けると Past にもなれば Past Participle にも成る動詞を名けて規則動詞 (Regular Verb) と云ふ。即ち規則動詞の Past と Past Participle は同一の形である。

Learn—learn*ed*—learn*ed*.

Attend—attend*ed*—attend*ed*.

但し

(a) 語尾に "e" が有れば "d" 丈けを附ける。

Live—liv*ed*—liv*ed*.

Like—lik*ed*—lik*ed*.

(b) 一つの母韻字と一つの子韻字で終る單節語は其子韻字を今一つ重ねて然る後に "-ed" を加へる。

Stop—stop*ped*. 〔但し Stoop—stooped〕

Stir—stir*red*. 〔但し Tire—tired〕

(c) 一つの母韻字と一つの子韻字で終る二節語の終節に Accent が有れば其子韻字を重ねて然る後 "-ed" を附ける。

Admit′—admit*ted*. 〔但し Lim′it—limited〕
Inter′—inter*red*. 〔但し En′ter—entered〕
Occur′—occur*red*. 〔但し Con′quer—conquered〕

(d) 子韻字と"y"で終る語は"y"を"i"に換へて然る後"-ed"を加へる。

Study—stud*ied*. 〔但し Stay—stayed〕
Pity—pit*ied*.

(e) 語尾が濁音の時には"-ed"を"d"と發音し、語尾が清音の時には"t"と發音する、但し語尾が"t"又は"d"の時には"-ed"と發音する。("ch"の時はどうか?)

Root-form の語尾に"-ed"を附けても Past 及び Past Participle の形に成らぬものがある。之を名けて**不規則動詞** (Irregular Verb) と云ふ。

Go—went—gone.
Sit—sat—sat.
Let—let—let.

不規則動詞とは云ふものゝ其變化が頗る規則的であるから容易く記憶が出來る。日常用ひらるゝ語に不規則動詞が隨分澤山あるから早く覺えて貰ひ度い。不規則動詞の變化はどの字引の終りにも掲げてあるから茲には省く。

Active と Passive.

文章の主格が他のものに動作をし掛ける形を Active Voice (授働態) と云ふ。

He painted the picture.
=彼が其繪をかいた。
He put out the light.
=彼は灯を消した。

二文共に"He"なる主格が働いて"picture"や"light"に動作を及ぼしかける形である。

是に反して文章の主格が何か他のものゝ働きを受ける形を名けて Passive Voice (被働態) と云ふ。

The picture was painted by Hokusai.
=此畫は北齋がかいたのだ。
The light was put out.
=灯が消された。

"Picture"は畫かれたもので、畫いた人は北齋、"light"も獨手に消えたのでなくて誰れかに消されたのである。

當然 Passive で言ふ可き場合にも邦語では Active の形をつかふ事が多い。例へば『石盤は石にて作る』なども邦語では Active で云ふが英語では必ず Passive にして

A slate *is made* of stone.

と言はなければならぬ。又邦語では必ず自動詞を使ふ場合にも英語では Passive を使ふ事がある。一二の例を擧ぐれば

He *was surprised* at my sudden return.
=僕が突然歸つたので彼はびつくりして居た。
She *was taken* ill.
=その女は病氣にかゝつた。

英語では他動詞を用ひて自動詞の意味を表はす事があるが、其場合には其動詞を Passive にするか又は Reflexive Object を其次に附ける〔參照: P. 162〕。例へば"seat"は他動詞であるから之を以て自動詞の意味を表はさん爲には"be seated"の形か又は"seat oneself"の形を使はなければならぬ。

He seated himself = he sat down. (腰掛けた)……〔動作〕
He was seated = he was sitting. (腰掛けて居た)……〔有樣〕
He concealed himself in a cottage. (隱れた)……〔動作〕
He was concealed in a cottage. (隱れて居た)……〔有樣〕

"To revenge"『復讐する』といふ語は普通 Passive の形にするか又は Reflexive Pronoun を其 Object として用ひる。而して仇打たるゝ人の前には "on" 又は "upon" なる前置詞を置いて

They all resolved *to be revenged* upon the enemy for this cruel deed.

＝此殘酷な行爲に對して彼等は敵に復讐せんと決心した。

I will *revenge myself* (on him).

＝僕は(彼に)復讐してやらう。

Passive のつくり方

Active は他のものに働きを及ぼしかけると云ふ事を言ひ表はし、Passive は他より働きを受け『……される』といふ事をいひ表はす形であるからして、Passive の形を作るのには

他動詞の目的を主格とし Active の主格を "by" の目的とする。そして Active 動詞の過去分詞の前に "be" 動詞を加へて其動詞とする。

Everybody *loves* him. = He *is loved by* everybody.

Watt *invented* the steam-engine.

= The steam-engine *was invented by* Watt.

His brother *gave me* a *book*.

= { *A book was given* me *by* his brother.
{ *I was given* a book *by* his brother.

Passive 動詞の行爲者は "by" を以て之を示し、道具の前には "with" を使ふ。

He was killed { *by* his enemy.
{ *with* a sword.

行爲者は必ずしも人間でなくとも宜しい。Active の文章の主格ならば生物でも無生物でも皆等しく "by" を附ける事が出來る。

A stone fell and *killed* him on the spot.

＝石が落ちて來て彼は即死した。

に於ても "stone" は無生物だけれども彼を殺すといふ動作をしたのだから

He was killed *by a stone*.

とする事が出來る。若しこれが

He was killed *with a stone*.

とあれば『誰かが石を投げて彼を殺した』事となる。

比較:—

The city was destroyed *by fire*.
(火事で其市が燒けた)
The city was destroyed *with fire*.
(誰かゝ火を放つて其市を燒いた)

若し Active Voice の主格が漠然たる意味を表はす語ならば Passive の時には之を省いて了ふ。

Mr. A. teaches us. = We are taught *by Mr. A.*

He teaches us. = We are taught *by him*.

They teach English in that school.

= English is taught in that school.

最後の例に於て決して "by them" と云つてはならぬ。"They" は定まれる人を指すのではなくして漠然と其學校の教職にある人を指すのだから斯う云ふ代名詞は Passive の場合には省いて了ふ。なほ二三の例を示さば

You ought not to do such a thing.

=Such a thing ought not to be done.

In Japan *we* drink tea without sugar.

=In Japan tea is drunk without sugar.

People say that he is very rich.

=It is said that he is very rich.

They speak well of him.

=He is well spoken of.

之と反對に "by" の附かない Passive の文章を Active になほす場合にも適當な主格を附けなければならぬ。

He has not been heard of since.

= *We* have not heard of him since.

English must be spoken in class.

= *You* must speak English in class.

A history has been written.

=*Somebody* has written a history.

"I think that....." の Passive は "It seems (to me) that....." で、"It is thought by me that....." とは決して云はない。

I think that he is kind.

=*It seems* that he is kind.

話が元に返るが、それでは行爲者は常に "by" を以て

之を表はすかと云ふとさうでない場合もある。其最も著しい例は "know" で、"be known" の次には "to" を使つて "by" は使はぬ。

Everybody in this town knows him.

=He *is known to* everybody in this town.

若し "be known" の次に "by" を置けば判斷する意味になつて了ふ。

A man *is known by* the company he keeps.

=人は交る友によつて其人物が判斷されるものだ。

次の動詞を Passive にする場合には生物の前には "by" を置き、無生物の前には "with" を置いて其の行爲者を示す。

{*Seized by* some people.
{*Seized with* an illness, a panic, &c.

{*Attended by* one's servants.
{*Attended with* danger, pain, results, &c.

{*Attacked by* the enemy.
{*Attac* h some disease.

{ a person.
ith terror or wonder.

助 い場合には其動詞の Tense や Number に
従 を色々と變化させなければならぬが、助動
詞 合には其本動詞の過去分詞の前に "be" 又
は 〔參照: P. 174〕 を置き其前に助動詞を置け
。助動詞は大抵の場合にはもとの儘でよいけ

れども "will," "shall" は人稱によつて變化するから注意を要する。(二つ乃至三つの助動詞がある場合にはどれが本動詞でどれが助動詞かと迷ふ人もあるかもしれぬが本動詞は常に最後の分で其前にあるのは皆助動詞である)。

All *love* him.=He *is loved* by all.

All *loved* him.=He *was loved* by all.

They *have opened* the door.

=The door *has been opened*.

We *shall* soon *know* it.=It *will* soon *be known*.

He will *do* it.=It will *be done* (by him).

I *will do* it.=It *shall be done*. 〔參照: P. 213〕

You need not *do* it.=It need not *be done*.

He can not have *done* such a thing.

=Such a thing can not have *been done*.

He may have *written* it.

=It may have *been written* by him.

If I had been there, they *would* have killed me.

=If I had been there, I *should* have *been killed*.

併し Progressive の Passive はどうするか。

He *is teaching* us English.

=We *are being taught* English by him.....(A)

They *were building* a ship.

=A ship *was being built*..... (B)

(A)(B) 兩文とも文法上から見れば正しいが『ゐ

いふ字が二つ重なつて聞苦しいから此形は可成避けて Active を使つた方がよい。若し强ひて "We" を (A) の主格にしたいとならば

We *are learning* English from him.

とすればよい。(B) の文章の樣に無生物が主格になつて居れば船が物を造るなどと思ひ間違へる人は無いから

A ship *is building*.

と Active の形で Passive の意に用ひられる事が多い。〔參照: P. 161〕

Drums *are beating*.

Trumpets *were sounding*.

併し (A) の樣な場合にこんな事をしたら大變。どちらが先生でどちらが御弟子なのか分からなく成つて了ふ。

Progressive Future や Progressive Future Perfect の Passive の形を作つて見ると

We shall have *been being taught* English for five years by April next.

The ship will *be being* built next April.

などいふ妙な形になるから斯んな形は一切使はずに、Active か又は他の言葉を以て其考を言ひ表はす。

We shall have *been learning* English for five years by April next.

=來年の四月までやれば英語を五年やる事になる。